許、上川原附近にては、彼の東にありて彼と並行して流るる林。川を併せて椹保川となり、其下流は又分れて海に入るなり

の異なるは人の知る所なり。是れ數百年來祖先の土地に固着せる住民の地學的智識の限隘なる自然の結果なり。新らしき日本の地圖には此川は是よりは餘程人の一般的に知る名を以て記され、椹保川 Ihibo gawaとも稱へらるるなり。是れ此川は其大徑路に於て、凡そ其半分は東椹保郡・西椹保郡 Bezirk Ihibo を貫流すればなり。彼は播磨の最北部なる穴栗(シサハ)郡 Bezirk Sisawa に接近する但馬國(タヂマ) Tatsima の養父(ヤブ)郡 Bezirk Jabu の高山より發し、播磨及び但馬の特別地圖には此國界なる山脈は其中の最も挺(スキ)でたる高嶺のみ記されたるが、其中道谷峠(トーダニトーゲ) Totani toge・戸倉峠(トクラトーゲ) Tokura toge は椹保川の水源に最も近し。此山脈は我推測にては海抜六千尺には過ぎざるが、その北の傾斜よりは但馬の最大川にして二支流のある竹田川(タケダガワ) Takedagawa ○田山 發源するなり。椹保川は東より西へ凡そ五本の大なる山川を容れ、雨期には汎濫し。網干(アボシ) Abosi と鹽濱(シホハマ) Sioha-

maとの間には船も通り。そこには渡場もあり。

我等は一ッの松の茂る邱の麓に石塊を敷詰めたる弘き川床にそひて其右岸なる正條村に至り、午餐を取りしが、そこの旅亭のよき接待と清潔とは驚くに堪えたるものなりき。十二時後に出發し、小舟にて直(アキ)・村の下なる正條河を渡り、こゝより龍野の城あるを望む。城は山陽道なる大街道の彼處(アナタ)にて、同く此川の右岸にあり。本流の左へ流るゝ一支流には低き木の橋かゝり、兩橋頭には砂を充たせる藁袋を以て胸壁を築けり。我等は今や大街道にかゝれり。風景絶佳なり。よく手の入りたる道路は綠の蒔畝(マキウネ)・菜園の旁(ソバ)にて、我鄉里の公園地内を遊歩するに比ぶべし。それは宛然(サナガラ)・迂廻曲折する毎に旅人に新き景色を捧げて、それを驚かす樣、故意に作りたらんが如し。日本人は甚だ多く美しき眺望に心寄するなり。其別莊を設くるにも、周圍の景趣を其庭園に取籠みて、一ッの調和したる總景を作ら

んと心を盡すなり。此處には高き杉を以て、彼處には竹の林を以て、又人工に造り上げし邱に躑躅又は委松を植えて、近邊の邪魔物を掩ひ藏くしながら、畫に描けるが如き山・寺・又は泉を懸けたる巖石を更に明るき光線に露はし出さんとす。支那より渡來せる佛僧はその師匠なり。全國に行渡れるその寺院・特に魅するが如く美しき寺の森はその手本なり。いと美事なる觀賞植物の數百は昔時は神佛の奉仕に誘はれて隣國より移り來て、今は日本の花卉を混同して私の庭園を飾りまた公けの庭園を飾るなり。此の絶えて優しき地方に於て余は初めて雲雀 Alauda japonica の久しく聞かざりし歌を聞けり。是れ余をして鄉里に於て過ごせし若き時を甘く快く追懷せしめて、余の樂き感情を彌が上にも昂めたり。此雲雀は日本に一般に廣がり居りて。一見しては山雲雀に似たれども、それよりは形大きく、それよりは強き嘴・長き尾を具へ、且紛ふ方なき色の相異ありて、却つて我が野雲雀に近く、而もそれよ

りは少なく、尾にはそれより多く白き毛を具ふれども、其生活・其囀ずる歌は日本に於ける我鄉の野雲雀なり。日本には其他に告天子の種類多くて、人は其五種を區別す。一ッ莖雲雀 Kukihibari・二ッ角雲雀 Kaku-hibari・三ッ百齡雲雀 Hiakrei-hibari・四ッ黃雲雀 Kiihibari・五ッ田雲雀 Ta-hibari 是れなり。此は日本の萬有學者の擧げたる種類なるが、露西亞の東西比利亞旅行者・カムチャッカ旅行者の見たるものと大抵・相一致することと疑なし。田雲雀は恐らくは年初に屢稻田に見る Anthus protensis なるべし。

阿曾村の傍にて我等は今は小くして處々に渡渉すべき同名の河を越えて、釜屋 Kamaja・斑鳩 Ikaruga・山田 Jamata・網干 Awosi を通り、二三淺き川を渡り、遂に姫路を兩支流の間に挾む市川 Itsigawa の右岸に達し、その石塊に被はれたる川床を越えて、姫路の前驛に至れり。姫路市は既に遠方より播磨藩侯の治所なる白堊のきらめく城によりて之を知るべ

く。我等は森々として静かに次第に都市となり行く街路を貫き、十五分後には其城下なる市街の大閭門に至りたり。街路には兩側ともに商戸滿ち、店には秩序よく戸及び窓を開けて、商品を見するため押並べてあり。住民は各〻戸邊に集り。横町筋は綱にて立切り。『下に』『下に』の呼聲は我等を迎へたり。我乘物に先驅する藩侯の兵士に呼立てられて、人はすべて地に蹲り、秩序の行はれたること賞むるに足り、法律の森嚴は人民の最高く緊張せる好奇心を勒制したり。

姫路の天産物

我等は僅に二三の町筋を行きて旅宿に達せり、城内なる市區にあり。余は門人行齋 Kosai・**將監** Siogen（いふ。シーボルト門人將監は他の人なるべし）に囑して市中に天産物を巡見せしむ。獲物は左程ならず。龍骨と稱（ダ、）へたる鹿の脊椎骨の化石に過ぎざりしが。後に又余は江戸（ホ）にて溝を穿るときに得たりと言ふ殆んど全體の鹿骼の（〇寫生圖を得たり。彼等は又雪白の鷺（ヒヨドリ）の小さきを齎し來りたるが、極めて希な

（前文第百頁參照。古川家は代々宗家家老格の出なり。將監も此頃の重臣にて、文政の中頃より元治元年頃まで宗家の家老なりと

りと云ひて、代價恐ろしく貴かりしかば、珍らしとは思ひながら購はずして止みたり。なほ日本人の目には珍しと見えし植物、南天竹の翼の如き枝なる葉形が、卵圓ならず尖りて畸形的變種なるものあり。梅樹の様々の花を着けて、白きもの、薄紅なるもの、單瓣なるもの、重瓣なるものあり。桃・櫻の數種及び變種などあり。又黄梅の枝の葉なくして黄な花に包まれたるものにて、余が前に Jasminum præcox（茉莉）として記載せしものあり。是れ今正に庭を飾る最も珍しきものなり。特に余を喜ばせたるは門人どもの買ひ來りし數冊の書物及び此市の圖なり。其の中に播磨名所記といへる歷史・地理の書物にて、播磨の注目すべき地方及び箇所につきて記載したるものもありたり。**姫路の城**

姫路は播磨藩の印南（イナミ）郡 Inami に、市川に沿ひてあり。川は市の上にて兩つに分れて市を一ッの島となしたり（〇東なるを本流（市川）と西なるを姉背川といふ。江戸の天文方の觀測によれば、北緯三十四度六十分三十秒・都（〇京都）西經一度一分三秒に

シーボルト江戸參府紀行

あり。城と之を圍みたる郭（クルワ）・濠を具たる市の一部とは天正（テンセイ） Tensei 九年（千五百八十一年）戰國時代に、そこを治所とせし有名なる太閤様 Taikosama, Tojotomi Hidejosi の築きし所なり。城を繞る市部はその施設極めて整齊にして、町通りはすべて南より北へ直線に走り、同様直線に置かれたる町通りと十字に入交ひたり。日本の市邑にて防備の堅き部分は内廓（ウチグルワ） Utsi guruwa と稱へ、市民も住ひ士分も住ふ。通常は土手と濠とにて繞圍されたり。此部とは堅牢なる門・堤防（ドテ）・濠（ホリ）によりて區劃されて、別の廓域ありて本城を繞圍し、士官・役人藩侯の使傭人盡くこゝに住ふ。此部も又チクローブ狀の石壁と深き濠とを繞らしたり。城自身はシロ Siro と稱へ、彼（ソ）の廣き狹き結構によりて本丸（ホンマル） Honmaru・二丸（ニマル） Nimaru・三丸（サンマル） Sanmaru 等・相互獨立の城砦より成れり。姫路の城は防禦工事ある市街の西北端にありて、男山 Otokojama と云ふ小山に憑りたり。

播磨の國は當主酒井雅樂頭（○酒井雅樂頭忠實（安永、年―嘉永元年）にして寛政九年家督、天保六年致仕せり）の所領にして

年々の收入は十五萬石（凡そ一百五十萬ギルデン）に當る。侯は目下江戸にあり隔年に五月に立ち將軍の宮廷（○幕府）に伺候して、**献上物**をなす。毎年發行さるゝ官版の年表には將軍の臣下が江戸に參覲する時日は精確に規定せられたり。献上物として受くるものも細かに記されたり。献上品は之に對する返禮物として捧ぐべきものもその中に載せ割に廉價のものにして、下賜品も同樣なり。例へば大名の献上物は絹綿二十束・銀貨二十片（枚 Mai と稱ふ、四十三匁の重みあり）にして、大名の受くる返禮は馬一頭・御鷹一羽なり。同書には大名の城下の江戸よりの距離も記してあり。姫路（ヒメヂ）より江戸までは百五十七里と計算せらるゝ吾人は尚ほ是丈の距離を後（アト）にせざるべからず。

播磨國は日本の語呂にて播州と稱へられ、日本の第六道・卽ち山陽道に屬す。此國は甚肥沃にして稻田の坪數は二萬一千二百三十六平方町（一町は九十九・一七三六アレアにて凡そ一ヘクタール）にして、其收穫を

姫路に治所を有する大名其他の十大名の收入とす。○姫路の酒井家十五萬石、明石の松平家六萬石、龍野の脇坂家五萬餘石、赤穗の森家二萬石、三ヶ月の森家一萬五千石、林田の建部家一萬石、小野の一柳家一萬石、山崎の本多家一萬石、安志の小笠原家一萬石、三草の丹羽家一萬石、是なりと

三月十日（我二月二日）九時に近く纔に出立す。夜の中に約一寸の雪降り、溫度は八時近くに華氏四十度のみ。空模様は甚よからず、まだ雪は降り續き、かて〳〵加へて露營ち、我人夫のため路は難澁になりたり。我等は市中及び前驛を通り過ぎて、市川を舟に乘り、困難なる旅路を經たる後に曾根に着き。そこに正午を憩ひ、午後には前に話し合ひたる通り、名高き寺々への巡禮を續けて、曾根（ソネノマツ）の松 Sonenomatsu・右の寶殿（イシノホウデン） Isinohoden・高砂（タカサゴ） Takasaka に至れり。曾根の松は天神樣 Gott Tenzin が手づから二三松樹をこゝに植へたりと云ふ昔語りによりて、高砂は我鄉の菩提樹に形似て、葉張石の出現せりと云ふ神話によりて、石の寶殿は殊の外巨大なる直徑二十八乃至三十尺の地を覆ふに足る今も猶ほ生存する巨松によりて、いづれも高名なり。我等は寺僧に極めて慇懃に迎へられ、特別

な尊敬を以て侍（モテ）なさる。我長官は石の寶殿と高砂とを訪はず、こゝにて一人の角力者（スマウトリ）が常例として和蘭人に進むる小き酒宴をも辭せり。此者は三ヶ月前に長崎に來り、我等を出島に招待せしが、其間彼（カレ）の住家は家財とともに火災にて破滅せられ、我等が富有なりし友は貧儉に變り果てゝ。彼のさきには立派な住居ありし其所に、今は數個の置（トボ）しき小屋（コヤ）を建てたれど。彼（カレ）は彼の爲（シ）得る程に食卓を注文したりと見え、すべての器用よりして彼が心を盡して寄集めたることを察すべし。余は彼の爲め共に幸福を祈りて飲めり。彼は損失を受けしに關はらず活氣あり。余は晩に我旅宿に於て小き贈物を授くべしと約したり（古○賀十二郎君は長崎市史中にて長崎に於ける角力興行等のことを詳細に取調べたるも、文政時代の史料に乏しくして、此本文の事に關しては委細のこと判明せずと云ふ。）

斯樣に特に尊敬さるゝ國民（○和蘭人を云ふ）の使節ともあるものが、更に譯（ワケ）もなき邪推より、かくも不懇親に取計ふことを理解する能はず。余はかゝる場合、時に甚しき羞恥に襲はれて、我が使節の名譽をば、厚き寄進物の

贈與によりて繫ぎ留めんと志ざせり。我が政府は心からの誠意を以て、歐羅巴の仁惠を機會ある毎に、此東亞の人々の記念に殘さんと心掛くるなり。かかる國民の代表たるものは、又この名譽を宣ぶるに勉めざるべからず。然るに我使節に於て果してかゝる寬厚の襟度ありや"Illi aes triplex circa pectus erats"（彼が胸には八重の環甲あり〇無情にして動かぜぬ人と云ふ義）と云ひ、その子息某嗚瀧 Narutaki の私學校にありて余に教を受けたるなり。

墓地

此處よりして余は數時間徒歩にて高砂町 Takasaka-no matsi に至る。路は後方に稻を植えらるゝ畝に通じたり。深き畝の溝あり、狹き種蒔畦あり、田畠を區劃する行間あり。こゝにも一本の杭に告文あり、言葉通りにすれば『此邊にて鳥獸を捕るなかれ、殿樣が鶴の御鷹獵地と定めの場所なり』とあるなり。近くに余は墓地にて死人を燒くを見たり。

武田昌達

余は夜に入らんする頃駕籠に入りて、九時過ぎに加古川 Kakogawa に到着し、こゝに宿れり。一人の醫師來り訪へり。武田昌達 Takeda Sjotatsu と云ひ、

〇此頃加古川に武田と云ふ醫師の家ありて、武田昌齋（寬延元年—文政九年）といひ、其子は亮達（安永七年—安政元年）及び武田元道（後に大島氏。文化六年—安政五年）といへり。此時には昌齋は七十九歲にて（同年九月死亡）、亮達は四十九歲なりき。昌達と云へば、或は昌齋の誤か、または亮達の誤か。或は亮達が前には父の一字を取りて昌達といひしか。子息某といふは亮達か又は元道かなるべし。大島元道は家を嗣ぎ、播州加東郡小野藩一柳家の侍醫となり、蘭學に造詣深く、藩逢にして傍若無人の人なりしといふ。此人の墓は東京の麻布六本木の宗嵩寺にあれど、今は無緣なり。元道の弟に杏堂・文堂・亮齋あり。文杏（文淵とも）は小壯の頃江戸に出でて、坪〻信道に從ひて蘭學を修め、大島圭介加藤弘之等と同窓にして親交ありしと云ふ。明治二十三年五十六歲にて死亡せり、亮齋は明石藩の侍醫たりし人なり。杏堂の曾孫川西貞夫なるもの今加古川に現存す（兵庫縣測量課・矢内正夫君・井内中正君報告）。

余は此地方の珍らしき植物を余の爲めに蒐集することを依囑して、一挺のランセットを與へたるが、彼は爲に此約束を果したり。

三月十一日〇我二月三日 我等は六時に、いともよき天氣に惠まれて、加古川を去る。我前には廣き平野ありて、殆んどみな稻を植え、たゞ數頃は他の穀物・小麥・大麥などを植えたり。農家は其稻田より極めて適切なる肥料を用ひて二度の收穫を得。こゝにては藁に土泥を混ぜて、圓錐形に堆積せる糞肥料の中に腐敗せしめて用ふるなり。數多の村・小村・所々なる森藪は廣く延びたる平野を仕切り、其後（ウシロ）奥には日本（〇本土）の紀州の

青巒、四國の阿波・淡路島を見るべし。我等は西谷村（ニシタニ） Nisitani に憩ひたりそれより進み行くに、余は稻田の灌漑のため天然の技術が作りし數多の小湖が見るからに心地よき松の森林を廻（メグ）らしてあるに注目せり。少焉（シバラク）して我等は土山村（ツチヤマ） Tsutsijama にて目を驚かす許（バカリ）の海上の景色を得たり。又我等は多數の乞食及び門徒宗・一向宗 Monto- und Ikkosju の僧侶に遇ひたり。門徒宗は弘法大師を開祖として其僧は嚴重なる佛戒を持すれど、一向宗の僧は魚を食ひ、剩さえ妻を蓄ふるを許されたり。

明石

二時近く我等は明石 Akasi に來る、カナリ大なる市街にして、松平左兵衛督（マツダイラサキヨーエノスケ） Matsudaira Sakioje-no-ske ○名は齊韶（享和三年―明治七年）文化十三年家督、天保十一年致仕、文政四年左兵衛督に任ぜらる と云ふ大名の治所なり。秩序にも禮儀にも乏しき、取るに足らぬ所なり。我等は海岸に傍（ソ）ひて進み淡路島を我前に西南南に見る。此島と日本（○本土との間の海路は日本の一里（凡そ四キロメートル）程の廣さにて、海水はカナリ十分に深きが如く、我等は日本船の縱横に往交（ユキカ）所を見たり。舞子（マイコ）

濱 Maiko にて我等は海景の絶美なるを縱にし、其近くにて余は海のコンパスを以て數ヶ所を觀測したり。一ッの松の森ありて、其中に地藏尊 Dsizoo の像立ちて、頭を繞れる御光の冠は人目を惹けり。明石より

兵庫

兵庫（ヒヨウゴ） Hiogo の半途に於て蕎麥より作れる饂飩にて名ある飲食店 ○有名なる敦盛蕎麥のことなり 途に當れり。人々すべて（○立寄り）飲食して氣を引立つるなり。そこを一ノ谷（イチノタニ） Itsinotani と名づく。余は終日烈く歩みしかば、こゝにて乘物に就く。夜に入り、八時半に纔かに兵庫の旅舍に到着するや、直に

兵庫の侍醫

そこの主君 Landsherr の侍醫 ○兵庫は大阪町奉行の支配下にてこゝに勤番所あり、船見番所として與力同心二人詰切、船舶を檢分せしものなり。侍醫といふべき資格のものはなき筈なり。大槻如電君云。此頃兵庫には藤林普山の門人にて藤田百城といへる蘭方醫あり。天保元年七月二十一日三十三歳にて死亡せるが。今百城存稿といふもの、京都帝國大學圖書館にあり。その中に湊長安の著せる食勃兒度經驗方の序文あり。兵庫の侍醫といへるは或は此人ならん 直ちに來り刺を通じ、余に贈らんと二三の天產物を齎したり。二三の醫師と數多の病人之に從ひ來り、余を圍みて夜半に至る。右の侍醫は甚親切なる人にて、余の友人山口行齋によりて余の慣用する藥劑なども前より知れり。病人の中には又〻陳痼

なる黴毒の惡候を呈せるあり。余は此惡疾が日本に深く浸濡したること、色々の種類のあること、水銀劑が日本にて時に用法を誤り、病を治するよりも却てそれを惡くすること、そは斯様にして用ふべしと云ふことなど、手短に彼に說明したり。

鶴と烏賊

余は四羽の甚だ飼馴らしたる鶴並びに此地にて美味といはるゝ鹽にしたる烏賊の卵を得たり。兵庫につきては滯在餘り短くして、確なる報告を得ることなかりしかば、余は此の新しき、信賴すべき人々に、政治學上及び地文學上の事より、二三の點につきて、著作を依賴せり。

三月十二日（○我二月四日）朝午前八時出發し、徒歩にて市中を通過せしが、極めて居民衆き樣に見えたり。人民は敎化の少なきを思はしめ、我案內人が其杖を擧げねばならぬこと時々ありたり（○福原瀨次郎君云「楠公祠畔通行の記事にて兵庫の町はづれ相生町を通行のとき、いたづらなる人に出あひ、ステツキを振り上げればならぬとあるは、此相生町が實際一膳飯屋・駕丁・齒拔・木賃宿等軒を並べたるところ、其狀況面のあたり見るが如し」）。町の通りには極めて尋常の商店相聯なり。住宅は貧しき外觀をなす。兵庫の眞近

楠公の碑

にて我等は長き村を行過ぎたり。村は齒醫・野師醫（ヤシイ）にて惡評多し。窓前に幾多衒奇品の間に齒を拔きたる頭顱（カシラ）を並べたり。其近くに有名なる楠正成（クスノキマサシゲ）の墓 Kutsunoki Masasige あり。こゝに齒の病人を引付く。名將の墓所は蔭深き森林の中にありて、花崗石より作りたる紀念碑にて飾り。其上には神社の形なる小き家建てり。前に格子ありて、それに小き繪馬額を懸けたり。余は尙ほ檜にて作りたる小き獻盤に根元より切りたるよく粧へる髻二三を載せ、傍に其人の名を記したるを捧げたるに注目せり。是れ左の事由による なり。楠正成は舟人の守護神（マモリカミ）にてもありといへば、暴風雨のとき、難船のときに誓を立てゝ、神と崇（アガ）めたる名將に己が最も愛（オ）しむ髻を獻ずるなり。尋（ツ）ぎて我等は生田明神（イクタミヨウジン） Ikuta Mijoz'n の社を心地よき林の中に尋ねしが、林中を穿ちて櫻・杏の並樹ありて、其間々に同一の間隔を以て石の燈籠を樹てたり。神道（シンダウ）の祠は何處までも簡單素朴を旨とし、目標を

神道の祠堂

古名將・偉人・公衆の安福に功績ある人の追欽に置き。母國的・原始的の神奉仕は此欽仰心の形式として現呈し。神と崇められだる祖先にして、其功績が國民の心根に刻まるゝこと深きだけ、其奉仕は愈以て墳墓の上に殷盛となり炯爛となり。其人に對する同情は今に至りて猶ほ猶ほ熱烈に、すべて其人に關することを想ひ起すものなり。其故にかゝる人に關する武器・繪畫・詩・古き松樹・約して言へば何者も皆かゝる寺社の驚異・崇欽の材料となり。佛家に於て異形なる諸の佛像・數限りなき他の品物を形而上の示現のために陳列し、印度に於て神佛奉仕の寺觀を目も眩ゆきほどの色彩にて粉飾するとは異なれり。余は御門（ミカド）○天皇陛下の御座所に近づくに從ひて、後年の支那より傳來せし佛陀奉仕の寺觀の數少なくなるに注目したり。上に述べたる神道の儀式に由來する理由よりして、此生田明神にも古名將の馬を自然大に刻みて藏めたり。大なる宮の傍に色々の小き宮あり。各其崇むる半神 Halbgott を

祀りたるあり。色々異なりたる機會にそれ〳〵名を喚び、敬拜し、供獻するなり。

余は此處に所謂藤樹を見たり。其枝には悉く紙片を結び付けたるが細き紙片は己がしゝ意ふ儘に枝を繞りて添結び。故（コト）さらに左の手にてするは六頭ヶ敷仕事によりて神より更に大なる功德を得んとするなり。女子は幸ある婚嫁を祈願する爲、かゝる紙片を藤の枝に結べば花房はその長短（ナガキモジヂカキ）によりて、その運命の幸不幸（コウフコウ）を知らすと云ふ。我等は旅程を海岸と岡本山 Okamojama（オーカモヤマ）○原文にはオホカモ山とあり。神戸の史績に精通する原瀨次郎君の說にては此邊の山にて呼名の音韻の之に似たるは岡本山の稱他なし。岡本山は補公祠畔より約一里東方に行きたる地點にあり との間に續けて、大阪灣に絕佳なる景色を得たり。百以上の船舶が彼方（アナタ）此方（コナタ）に往通（ユキカ）ひ又碇を下（オロ）せるを數へたり。此灣は何處もかも歐羅巴の船にもよき碇泊場を有する如くなれど、所々殊に大阪の同緯度に於て淺瀨ありと聞けば、注意を要するなり。道は數多の今は乾きたる川床を渡れり。其川床は堆き石塊に充たされ、又

室より大阪へ

高くなりたれば、兩側に堤を高くして、それを人力にて調整したり。それには竹にて編み石を詰めたる竹籠（デヤカゴ）を用ふ。人は云ふ『雨強きとき殊に六月七月には此山の河は直ぐ（ス）に氾濫す』と。此他に非常に數多き用水 Wasserleitungen あり。中にも味泥村 Mitoro（○武庫郡西灘村の内にあり）に一ッの川ありてそこより木樋にて十五分も遠く稻田の上を導き、水車によりて次へ送ると云ふ。此地方にては住民が百年來の黽勉に險しき山より墜ち來る水の威力に對し、それが山麓に展開せる稻田に汎濫するを免かれ、又旱魃の來らんとする時には之に水を引くの途を知れるなり。此の如き完備したる文化が國内に普きは日本國民の血統が此島國に長久に在住する確たる證據なり。„Gutta cavat lapidum non vi sed saepe cadendo.“（水の滴は其力によるにあらず、その屢〻墜つるによる。）

我等は住吉（スミヨシ）Sumijosi にて休息し、小飲し、又日南中の觀測によき機會を得たり。津知村（キチムラ）Kitsimura にて將軍の宮廷（○幕廷）なる高官某の娘がこゝを

旅行するを聞けり。暫くして彼女は肩輿にて來りたるが、その前には數多の格式標號と長持とを擔ひ、其後には數人の侍女が或は徒歩しまたは駕籠にて從ひたり。二時に西宮（ニシノミヤ）Nisinomija に達し、此處にて晝食し又一泊せり。晩に圖らずも余の一名の門人來れり。大阪の第一の參議（○大阪には城代及び城番あり。第一の參議とは城代を云ふならん。此時の城代は文政八年新任の水野左近將監忠邦（寛政八年―弘化四年）なり。後に京都所司代・老中となる）の侍醫なり（○何人なりやいまだ考へ得ず）。余は彼は長く既に江戸に到りしものと思ひ居たり。

三月十三日（○我二月五日）我等は西ノ宮より八時頃に好ましからぬ空模樣に出發し、吹雪と霰の如き北風とを犯して、平夷なる土地を通りて、尼崎町（アマッサク）Madsudari Totomino Kami（○松平遠江守忠誨（明和七年―文政十二年）本姓櫻ノ井、文化十二年家督、弘化二年致仕せる人なり）の治所にて、城ありて、廣き濠を廻らし、その濠は巾廣き堀割（小股（コマタ）にて七十歩の幅）にて海と連なり、之に注ぐ。我等は濠の上の橋を渡り、十一時に神崎（カンザキ）Kansaki に至り。そこにてカナヲ廣き神崎川を舟にて過ぎ、十三（ジューゾー）Sjuzo にて憩（ヤス）み、十三川 Sjuzogawa を超え、二時四十五分大

阪の前驛に到着したり。こゝは人通り甚賑かに、住民は事務と業務とに間斷なく從事するにて、今まで經來りたる町々とは異なれり。天候濁り曇るため、大阪市が宏濶たる平野に在りながら、南の地平線に暗く覆はれて、明らかに眺望し得ぬは遺憾なりき。されど蔬菜の圃花卉の園は屢〻我が眼前に現はれ、高く抜ける屋の棟高き松の梢城壘の樓臺が霧に包まれて遠くに隱見するを望み得て、初めてそが一大商業市なることを知りたり。市外にて我等は主として飲食品日用品指物師銅鑄師酒造家など左程ならぬ商賣人の仕事場に注目せり。二十五分の後我等は淀川（ヨドガワ）Jodogawa に架けたる大いなる木の橋難波橋（ナニワバシ）Nan'wa'asi（長さ百八間）を越えたるが、そこより町通りは廣く又見ばえよくなりたり。

六 大阪京都の滯在

概目。歐羅巴の藥學の熱烈なる尊奉。大阪にて今花さく植物の一覽。日本の急ぎ郵便。大阪の記載。大和の國。稻田の灌漑。澱河。堤防の圍繞及び水門。京都へ到着。街路。住民。醫師の訪問。觀測。

三月十四日（我二月六日）**大阪**は將軍政府に直屬する五都市の一ッなり。攝津ノ國 Provinz Setsu の首府にて、日本第一の商業都市より。其位置は船多き內海の東の端にあるによりて、日本大島（本土）の西部及び四國九州との聯絡をなし。其が彼（カ）の舟航に叶ふ淀 Jodo の大河の河口に位置するによりて、古き國都たる京都 Kioto・古の帝室の直屬たる五畿內との交通容易なり。**淀河**は琵琶 Biwa の大湖より發し、其名を發源後間もな

く過ぐる所・澱と云へる市より得て、攝津山城二國を經由する、その程路は短けれども、宏濶なる內海に注ぎ入るによりて、極めて便利なる水路をなすなり。猶ほ大阪は他方に於て京都を越えて一大國道なる東海道によりて、江戸幷びに日本の東部北部と優れたる陸上の聯絡あり。又淀河の分岐によりて運河を作り、その整齊たる網目に貫ぬかれて、數百の船小舟の爲、物質運輸の便利なる水路を得るなり。

大阪の醫師

余は多く醫師の來訪を受く、中には大阪のなだたる人二三あり。何れも歐羅巴の藥學に熱烈に心を寄す（○その當時大阪には齋藤方策（明和八年—嘉永二年）・橋本宗吉（寶曆十三年—天保七年）・中環（□□□□—天保六年）など云ふ人ありたり。この人々又—此中の人々ならん）京都よりは書面の交換にて知れる友人來り。天然物と贈物とを齎せり（○何人なりや明かならず）余が長崎出發前に編輯して余の門人高良齋が日本語に飜譯せし局方小冊を、印刷出來上（デキアガ）りて受領したり。狼、兎、鳥など色々のもの余の一覽に供せらる。晩に余は彼（カノ）人々に對し余の研究に都合よき囑托をなせり。一個の龜を得たり。

植物

二三手術

三月十五日（○我二月七日）目下大阪にて花さく植物を贈らる。連翹・絲櫻・黃櫻・馬（ア）醉木（セボ）・細辛（サイシン）類等なり。余はクロノメーテルにて經度を測定す。當地の友人ども多數の病人を誘ひ來る。余は二三の手術をなす。動脈瘤の興味ある一例を見る。夜深くまで余の日本の友人の訪問續きたり。

三月十六日（○我二月八日）鹿の畸形兒及び生きたる白鹿を齎らし來れる人ありそが上顎の犬齒・紅き眼・角や角坐の形等、一體の形態より考ふるに、社公（シラコ）鹿（ノシカ）なり。頗る美事の動物なれど、其價は（○白鹿の方は）百五十金、畸形の方は十八金なりと云ふ。天產物は日本にては甚高價なり。こゝより一書面を急使にて出島に送る絕好の機會あり。此急飛脚は此地より（全國を通じ）殊に都市たる江戸京都及び外國の貿易地たる長崎へ向けて之あり。其制は大阪には日本商業の中心地として殊によく整ひたり。こゝには定期の郵便あり（○所謂定飛脚是なり。東海道の八の日三度の飛脚は元和元年に定められたるなり。詳細は中村孝也君の元祿時代觀に載す）

急ぎ郵便

毎月七日・十七日・二十七日に長崎に、同八日・十八日・二十八日に京都江戸

に向け差立つ。此定期郵便は大阪より下關を經て長崎まで七日にて到着す。就中下關までは郵便荷物を帆のよく利き多數の漕手を乘せたる小舟にて送り、それよりは陸上を行き、(○諸所に)一定の宿を置き、郵便物は一本の棹に結びて、飛脚夫(○前の宿より)之を持ちて、脚を飛ばして次の宿まで走り、そこにて次の脚夫に之を渡して、此(コレ)又其次に持ち行くなり。此定期郵便の他になほ何時なりとも海を渡りて下關へ、それより陸を經て他の國々へ差立つることあり。これにつきて依托人は五十乃至百ギルデン又は其(ソレ)以上を支拂ふべし。

三月十七日(○我二月九日)我等は八時に近く、大阪の四日間の禁獄(○旅舍を喩へしたり)を免ぬかれて、一時間許りも市中を北の方向に貫き行きしが、一人の兇行者が刑場に送らるゝに遇へり。淀川を越え、城の傍を過ぎ、同川の右の支流を渡りたるに、市は此邊にて荷車挽・荷擔人夫等の住む貧しき小屋を以て終る。目を惹きしは厩舍の前に馬の被布(オホヒ)・草鞋(ワラジ)の乾かす爲めに懸

けてありしことなり。こゝに至りて平濶なる低地は兩側より山脈に限られて、右には大和の國あり、左には播磨の國ありて、其山脈の峰嶺(ミネ〳〵)は雪を被れり。此低地は著明なる平野にて、上述べたる淀川これを貫流し、大部分は稻を植えたる田地にして、今迄に見たるものよりは多く水を被むれり。その爲め到る處に狹き溝と水車とありて、水車は人一人にて踏み居るなり。淀川は商業上頗る緊要なるものなるが、それが京都の傍なる琵琶大湖と連なるが故に、時として大汎濫を誘致することあり。殊に其左岸の田畝が河自身よりも甚低きは、其損害をして愈〻多大ならしむる故、それを防護する爲に、高き堤防を造りたり。此河の左に展開する田畝は溝渠によりて水下に置かるゝことあり。溝渠は堤防を十八尺の深さにて貫通して、稻田に流れ込み、溝渠の堤防の中央に當る所に、釜場(○貯水池か)を堀り、釜の底に水門をしつらへて、隨意に水量を調節するを得。牧方(マキカタ)村 Makikata 近傍にて、余はかゝる水門の脇に水準

淀川の灌漑

汎濫

溝渠・堤防

水門・水準

シーボルト江戸參府紀行

標を精密に日本の尺度にて尺毎に劃線したるを見たるが、聞く所によれば、氾濫の危險を報知するためこの制を設くるなりと云ふ。牧方は一大村なり。大阪の住民が遊樂地としてよく來る所にして。そのため町は遊女にて塡まりたり。それは余が我一行に一時間も先だちて、少數の同行者と此町を步み通りて、町の人々を好奇心より戸の前に喚越(ヨビコ)せしために、愈多く目に入りしなり。こゝにて午食し。それより我行旅を伏見 Fusimi に續けたり。牧方の位置は極めて美く、淀川の地方は所々余をして我故郷なるマインの溪谷を想起さしめたり。我等は有名なる八幡太郎(ハチマンタロー)の祠 Tempel Hatsimantaro (○石清水八幡)を訪はざりしを憾むなり。晚に向ひ淀(ヨド) Jodo の町に至る。淀川と木津川(キヅガワ) Kizugawa との中間にありて、木津川はこゝにて淀川に合す。我等は一ッの橋を渡り、晚九時に近く伏見に到着し宿に入る。

三月十八日(○我二月十日)八時過ぎ我等は京都に向ひ出發す。余はピュルゲル

君と伏見の町を步みて行けり。伏見の前驛は京都の前驛と一ッに連なれり。京都へ行く街道にて、伏見 Fusimi の社に詣づ。祠堂の眩き紅色と殊に挺でたる淸潔とは人皆の注目を惹けり。こゝは所謂狐の神稻荷 Fuchsgott Inari を祀れるなり。

伏見に稻荷

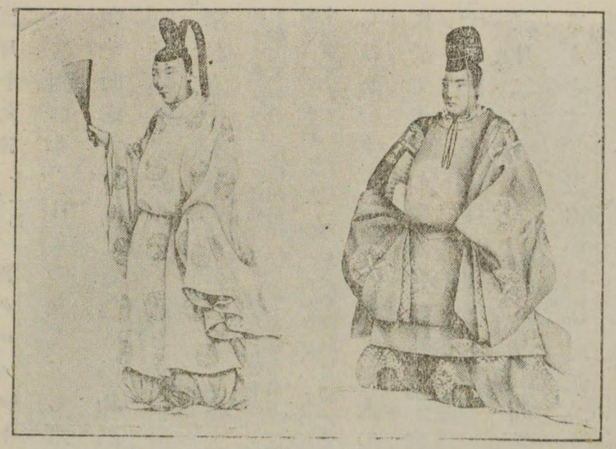
京都

我等は東福寺(トウフクジ) Tosukusi と大佛(ダイブツ) Daibutsu との前を過ぎ、十一時に近く我京都の旅屋(ヤドヤ)に入る(○阿蘭人定宿は海老屋與右衞門なりき村上氏にして明和には專八、享和には文なり、寶永年中にも海老屋ノに宿をとれり)。上記の寺々にそへる粗末なる小屋の町通りを除きて、京都の此部分の街衢は我々が大阪にて通りし町々よりは頗る優れたり。種々な製造品・土產物の商店は手入れよき私人の住宅と交代し其處(ソコ)此處(コヽ)に美しき神佛寺は聳えたり。街路はよく手を入れて、廣く人民はカナリよく秩序を保てり。此(コレ)よりもよき街路は本來□□橋(ロシノ) Rosinobasi を越えたる後にあり(○宇佐支雄君は余のために京都の歷史地(チ)に尋れたるに。何人もロシノ橋と云ふを知られど、文章の前後の關係より考へて、多分は大和大路四條上る處にあるヤマト橋の舊名なるべし。伏見より東福寺大佛等を經て關人所宿のありたる河原町三條下る處に至るには當然大和大路を通り、今の大和橋にかゝるなり此橋より以北は昔より市街の賑かなる處なり)。橋下には川床の石の上に更紗の晒場(サラシバ)をしつらへたり。

小森桃塢 我旅亭に到着するや日の南中を觀測するによき機會を得たり。午飯の後、當地なる余の日本の友人來訪す。其中に小森肥後介 Komori Hikoske（コモリヒコノスケ） ○名は義啓。號は桃塢、通稱は玄長。天明二年生、天保十四年死。伏見の人。海上隨鷗の門下として蘭學を修め又醫術を研究し、後長崎に遊學して、益々得る所あり。文化中京都にて開業し、同門藤林泰助と交はり篤く、京醫の双璧と云はる。文政三年朝廷に召されて侍醫となり、從六位下肥後介に任官し、後に正六位上縫殿助に至る。蘭方樞機・病因精義・泰西方鑑等の著あり。此時には正に肥後介なり 及び

新宮涼庭 新宮涼庭 Riotai（リョウダイ） ○名は碩、鬼谷山人又驅竪齋と號す。天明七年生、安政元年死。丹後の由良の人。有だゼー吉雄權之助、蘭人フェールケ及びパテイに就きて醫術を學び、後に發憤して長崎に至り、前にも出し、名聲高く家道大に興り財を蓄へ書を積み、書生の教育に盡力し、その順正書院は此地方に醫學校として幕末に有名なり。著書も少なからず窮理外科則・體則・人身分離則等人の知る所なり あり。涼庭は歐羅巴學問の大崇拜者にして當地にて最も行はるゝ醫師の一人なり。日本に於ける和蘭圖書の最大所藏家として、架藏の圖書は黃金三百枚に値する程なりと云ふ。晚

美馬順三の兄 に余の忘るべからざる門人美馬順三の兄某 ○順三の兄は美馬眞右衞門尙芳といひ、天明六年に生、嘉永二年に死亡せる人にて。初の名は初藏、後に眞右衞門に改名し。次は淺藏、後に眞右衞門と同樣醫學者か萬有學者か、少なく共植物學に興味を持ちし人なるべく、阿波の岩脇の鄕士なり。順三には此兄一人の他、姉か妹か觀潮智丹法尼とて、美馬家菩提寺紫雲庵の住尼たりし、文政八年二月死亡の女子一人ありしのみ。原文には獨逸語のことなればたゞ兄弟とあるのみ 余を尋ねんとて、ワ〳〵四國より來り、二三の植物及び礦物を携へたり。



第十五圖 ミカド宮廷の貴族の服裝

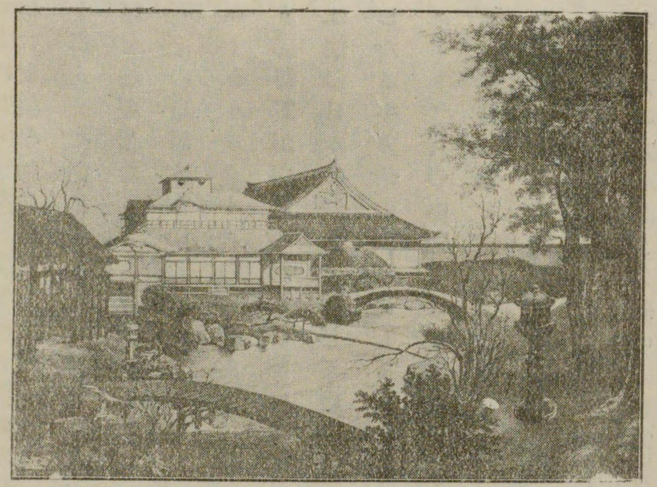
第十六圖 ミカド宮廷の妃嬪

三月十九日（我二月十一日）朝クロノメーテルにて經度を觀測し、又正午の緯度をも測れり。日本の友人どもを來訪す。門人どもを市中にやり、余の研究を助成するに足る色々の物品を捜さしむ。帝室の侍醫の一人小森肥後介再び來訪す。此の晩に帝室の一高官私かに歐西人を見んとて來れり。小倉中納言（○正二位權中納言小倉豊季と云ひて、天明元年四月の出生、文化十三年六月死亡の人なれば、此時には丁度四十六歳なり。ラクラウウナゴン）の社交家にて、今も豊季の交際せし朝鮮人某の書、淀橋柏木住現戸主小倉英季君方に殘れりと云ひ、五十五歳ばかりにて、子息○吉姫といひ、安政五季といひ、文政十三年死亡す）と息女（○吉姫といひ、安政五年四十四歳にて死亡す）とを伴ひたり。彼は我使節にも迎へられ面會す。彼人の齒は婦人の如く黑く染めたり。是れ天子の宮廷に於て貴紳のする常習（ナラハシ）なり。宮廷に於ける服裝の寫生畫は第十二圖第十三圖に出せり。

小倉中納言

三月二十日（○我二月十三日）余は氣象測候の器具を整へて二三日間の觀測をなさんとす。數多の醫師は病人を率ゐて來れり。天皇の使節の一行が江戸に出發するにつき（○文恭院殿御實記に云ふ、此年三月朔日勅使廣橋一位・甘露寺一位・燒使日野大納言、右衛門督、女御使冷泉大納言・女御入内により勅使德大寺前大納言、議首の細砌・禁裡・仙洞・大宮より例の如し云々。攝家門跡勾當内侍の使者公卿まみえ奉り、傳奏（勾當内侍の使者公卿まみえ奉り、傳奏（御白の使則に入内を謝し奉り、次に公卿の家司・伶人冠帽束帶にて拜謁し奉り云々とあり。此使者は本文の月日頃京都出發に相當す）我發足は延期となるならんとの報告を得。大知事（○京都所司代及び大判事（Obergouverneur Oberrichter）○町奉行）への贈物は歸路にさゝぐることゝして傍によせたり。多數の寺院は特に余の興味を惹（ヒ）けり。

三月二十一日（○我二月十四日）クロノメーテルにて經度を計り、又正午の緯度を計る。六時間



第十七圖　京都の西本願寺

毎に氣象學的に觀測をなす。數多の訪問あり。京都の明細なる記述を得んとて諸所を捜し、地理誌・鄕土誌様の書籍を購求し、又余の日本書籍を整理したり。都は支那語にては京都と云ひ、古き國都なり。御門（ミカド）（○天皇陛下）の皇居は市の北にありて、塀にて市民部と區劃されたり。十二乃至十三ヘクタールの廣袤あり。京都の西部には防禦設備のある城あり。將軍が謁見のため京都に來りたるとき居住する所なり。此の城は他の日本の城砦と同じく、廣き濠と高きチクローブ狀石垣とを繞らしたる平方形の城廓にして、其の一邊の長さは百五十間（一間は一・八一メートル）、其の中程には數階なる方樓を置けり。京都は日本の美術工業の本場にして、住民は活潑なる商業を營む。我等が通過したる町通りの家は大抵皆商人又は職人の住居にて、窓を開きて其の業に就くなり。其中にて最も名高きは漆細工・彫刻せる木細工・鍍金の木細工・絹物の染方織方・名高き金襴の大和錦（ヤマトニシキ）Jamatonisiki 及び鋼業等なり。なほ京都

日本美術工藝の中心

二條城

には國立の造幣廠あり（○銀座は慶長六年伏見に設。しな同十三年京都に移せり）。また注目すべきは書物の印刷及び彩色の木版畫なり。

三月二十二日（○我二月十五日）日本の天文學者は彼（カレ）の第一子午線を京都の天文臺を通して置くなり（○京都の天文臺は寺小路（てらこうじ）にあり。今の七條停車場（ていしゃば）より西へ數町貨物驛（かもつえき）のある所なり（新村博士報））。そは正にグリーンウィッチ東經百三十五度四十分にあり。市自身は南より北へ延長二里半に及び（一里は凡そ四キロメートル）、東より西へは延長一里なり。市内・郊外合せて人家十一萬七千にして、大なる寺社百十七あり。千八百二十六年（○我文政九年）には住民七十八萬人にして、それには帝室宮中の用人・高貴の人々・軍人・町役人・僧侶・神官は加はらず。それを加ふれば全人口は百二十萬に及ぶならん。京都は五畿内（ゴキナイ）Gokinai に屬し、日本國の中心にて、山城（ヤマシロ）Jamasiro の國にあり。山城は土地の豐饒なるため有名にして、八千九百六十一町（凡そ一ヘクタール）の稻田を有して、其收穫高は米二十一萬六千七十石（一石は百八十リートル）と稱へらる。京都の

京都の天文台

經度はクロノメートルにて二十六回觀測して決定したるなり。或人は余に稀なる一植物を齎したり。黄蓮の一新種ならんと鑑定したり多數の賓客殊に病人の來訪あり。

三月二十四日（〇我二月十七日）經度・緯度を觀測し。明日の出發の用意をなす。準備とは留別の進物・余の友人への依囑等に關してなり。

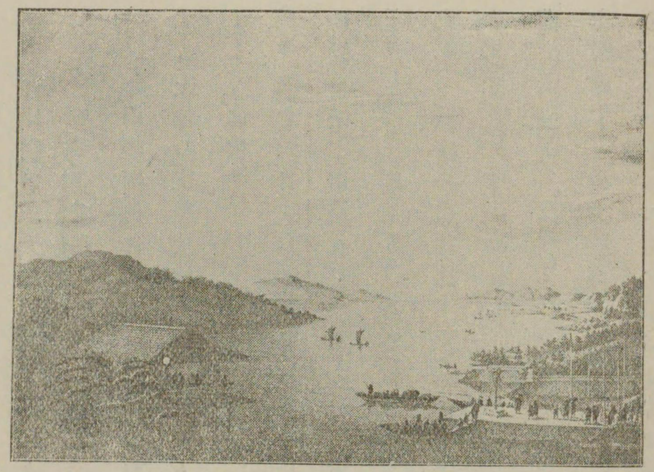
七 京都より江戸への旅行

概目。 大津の町。近江湖水の美き眺望。膳所の町。淀川の水源。日本の藥劑。稀代の鯢魚・山椒魚。鈴鹿山の植物。一里塚。合理的耕作。桑名の鑄鐘。稻田に他植物の植付。川の堤。宮。材木置場。冰谷助六の萬有學的蒐集。矢矧川の

橋。岡崎の町。荒居の河岸に傍へる地質學的動物學的の檢索。今切（イマヲル）河口の渡航。濱名湖。景色。秋葉山大權現の黄銅の門。佐用の中山を通る一行。國民的挿話。大井川。人夫による此川の渡過。魚の皮。府中の工業。興津の脇にて支那船の漂着。外國船に關する國法。紙の製造。沖津川。救急の橋。富士山の眺望。原。植物園。山路旅行に草鞋。高度測量。箱根山中の植物。畑村の木細工。酒匂河。橋。日本の川船。大森。薩摩中津兩侯の住居。遊女。江戸灣。江戸入。商品。

京都出發 三月二十五日（〇我二月十七日）我等は十二時頃あしき天候に京都を出立し、四條の川の橋を越えたり。市の此道の町通りは甚好からぬ外見にてこゝに集（ツド）ひ來れる住民は極めて貧困なるが如く。商店も（〇西より）都入の

時に比べて見劣りするが如し。名ある都市も其〇東(ハズレ)は鄙しき小屋に終りて、これに接(ツヾ)きて山科(ヤマシラ) Jamasira の村あり。こゝにて多數の車に逢ひたるが、そは遠方より中虚(ウツロ)の轡に聞知られたり。車は極めて堅實に車輛は甚だ高く、幅廣の輪に走りて、牛にて輓かせたり。短き旅の後に大津(オーツ) Otsu に達す。近江の湖又は琵琶 Biwa と云はるゝ有名なる湖水の東南側にあり。第十八圖を見よ。町は街道に沿へる人家の構造により、又飲食品・旅行用具をのみ備ふる商店によりて有名なり。旅人のこゝに用を足すもの甚多し。我等は一軒の茶店に入りて、湖中に差出づる亭榭より絶佳絶好の眺望を樂みしが、天候のあしきと冷たき東風と(華氏四十八度)はそれを甚しく阻みたり。湖水は強き風に鞭たれ。彼方(カナタ)の湖岸の遠く薄綠に棚引く中より、そこの村・町は明るく照り出でたり。近き岸は舟にて賑かなり、北と東とには高き峰の雪を戴きて聳えたるを見る。暫くして我等は立派なる市街膳所(ゼッセ) Setze を過ぎしが、藩



第十八圖　琵琶湖の景色

主の麗はしき城あり(〇本多下總守康慎(天明六年—嘉永元年)文化三年家督)。そこより松の並木は南方へ瀬田(セダ) Seta へ延き。東には大湖・日に輝きて。その岸邊には赤楊(ハンノキ)・楊柳(ヤナギ)・松等密生し、西方には稻田ありて、其後に森に被はるゝ山山・塔の如く聳へたり。湖水の東北の山脈は禿(カムロ)にして、總かの藪と小き森とを戴くのみ。東北北にて湖水は分れ延びて流れ、瀬田にて其上に一ッの二次(フタツギ)の橋を架け。其

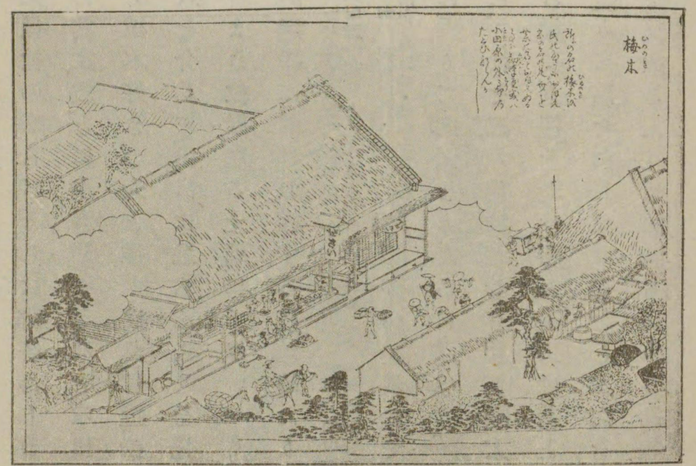
第一部は長さ三十二間、第二部は九十六間なり。彼の名高き淀川はこゝに發して、瀬田川と云ひ、その末は大阪に到りて海に注ぐなり。瀬田村は此川の兩側にあり。日の暮れかゝりしために、かくも美しく位置する土地の佳景は掩ひ去られたり。我等は九時に草津 Kusatsu に到りて、こゝに宿す。

草津

三月二十六日（○我二月十八日）我等は七時に草津を立出でしが、それよりは二三の村々長く相續きて間斷なき街道をなす。そこを過ぎて、梅木村 Umenokomura に至り。そこの有名なる賣藥家のいとこゝろよき亭に休息し。其家の世評高き二三の賣藥・神教丸 Singokwan（神の力の丸藥）・艾草 Mokusa（艾草の粉）・萬金丹 Mankintan（一萬の黃金の煉藥）・天眞膏 Tensingo・萬天膏 Manten-ju（誤りたる和蘭語の上書に Vruggmakende Middel と書す）等を購求す。和中散 Watzjunzan といへる萬能の藥は胃痛・頭痛に殊に效ありと稱へらるゝものなるが、余が偶然後庭に出でしとき、石龍膽 Swertia rotata の乾かせし草と橙皮との大なる俵數箇を開きて取り出して、藥物を細粉に引かんための臼にかけんとするに遇ひて、其秘密を發見したり。石龍膽は余既に前に優れたる苦味の藥材なるを知れり。是と橙皮とは此賣藥の主成分なり。

梅木村の賣藥

主人は甚懇切に我等を接待し、我使節が我等と同じく彼の饗應を受くるの光榮を與へざりしを遺憾としたれば



第十九圖　梅木の賣藥店（補）
（東海道名所圖會ヨリ）

シーボルト江戸參府紀行

余は彼の來らざりしは都合あしき爲なりとて之を謝し、親切なる主人と其家族とに小き贈物をなし、なほ園内の手入の行屆きたるより、主人

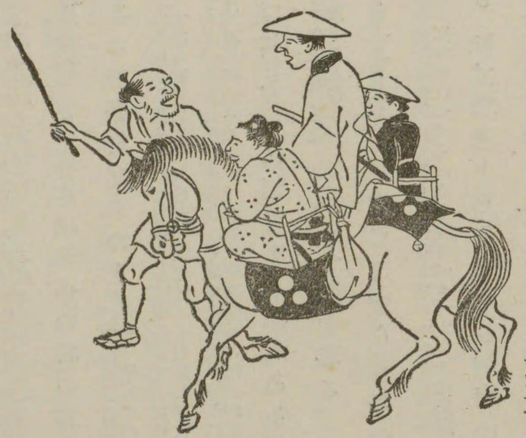
植物採集の依托

を植木好きの人と推しければ、近傍の山に植物を集めて、余の京都の友人を介して、出島に送らんことを托したり。余は諸方の植物研究に都合よき位置なる土地にては、いつもかゝる採集を囑托して、稀有の植物が選採に漏れぬ樣するに勉めたり。○梅木村は現今栗太郡葉山村大字六地藏と云ふ村の一部分なりと云ふ。此賣藥所は寛永年中より有レ之。其家を大角彌右衞門と云ひ、今もかく稱ふと云ひ。和中散の藥方を傳へしは京都の津田宗左衞門・藤原是齋（後に織田彦十郎）といへる人なれば、今もそこの賣藥を梅の木の是齋藥と稱ふ。此家は明治天皇陛下御臨幸の節にも御行在所になりしと云ふ。（中川泉三君・細野正君報告）

三方荒神

余が徒歩にて旅を續けしに、一家族全部一頭の馬に乘りて（向ふより來るに遇へり。此地方にては此の如くにして旅行し、これを三方荒神（サンボウコウジン）Sanbokosin と呼ぶといふ。馬は兩脇に竹にて編みたる細長き籠を着け、婦人子供は荷とともに之に居り。荷鞍の上には男坐りて馬を御し、又は僕をして之を導かしむ。かゝる騎馬は便宜にして、又乘る人互に談話も出來る故、我歐羅巴の婦人には賞讃を博すべし

櫻村（サクラムラ）Sakuramura ○今南櫻・北櫻に分る。以下數條中川泉三君の報告による に近く野洲河（ヤスガワ）Jasugawa あり。廣き石塊に被はれたる川床にて櫻山（サクラヤマ）Sakurajama と菩提山（ボダイ）Bodaii の間を琵琶湖の方に向ひ流る。我等は



第二十圖　三方荒神（補）
（東海道名所圖會所ヨリ）

石部（イシベ）Isibo の近くにて大なる石灰製造所の傍を過ぐ。○中川泉三君云。此附近の石灰は滋賀縣にて有名なり。今も石部の西端東海道の南に沿ふ山脈に石灰製造所あり。寛政中に始めて經營し、年來販賣路廣くして今に石部町第一の產物なり

石部にて小休憩の後平山（ヒラヤマ）Hirajama と高雄山（タカオヤマ）Takawojama の間なるカナヲ豐沃にして稻田・栗畝竹林の交代する低地に旅行を繼續し。橫田村（ヨコタ）Jo-

○中川泉三君云。橫田といふ村名今はなし。橫田川と云ふはあり、荒川と云ふは其事なら

シーボルト江戸參府紀行

kota の脇にて荒川（アラガワ）Aragawa の竹橋を渡る

ん。此川は甲賀郡大河原の山谷より發し西北石部を過ぎて野洲川となり近江湖水に入る。此川に明治以後は長百六十六間の長橋を架するも、其以前は河床は大體砂礫にして其間に水流るゝ所に三十四間なりしと云ふ。

のみ輕便の土橋を架したり。それは橋桁の上に横丸竹を組みて其上に土砂を盛りたるなり。大雨にて水嵩増すときは此橋流れて川留となること多かりき。文久三年將軍家茂上洛の際には川に長短三橋を架し其延長合せて

横田川邊の燈籠

大なる燈臺を立てたり ○中川泉三君云。此燈籠今も川北に屹立し、甲賀郡植木村大字泉の所屬なり。横田川の北詰、東海道の東南側にあり。花崗石にて高さ三十二尺、笠石九尺四方、周らすに四間四方の石柵を以てしたり。此處古へは渡船四隻にて、旅客を渡し、中古より右の通り土橋を架けたるが。暗夜方向に迷ふもの屢ありたれば、村人青木甚左衛門の首唱にて、文化の初年より旅行の人々、金刀比羅信仰者等より義捐金を集め、これによりて築造したるものにて。竣成は文政五年の八月なり。本文に琴平云々とあるは記錄中に琴平講信者のある故なり

水口 Minakuzu に到着す。城のある美しき市街なり ○水口侯は加藤能登守明邦(文化五年—安政三年)にして、文化十二年家督、弘化二年沒せる人なり

こゝにて筒蘭蒿 Tsutsuran Katsura, Paeonia Japonica Th. もて可愛らしき小籠を編む ○東海道名所圖會に「名物は葛籠細工の店多し、殊に釜敷をよしとす。茶人紹鷗利休などの好にて作らせけるとなり」とあり。中川泉三君の意見には葛藤なるべしと云ふ。午後旅行を進め、大野 Ono にて二三よく作りたる剝製の鳥及び二三の水禽を購へり。剝製は二羽の朱鷺にて。其一ッには薔薇紅色の氈毛あり、又一ッは羽毛の白きものなりき。白鷺と交りて此邊に降り來ると云ふ。八時に土山 Tsutsijama に到着し、こゝにて一泊す。

土山

三月二十七日(我一月十九日)早朝土山を立ち出で、蟹ケ坂 Kanikasaka の山中を貫きしが、夜中甚く結氷せしと見ゆ。鈴鹿に憩ひ ○本文に Susaki とあるも鈴鹿ならん 險阻なれど手のよく入りたる山路を越して、坂の下 Sakanosita に至る。ドクトル長安 Dr. Tsoan ○湊長安なり 我等に二三日先だち行きたりしが、余は彼の骨折にて此にて多數の山地植物及び一匹の珍らしき鯢魚(山椒魚 Sansjo-no-iwo)を得たり。此山に生くる魚にして、鈴鹿山 Suzukajama 殊に奥手 ○恐らくは地名ならずして奥の山手の意ならん の山清水に棲息して、時としてそこより濕ひある水涯に出で來るといふ ○此時捕獲したるもの一つは、シーボルトが後に生きながら和蘭に持ち歸り、ライデンの博物館に置き歐羅巴に有名となりたるものなり のよく知る小き種類は惡血性疾病の治藥として賣買せらる。

鈴鹿山

山椒魚

此山の植物は主として針葉樹なり。松・檜・杉・羅漢柏・樫等なり。下草としてはアラカシ・桃葉珊瑚・胡頽子・黐木あり。土地は丈低き小篠を敷きたる其間に硃砂根又は小き灌木生長す。路傍には楊櫨・薔薇花を着けたる

杏樹を見、綿棗兒も花さき、二三葦花をも見たり。我等は筆捨山 Fudesutejama の上を行けり。有名なる畫家狩野氏 Kano ○古法眼元信 が、此山を畫かんとしてこの景色の斷間なく變化するために筆を投げたりといふ。午に關 Seki に留まり、十二時半頃出發す。關川 Sekigawa に傍ひ行けば、土地は東と南とへ著しく平坦となる。その內に竹の藪の代りに豐沃なる稻田現はる。二時に近く龜山 Kameyama に達す。カナリ大きくして殊に城 ○城主石川主殿頭總安（寛政十年—天保四年）なり の近傍に美事な位置を取りたる小市なり。

關

四日市

夜十一時近く、四日市 Jokaitsi に到り、こゝに一泊す。余は余の研究には たゞ夜あるのみなれば、此の午後は乘物の中に假寢したれば、色々興あること見るべきものを多く見損なひたるなるべし。午睡は余を新しき作業に引立して、それを深夜まで打續けたり。

三月二十八日 ○我二月二十日 好き天氣に我等は朝五時半より旅行をカナリの平野に續けたり。稻田は今や菜種を植えたるが、小麥其他の穀物の畑

と打交り。西北には鎌嶽 ○Kamakasaki とあれど、恐らくは鎌ケ岳ことならん の雪を戴ける山嶽ありて地平を限れり。次で我等は富田 Tomita に憩ひしが。大なる街道の傍に里程は細かに揭げられ、街道の兩側に堆き岡の頂上に櫻樹又は松を植えて里標 とせり。此邊三十六町又は五十町を一里とす。

富田

再度の收穫

我等は朝明川 Asa-agegawa を越えたれば、稻田の廣き平地展開す。前にも述べし如く日本人は彼等の稻田に於て或る穀類の間に他の穀物を同向の行列に植えて、兩度の收穫を得るなり。かくすれば後の穀物は其初め發芽中は丈高くなりたる前の穀物によりて太陽の熱を遮られて、後に成實する時になりてそれだけよく肥えて成熟するなり。小麥・大麥の間には藍・麻・大根・胡瓜・甜瓜等を蒔き。穀物の根と葉とを置き、日日の水樣の肥料を注ぎ、よく注意して雜草を拔き取り、絕えず鋤を入るゝによりて、田地を此の如く間斷なく供用し得る樣にするなり。十一

桑名

時に近く我等は桑名(クワナ) Kuwana の前驛に達し、鐘其他金物の鑄方を見る。鑄型は細かく篩に掛けたる灰白の砂より成り、それを竹の杖のある丸き槽の中にて濕し、その槽の中央に桿を挿み、その桿の横脇に翼を付けこれにて極く簡單に隨意の形狀を與ふるなり。余は此處にて一名の若き神官に遇へり。白き衣を着、漆したる帽冠(カムリ Kamuri)と特種の矛(ホコ Hoko)とを提げて異樣に見えたり。桑名はカナリ大いなる防備ある市街にて尾張侯の治所なり(○桑名の城主は尾張侯にあらず。城主は此少し前文政六年より松平城中守定永(寛政三年―天保九年)なり。其前寛永十二年より寛永七年迄同家は桑名に在城、寛永七年より文政六年までは松平下總守在城なり)。こゝにて停留し。骨折りて正午の觀測を城の脇にてする機會を得たり。後直に我旅行を木曾川 Kisogawa の上に續けて城の傍を過ぎたり。城は船多き川と美しき草原・藪などに彩られたる土地とにて吾人に快き變化に富む好景色を呈したり。

三月二十九日(○我二月二十一日)夜の明けとともに、我等は春の天氣に惠まれつゝ我旅をつゞけ、稻田たる豐饒なる平野を穿ちて行きしが、今は人々そこ

稻田の手入

に大根を蒔付けて、時節は正に稻田に、他の家政用なる穀物・蔬菜を扶植するの適切なるに目を付けたり。殊にそれは再度收穫のため、田地の收得とするよりはそれを改善するの一方法たるに於て愈然るを認めたり。稻田は(陸杭は別として)植物の成長の際水の下に置き、成熟に先だちて水を拔くは人の知る所なり。細き小粒(コマカ)になり水に濕(ヌ)れたる泥土は、太陽の甚しき熱にて强く堅まり、多數の細き稻の根と混りて堅き塊となり、收穫の後に被(カブ)むり來(ク)る水はよく浸み込まず、根の完全に腐敗する樣促すこと叶はぬなり。それ故人は土地を數尺の深さに剩して大きな塊(カタマリ)となし、之を隴畝にそひ、三四尺の距離なる狹き蒔床の上に投げやりて、根や刈株の腐敗を早くし、そして此堆土の背に菜種を蒔くなり。この小岡は水上に一尺位も拔き出で、それにて水多き場所にても再度收穫を得べし。これに尋ぎて余はまたよく手の入りたる橋上に

日光川 Nikogawa(ニコーガワ) を過ぐ。川床は兩堤防の間にありて、稻田よりも高し

シーボルト江戸參府紀行

故郷の思ひ出

余は旅中屢〻河・小川(〇の兩側)にいと高く積み上げたる堤防を見たるが、それは旱魃の來るとき稻田の灌漑のためにするよりは、雨期又は天候惡き時の汎濫に備ふるなり。眞直にして並行する綠の堤防(ドテ)には樹々を植込みて、人をして和蘭の運河を思ひ出でしむ。概して此地方は和蘭の平澗にして運河に貫穿されたる地方と共通なること多し。余は備に此の母國に似たる平野に於て、かくも疲れたる旅行中に我に研究のため十分の安意の與へられざりしを遺憾としたり。

我等は我使節の取決(トリキメ)により江戸到着を早くする爲め、毎日日本の十里以上を後にすることゝしたり。

余の日記に略〻述べたる所より察すれば、左程勞することなくして京都より江戸までの旅行日數の延長の許可を(日本人の側より)得べきに拘らず、余が我使節の目的を達し、我政府の期待に副ふために、かゝる珍らしき國の旅行に授けられたる日夜を如何に斷間なき勤勞を以て過

ごせしかは之を見到ること容易なるべし。

余はビュルゲル君とともに、經度測定の時を得んために、一行に先だち行き、宮(ミヤ) Miya より三里九町なる園津 Sonotsu といへる農村の傍にて好機會を得て之をなせり。我等は之に尋ぎて砂子川(サノゴガワ) Sanogogawa ○石田元季君云ふ。佐屋より熱田に出づるに川五ツあり。佐屋の方より數へて。日光川・下田川・蟹江川・砂子川・萬場川なり。此中にて呼聲のサノゴ川に近きは砂子(ナスゴ)川あり を越すため舟に駕りたり。廣き川床は屢〻砂洲に斷たれて、千餘の野鴨は集がりしが、是れ藩主の命令にてこゝに飼はるゝなり。急ぎ足にて十一時半近くに宮の前驛に達せり。其前に大なる木造の倉庫あり。其中なるは盡く檜木にて、こゝを周(メグ)繞る山々より筏にて送致せしものなり。此地方にては(〇運搬に)甚適當なる車を用ゆ。丁寧に磨き上げたる欅もて極めてよく作りたる人力にて挽くものなり。余は此處にて大急ぎにて植木職の庭園を訪ひたるが、色々の觀賞植物のある中に左右均同の黃瑞香(ミツマタ)の花が滿開せるを見たり。十二時の數分前に宮なる我等に定められ

京都より江戸へ

たる旅舍に到り、直ちに晝食す。こゝに日本人たる余の友及び舊門人

水谷助六

來訪したり。中に水谷助六（ミツタニツクロク） Mizutani Zukuroku ○名は豐文、字は百獻、鈎致堂と號す。尾張の人。寛政三年生、天保四年死。父覺尊・松平君山・淺井春道・小野蘭山等に順次從學し、名古屋藩藥園の監守となり、植物動物鑛物を研究して通曉せざるなく。文化中より信濃・美濃・近江・紀伊の諸山に採草し、物品識名・同拾遺・蟲譜・蟲類寫眞等の著述あり。シーボルトの日本植物誌に數回其說を引用せり・東郭 Tokaku ○本文にはたゞトーカクとあり。何人なるや疑はし。東郭は次の大河内存眞の號なり

東郭

あり。助六は經驗の深き植物學者にして、余は之と出島より文書上の交際をなせり。東郭は醫學に於て門外漢なり。余嘗て之に天產物の蒐集を依托

伊藤圭介

せり。余は當地にて伊藤圭介（イトウケイスケ） Ito Keiske ○錦窠又太古山樵と號し、名古屋の人、享和三年生、明治三十四年死。父玄道・實兄大河内存眞・水谷助六・藤林泰助等に順次從學し、早くより植物學に志あり。尾張・參河・山城・攝津・大和・伊勢・志摩に採草し既に一家をなせり。本文記す通り、この時シーボルトに面會してより、頻りに就て學ばんとし、文政十年遂に長崎に至りて從遊數ヶ月益〻得る所あり。尾張藩の洋學翻譯教授・德川幕府蕃書調所・醫學博士從四位男爵となる・大河内存眞（オークチソンシン） Oku'si Sonsin ○名は重敦、號は恒庵又東郭、寛政八年生、明治十六年死。伊藤圭介の兄なり。名古屋藩の醫師にして、嘉永年中奥醫師に進めり。醫學は名古屋藩の淺井氏を師とし、本草は水谷助六を師とせり

水谷助六

に近付となりしが。此二人は後に余の研究に多大の便宜となれり。水谷は萬有學の一大友人にして、余に萬有諸科に亙りたる蒐集材料を齎したりしが、其中には宮附近に產する稀有の植物につきて、特

リンネの植物綱目

有にしてよく乾燥したるに、日本名・支那名を附したるあり。日本支那の二三の果實もありたり。化石物中には完全に備はりたる甲蟲などあり、其他の採掘品もあり、結晶體もあり、二三魚類もあり。眞河豚（マフグハコフ）・海馬（ダツノオトシゴ）の乾燥せる標本多數あり。此等は、日本趣味にて珍重されたる雜駁なる蒐集なり。なほ二三甲蟲類・蝶類をも余に授けたり。彼が目擊したる稀有の動植物はかなり細かに畫かれ、中には乾腊植物の畫きたるもあり。何れもその眞に迫れり。殊に余の目を惹きたるは、二冊の肉筆の日本植物の畫集なるが。それには各植物にそれ〳〵リンネ（○（一七〇七—一七七八）瑞典の人植物科學の改革者にして今日の植物綱目の始祖なり）の名を附し、その屬名を掲げ。總體にて一百二個の內・鑑定の誤まりたりと思はれたるは纔に四個のみなりその鑑定種屬の內・日本植物としてケンプェルチュンベリーの記さゞりしも多く。余のいまだ見ざりしものも二三之あり。余は心婪らしくも、彼に對して如何なる文藉を參考してかくまでにものせしかを問

ひたるに、リンネーの荷蘭語の書物が彼の研索に用をなせるのみなるを知れり。その第二冊目には宮附近の昆蟲類と爬行類との圖を載せたり。水谷は『その植物園に二千種許の植物もあらば、隨意に選採らるべし』と云ひたるも、時少なくして之に應ずる能はざりき。この地は鐵の細工等甚よき商品の買ひ求めべきため、前々の使節はすべて一日一夜こゝに留まりしに、此度は宮の出立急がしく、右友人達の持來せし諸品を一々打見る時だになき程なりしかば。余の友人は『次の旅舍まで余がそれを携帶すべし』とて、天産物をすべて余の駕籠の中に置きたり。余は水谷の求めにより輿中にて點檢して、余の知れるものにつき鑑定することゝせり。鑛物は皆ビュルゲル君に送り、精細なる點檢を求めたり。

駕籠の中にて讀み書き

日本の肩輿の中にて便利に書き又讀むこと叶ふべきかと云ふ問題は此に起るべく。若し一度此の旅籠の節度ある蕩搖に慣るゝならば、そ

は出來ぬことにてはあらず。固き鉛筆にてのみならば、余には都合よく書き記すこと出來。是によりて余の此旅中の研索は頗る容易となれり。余は此小き飛び行く研究室内にて、我輿夫の甚好まざるに拘らず、必要なる書物器械を具へたり。只乘物の底に坐ることは長き旅の煩ひにて、其爲に(〇脚は)全く痺へ又強堅となるなり。余は途中稻田の上に數多の白鷺が青鷺同樣徐歩しつゝ食物を捜るを見たり。余は近き村の乙名につき、報酬を以て此稀なる鳥を射取らんことを求めたるが、藩侯は此にて鳥銃を使用するを禁ずと聞きて思ひ止まりたり。晩には深夜まで友人どもと語りあかしたり。鑛物の中に一箇のよく保存されたる甲蟲の化石にて甚稀なるを發見したり。奇麗な綠色の黑曜石等もあり。畫の中にては黑鶴及び火笛嘴の五尺長なるが注目を惹きたり。余は水谷に對し植物解剖學を說き、此地方の稀有なる植物を蒐集することを依頼したるが。余はかくて日本花卉の知識につき

京都より江戸へ

大に余を益したる勇ましき大學者と親き友誼を結び得たり。

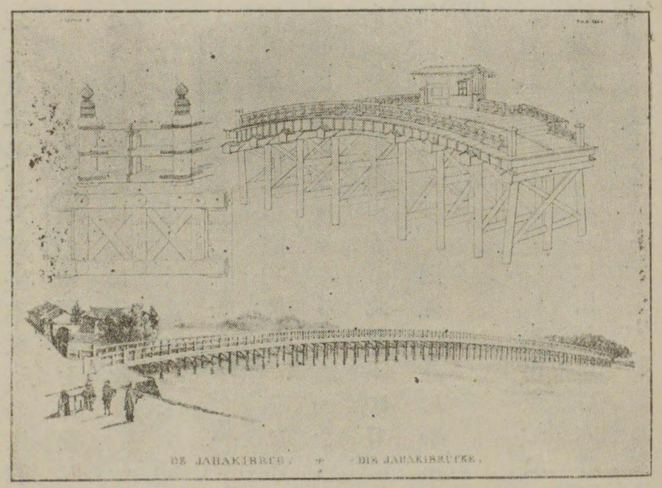
水谷助六・伊藤圭介・大河内存眞は此時より余の日本を去るまでに熱心に中部日本の稀有なる植物を捜索し乾燥し寫生することに從事したり。

岡崎

三月三十日（○我二月二十二日）我等は六時頃に池鯉鮒（チシユ）Tsisju を出發し、廣き道を低き松林を穿ちて三河の國侯の治所なる岡崎（ヲカザキ）Okasaki に至る（○藩主は本多中務大輔忠考ノ文化二年―明治十二年）は文政。四年家督、天保六年致仕なり。市に入る前に矢矧川（ヤハギガワ）Jahaki-gawa あり。廣き砂磧に中斷されたる川床を越えて日本國最大の橋を築きたり（第廿一圖）。

矢矧橋

此橋は甚堅實にして、日本にて甚貴重さるる欅及び檜を用ひ、此地の藩主の命令にて作りしものにて、七十五の弓桁より成り。その長さは余の計算にては九百三十巴里尺、日本人の言ふ所にては二百八間なり。その横幅は凡そ先づ三十尺と推定したり。岡崎はカナリ大きなる市なり。其町通りは清潔にして、多數の商店を備へたるが。その住民は



第廿一圖　矢矧の橋

シーボルト江戸參府紀行

富有とは推し得ず。大なる城ありて、其樓は高く女媟の上に挺きたり。路上にて注目せし士官より推測するに此城にはこれ迄旅し過ぎし城堡よりはより盛なる衞戍あるが如し。余は職人の内に樋匠・鍛冶匠の多きを認めたり。午餐の後・直に旅を續けたるが、是より過ぎし市部は前過ぎし市部よりも、外觀更に貧弱なり。余は出來惡（デキノシ）き鵞の剝製一ッ・狐の剝製二

京都より江戸へ

三を買求め、狸・穴熊・獺・貂・蝦夷の海豹等の毛皮を見たり。偶然にも花商の店にて、硃砂根の四變種を見出したり。前に高價にて勸められしをこゝにて甚廉に手に入れたり。二時に近く我等は藤川 Fusigawa に來り一行は此處にて少く憩み。余はビュルゲル君と徒歩にて山路を過ぎて、法藏寺(ホーゾイジ) Hodsoisi に至り、後の旅のために小食し。菫(スミレ)・末莉・龍膽(リンドウ)・綿棗兒(ツルボ)・野芹菜(タネツケハナ)・茶・多數の隱花植物が花に滿ちたるを發見したり。

御油 赤坂

我等は名ある村々なる御油(コイ) Koi・赤坂(アカサキ) Akasaki を過ぎ、帝室の府(幕府を云ふ)に向ふ一行に遇へり。此村々にては殊に多き青樓を見。晩の十時に吉(ヨシ)田(ダ) Josida に達す。過激の旅に極めて疲れたり。夜深き迄余は切なる用務に就けり。

三月三十一日 ○我二月二十三日 味爽出發せねばならず。松林と稻田と交代する山上の平地を通るに、田畝には大麥裸麥を植えたり。

二川 白須賀

二川(フタガワ) Futagawa・白(シラ)須賀(スカ) Sirasuka などゝ云ふ左程にもなき而も廣き村々を過ぎて海岸に下

れるに。此邊の植物は低き松樹・一尺の高さもなき位の山躑躅・枍(ヒサガキ)・之に添へる丈猶(ナホ)低き竹籔に限りたり。我等は海濱にそひて荒居(アライ) Arai 迄徒歩せんと相談したり。海岸には小砂を撒きて鏡の如く平なるが、今滿潮にて強き激浪あり。浪の退く時に砂の表に洗ひ出されたる雲母(鐵雲母)は明るき黄金の光輝を放つ。我等はそれを分析のために集めたるが、それは又石英の内にも交りてある如く、石英は其母石なるが如し海濱の貧しき小屋に住ふ漁夫は一種の小艇を用ふ。其舷側は繰穿(ヤリウガ)ちたる高き木材にて作り、外觀(ミカケ)は堅固なるも、甚だ麤雜にして、その長さは凡そ十一歩なり。

鐵雲母

海岸にて我等は鵜・鷗・海猫・二三の貝類に注目したり。小き半透明の魚にて海月の如く輝き、同じ物質より成り、海波に浸され、粘液の如き物塊ながらに一尺も飛上るものありて、我等の注目を惹きたり。其名を白(シラ)魚(カラ)又鱠殘魚(クワイサンヨ) Sirauwo oder Kwai-sanjo と云ふ。余はこれに口の他に腮裂を

白魚

シーボルト江戸參府紀行

見出さず。而も眼や神經系統はあり。我獲物は此他に數ヶの牡蛎・海蟹・二三の蝦等なりき。

荒居

十一時に近く、我等は太だ疲れて荒居 Arai に到り。食後に松平伊豆守 Matsudaira Idsuno Kami ○三河の吉田の城主にして名は信順。(寛政五年―弘化元年)文化十三年の家督。天保十三年秋死亡せる人なり、この時新居の關所の警固番なり

今切

立派なる船に坐し、今切川(イマルガワ) Strom Imarugawa とて、此に濱名湖(ハマノコ) Hamanoko をなす川の一哩巾なる河口を渡る。左に連山を・右に低き海岸を見て、麗はしき眺望を縱にす。○一行此所に到着すれば本陣の者來り迎へ、船の用意宜敷段案内之上、檢使は番所に上り、會釋し、大通詞はカピタン召連、番所に罷出。御船貸與の禮を述べ。小通詞は他蘭人を召連辭儀なして通り、船場に待居りて、檢使・阿蘭陀人・大通詞及町役一人官船に乘り、小通詞其他は別の船にて渡る(享和二年參禮紀事)。

濱松

其處此處(ソコココ)に松林のある海岸を穿ちて、河渠は舞坂(マユサカ) Majūsaka に通ず。こゝにて舟を捨てたり。河渠は大石にて築きし堤防を杭を打込みて支え作りたり。退潮には甚淺し。我等は駕籠にて濱松(ハママツ) Hamamatsu に行きたるが。夜に入らんとして到着せり。興ありしは海岸に挿し込みし刺(トゲ)ある灌木を用ひて、貝を取ることなりき。

掛川

四月一日 ○我二月二十四日 我等は掛川(カケガワ) Kakegawa に向ひ旅行を續く。正午に見附(ミツケ) Mitsuke に留り、烈き雨空(アマゾラ)に六時近く掛川に着く。御神燈(ゴシントウ) Gosinto・燈籠(トーロー) Toro と云ふ二個の黄銅の燈臺のある黄銅の門を通り過ぐ。此神の門は日本人の記念柱にて神祠への道を標(シツ)し。祠よりは屢〻數哩も隔てたる所に建てられたり。こゝの祠は秋葉山(アキワサン)大權現(ダイゴンゲン) Akiwasan-Dai-gongen 即ち大威德ある秋葉の山 Herbst-Blatt Berg der grossen strengen Tugend と稱ふ。此驛に前の和蘭の使節たるヘンミー Hemmij を葬むりたり。○ヘンミーは姓にて名はギースベルト Gijsbert 一七四七年生、一七九八年死亡せる人なり。寛政九年甲比丹とともに來朝せり。一七九八年は寛政十年にて、同年の三月ヘンミーは一行七十餘人とともに江戸參府、將軍德川家齊に謁見し、其歸途四月二十二日此驛に來り病重くして、其二十四日遂に死亡す。翌日當地の天龍寺に葬る。大正十四年土地の人人の發起にて和蘭公使の贊助を得、碑を其處に建てたり。長崎志續篇に云「寛政十年ヘンミー拜禮畢て四月二日江戸出足後、病氣漸々に不レ勝、島田驛にて滯留保養いたし。同廿一日掛川驛迄到りし處、翌朝より發熱甚だ募り。同廿四日於二同驛一死亡す」。

日坂

四月二日 ○我二月二十五日 今日我等は日坂峠(ニシサカトーゲ) Nisisakatoge を過ぐ。此峠は其東の方は佐夜中山(サヨノナカヤマ) Sajono-nakajama と稱ふ。こゝに鐘・石・動物に關する古き傳說あり。其鐘を打てば立願者は黄金を與へられ、道の中途にある石(ワ

ッケ Wakke ○何事なりや不明なり は其昔し自から叫えたることあり ○俚俗、啼石、其動物はそれを見たる人、必ず死すと云ふ言ひ傳へにて ○古き鐘とは無間の鐘のことにて俗傳によれば嫉妬深き遊女が嫖客の他の婦人と結婚するを妨みてその妨碍をなし彼等を無間の地獄に墜さずばやまじと打續けしものなりと云ふ。石とは夜啼石、ことにて、俗傳によれば或人妻が武藏なる夫の許に赴かんとて此石の傍に來り憩ひしに山賊の爲に斬殺されたるが、其時より夜々此石鳴動せり。此婦死するとき胎兒生きて此山の觀音に救はれ、成長の後彼山賊を退治せりと云ふ。動物とは昔し某獵夫あり殺生甚しかりければ、息子頻に之を諫止せしも慣りて、遂に之を雪中に殺せり。その妻之を悲み精神に異常を呈して死せるが、死後に一個の鳥類に化し、蛇身にし羽翼ありて人を取喰ひ傷ふこと數知らず。三位中將良政と云ふ人勅命により當地に下つてこれを退治せりと云ふことを指すなり 今もその由來記畫記は寺の僧侶食等より○旅人に賣付けらる。

山の住民はいと貧困にして、街道に沿ふ村々に出でて、飲食物を賣りて生業とするが如し。我等は金谷村 Kanaja に至る。此には山の方より來る激流大井河（オーイカワ） Oigawa が、今は數多の小枝に分れたれど、廣き床にて海に注ぐなり。川床は十町の巾あり。大なる大石塊にて被はれたるを見るに、此河は時々高く漲ぎることありと推せらる。その枝々は流れ荐急にして、橋を架けず、又越すために舟を用ひず。人及び荷物は特に練れたる强力の人々によりて、肩の上、擔荷の上に載せられて、事により

第廿二圖　大井川

少なきは二人、多きは十二人互ひに助け合ひ水流と戰ひつゝ頸まで水に浸けて足を運びつゝ渡すなり。

我等は先に日坂村 Nitisaka にてクロノメートルにて經度を測りしが、今幸に河の右岸にて日の南中を測るを得たり。その間に我乘物は擔架に結付けられたれば、それに叫びながらの鯢魚を殘し置きたり。熟練したる擔夫はこの激流を甚心易く越させたり。

人一人は通常の擔夫一名の肩上に乘り、他一名二名の擔夫之を支えつゝ越ゆるなり。高貴の人は小き擔輿又大なる擔輿にて運ばる。擔夫は極めて之に鍛練することを要し。季節を問はず丸裸露になり、たゞ陰部を輕く覆ふのみにて、終日危險なる職掌に就かなければならぬなり。聞く所によれば江流の高さに割合して八十乃至九十六錢を得ると云ふ。余は此職業を危險と云ふは、何人にても、もし擔夫の過失にて江流に奪はるゝことあらば、擔夫は決して死を以て罰せらるゝと聞きたる故なり。我等はそれより島田 Simada に午食し。四時後に藤枝 Fujieda に到り、此地にて一泊す。我等は遠く高き嶽より烟の騰り起つを望みたり。

藤枝

四月三日（我二月二十六日）六時に近く藤枝を去る。藤枝はカナヲ大なる市なれど、其家屋の手入れ惡きより富の低きを窺ふに足る。街上には諸種の鱶・鮫・鰐の皮を多く陳列したり。日本人は大抵の軟骨魚類を巧みに加工するを解して、刀の鞘・劒の欄は多分は此の如き魚皮のよく精に研ぎ又種々の色に漆せるもて作りたり。されど和蘭支那より渡來の鮫の皮は勝れたりとて、日本人間に其價高し。蝦夷 Jezo の松前 Matsumai よりも動物の色々の魚皮到來し、其中にて鱘 Lin は特に尊重せらる。今や路は次第に狹くなり、峻しき・密林に被はれたる山にかゝる。宇津谷峠 Utsunomijama と云ふ。それ以來余の知りたる稀有なる花卉はそこに豊に滿々たり。山胡椒青莢葉・烏樟及び是迄見ざりし種類は余の研究材料となり。狸の一別種もこゝにて手に入り、又歐羅巴のとはカナヲ違ひたる鼬を捕へたり。十一時近く丸子 Mariko に達し、午餐の後に府中 Futschu の方へ旅を續け、安倍河村 Awegawamura の脇にて、大井河同樣にして、安倍河 Awegawa を擔ぎ渡さる。今日は昨日よりも寒し（華氏二十八度）。余はこの鍛練したる人々が寒さのために戰慄するを見て驚きたり。人は然も余に『此人々は冬中は川に入りて却て煖まる如く感じ

宇津谷峠

て、寒さの影響に惱まさるゝことと今時よりも少なし』と語りたり。

駿府

尋で直に府中 Futsju に到着し。長き通りを徒歩にて練り行き、此地にて名高く、一廉の工藝品たる木細工○桑細工・編細工○籠細工を見んとしたり。此地は竹にて編み、極めて美術的に細工したる小き籠・時として價高き木材にて作りたる家具・其他漆器類・人形・右の彫刻等にて日本全國に名高し。午後には此種の細工品を我等に齎らしたり。皆實に驚くに足る美術堪能の賞讃を博すべきものなり。されど商人は價を募るものなれば、誰にも言ひ價の四分一は安心して擯り得るなり。

此永遠に同一に輪廻する國柄に於て、何か新しき事件は稀有なり。然るに今我等は凡そ六十日許前に此より數マイルなる沖津 Okitzu に一隻の支那ジャンク Eine Chinessche Dschonke が漂着したりと聞きたり。

漂着せる支那船

此航海人等は乍浦 Saho より長崎へ事なく渡航すべきを、進路を誤まりて此に來れるなり。舟の修繕と必須なる索具とを取付くるための他

は、乘組人の上陸を許さず。今や舟は數日中には此入江より日本の外海を繼續し得ぬなり。然も此船の舷上には前に支那海岸に難破し漂流したる日本人數名乘り居るなり。

國船の入り得る唯一の港たる長崎へ曳き行かるゝ樣準備整ひたり。余が度々曳船につきて記すには、人々皆驚くならん。されど(〇此邦の)法律は嚴重にして異國の船は一隻たりとも、此くせずは彼の商港へ航

○ケンプエル日本志史第一卷第六篇に云ふ「余の日本滯在中日本海岸に漂着せし外船少なからず。かゝる場合その乘員は生存者死亡者はすべて船具小舟とも盡く長崎に輸送して、こゝにて取調ぶるなり。長崎奉行は人々か嚴重に詳細に殊に漂着の始末につきて訊問すべくして、人々の言語・本國をなほよく調ぶるために和蘭商館長は此審問に招かるることあり。今の館長は余をも帶同せり。將軍の名譽の爲に華美にして高價なる行裝を以て行はれたり」とて、その數例を擧げたり。本文に擧げたるは我國その支那に漂流せる支那船に關するものなり。奥州南部領の者等十二人にて、七年前、主用にて江戸に赴かんとし、厚州沖にて難風にあひ、或孤島に流付き、それより外船の助けにて漂羅に至り、又澳門に移り、福州浙江を經て、其間四人の死者を出だし、其内八人は文政八年清國の日本通商船なる沈氏の船・劉氏の船に分乘して日本に向ひしが。途中又難風にあひて、沈船は九年正月屋久島に漂着し、劉船は同正月朔遠州下吉田村に漂着したるが、劉船には支那人百十五人と漂流の日本人三名と乘居たり。此船は文政八年十一月廿四日乍浦を發して日本に向ひたるなり。シーボルトの記載せしは此劉船にて。此年正月十九日に下吉田村より清水港に挽入れられた、掛川の城主太田氏橫須賀の城主西尾氏警固の命を受け、其後三月九日此船はこゝ日又々平戸浦元島にて難破し、五月七日長崎に着船したりといふ(長崎志續編卷八卷九)。

シーボルト江戸參府紀行

鶉

京都より江戸へ

四月四日（○我二月二十七日）強雨の中に七時頃府中を去る。長き鄙き家屋に挾まれたる街道を通りて、東の方へ行く。少數の左程でなき商店を見しが目につきしは、其家々に時に十二羽又はなほ多數の鶉を養ひ、小き籠に懸けたることにて。之にて他國と廣き商法をなすといひ鶉は其聲の性質によりて、時に一二こばんの價ありと云ふ。余は歌手としては取るに足らざれども、羽振りのよきを二三羽剝製するために安く購へり余等の行く地方はカナリ平夷にて、北の方は霧に籠められたる山脈に移り。南海岸の方へは、稻田を敷き、通常の穀物を野に植え、そこは人工的段階となして、高きには通常の穀物を作り、低きには稻作せり。竹の森と木の林と代る〳〵あり。此處（ココ）海に近きは鈍（ニブ）く、ざわ立つ音にて知るべし。余は岐路を海岸に出で。支那のジャンクが三保松原（ミホノマツバラ）Miwono-matsubara の入江に碇を下すを見る。尋常の海藻屬の外に特別なるものなし。それより數ケ村を通り行きしが、非常に巨きなる蟹を見たり

信天翁

檢使に對し萬有學の宣傳

○日本第二版に云「是れ Inachus Kaempferi にて日本語にてシマカニなり」。就中、余は蟹の前脚の長さ四巴里尺、太さ平均四五寸なるを得たるが、前脚と體とは十と一の割合なりと云へばこれより推算すれば全身は長十五尺なるべし。余は又新に捕へたる信天翁（アホウドリ）の雌一羽を買獲たり。嘴は肉色をなして、その先は眞珠の色を帶び。脚は青褐なりしが。瘦せたる鳥にてカムチャッカへ渡らんとする途にありたるなるべし。十二時頃沖津に到着す。沖津川（オキツガワ）Okitsu-gawa が暴風雨のため水嵩增して、擔夫は我等を越さし得ずと聞きて、余は大いに喜べり。余は之に由りて今迄に集めたる天產物を檢査・整理するに幾分の時を得たるなり。晩に上役御番所衆の訪問を受く。一時間以上も余の室にありしかば、余は今迄集めたる珍希なる天產物と萬有學的材料の寫生とを示し、歐羅巴に於て萬有學の重んぜらるゝことなど適當なる說話して、彼の元來抱きつゝある興味をば猶も煽らんとし、又我が學問的發見よりすることが、日本人の利益となるを、最も明

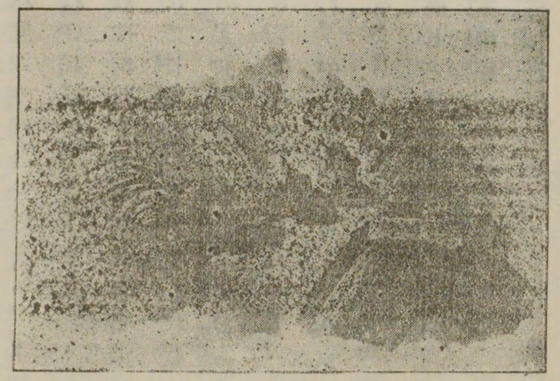
白に釋明せんとし、すべて話頭をそこに廻さんと勉めたり。彼は特に一二の反應液を用ひたる化學的試驗には目を見張りたるが如し。余は故らに鐵を靑酸に加へ、石灰を硝酸銀に加へて、その試驗をなしたり彼は去るに臨みて「余に幸福あれかし」と祈り、且『今日こそ初めて安靜と休養とを得たるらめ』と祝言云ひしかば。余は之に對ひて『こは日本の河伯（カハノカミ）の賜物なり』と答へたるに。彼は『日本の神々は君等になほ幸多くし玉ふべし。富士川（フジガワ） Fusigawa にても安息を得らるゝならん』といへり。

四月五日（我二月二十八日）今は如何にしても河を越え行くこと叶はず、薩摩侯の夫人も、他の或る藩侯の荷物の輸送も、近き邊（アタ）りの土地にて、水嵩の減るを待たねばならずとの報知を得て。我等は我天產物の整理に從事し又箱根山 Gebirge Hakone の麓に遠からねば、我使節が早急の出發を强ゆることを豫期して、山の高さを測定するため、此海岸にて二三觀測をな

さんとて氣壓計の充塡に從事せり。日本人は幾多反對を試みたれど我等は半時間の後には三哩も隔たらぬ蒲原（カムバラ）村 Kambara に行くべく大至急に出發せねばならぬことゝなれり。我等は山路にかゝり、倉澤（クラサワ） Kurasawa・寺尾（テラオ） Teraomura 二村を過ぐ。大抵の家にては三極（ミツマタ）より紙を製す此山の所々には此美しき有用植物を種より育て作り。冬になれば大きな枝を根に近く切り、肉皮を紙製の爲に剝き、楮（カヂノキ）樹と同方法にて淸潔にし、支度し、米汁錦葵根麵包根（○白井博士云和産なしと、は如何なる故に此に揭げたるか）と結合するなり。余は此處にて紙の製法を見たり。圓みある長方形の箱（紙舟（カミフネ） Kamifune）の中に乳白の極薄き材料を蓄へ、それをよく攪き絆ぜ置き、同じ汲器械の底に細き竹簀（ダケノス）にて、細かき絲を凡そ一寸半の間隔に梱（カラ）げ編みたるを仕組みて、それにて彼材料を掬ひ取りて、紙の粥を適宜の濃度に作るなり。汲器械の緣（フチ）（○四壁）は動かし又取り除くことを得。これを取除きて竹の簀を裏返せば、紙粥は自から簀より離れて（○紙となる）

紙の層葉は仕事の經過中・重ね置き、終(オハリ)に板を載せて其上に石を置きて壓搾し。次に一葉づゝ取り除き、竹にて作りたる刷(ハケ) Hakeにて平な杉板の上に張り、太陽にて乾かす。板と上につきたる面は滑(スベ)こく、杉木(スギノキ)の紋理的構造は細かに其(ソレ)に押寫さる。此の地の製紙の簡一なること、歐羅巴の複雜な製造とは著しき對照なり。日本に於て使用する紙の最大量は此簡一なる一般に廣がりたる製紙技術にて出來上がるなり。三椏樹の他に桑種の Morus papyrifera 及び其變種の他に、竹卽ち食用に供する孟宗竹(モーソーチク) Mosotsiku の筍・高山に生(ハ)ふる灌木の小岩菲(○原文には Kongampi とあり、小岩菲のことか)・奥州產の小麥藁(マスカシ Masukasi) 等を製紙に用ふ。興津川の上に日本人は急ぎて塗壁工(シヤカン)の用ふる如き足場を掛けて、重き石にて橋を作り。その上に板を置き、兩方の橋頭に石袋にて堤防を築き居たり。余はそれにて大井川其他の大河も、急場のときには、かくの如く爲(シ)なば、越ゆること出來しならんにと思へり。

四月六日 ○我二月二十九日 麗はしき春の天候に蒲原より出發したり。岩淵村(イワマツ)(○原文には Iwamatsu-Mura とあれど岩淵村ならんか)にてクロノメートルにて經度觀測を遂げ、富士山(フジサン) Fusisan の絕景を樂みしが、(其噴火口の景は日本の寫景畫より得たり。第廿三圖の如し)其三分一は雪を戴きたり。まだ水嵩增したる富士川(フジガワ) Fusigawa を一種特別な甚高き緣(ヘリ)を具へたる船によりて越したり。此にて余は前に述べし薩摩侯の侍姫が乘物にて來るを見たりしかば、余は心利きたる從者をしてこれに指環及び他の歐羅巴の裝飾品を呈したるに、喜びて受け玉ひ、使をよこして返禮を致したり。此川の左



第廿三圖　富士山の噴火口

シーボルト江戸參府紀行

岸に富士山屹立しければ、こゝにてセキスタントを以て觀測し。高さ八度四十四分を得たり。其巓は忽ち雲に包まれ、又忽ち雪に輝きて、概ね我視界の雲霧よりは低く、山は西と南とに向ひて、カナリ廣き稲田に被はれたる平野に傾きて、海道はそこを貫くなり。本市場村（モトイチバ） Motoitsiba にて日本の古き習はしに從ひ一軒の貧しき民家に憩ひたるに。客を歡ぶはやさしき日本人の情なり。人々の心からなる款待を受けて、酒に暫しの旅情を慰めたり。我等は二三の小村を經て吉原（ヨシワラ） Josiwara に達し。午飯を喫したり。余が老友算數家エム・ホーナイ Mein alter Mathematicus M. Honai ○何人なるや未知、或は最上德内の誤記か。德内のことは後に出づ は富士山は箱根山よりも一倍半高しと云ひたり ○シーボルトは門人二宮敬作をして之を測量せしめ、且つ之をして其方法を高橋作左衛門に傳へんとし、二宮は其爲に刑を受けたり。彼は日本の第一の高山にあらず。出羽 Dewa の鳥海山（チヤウカイザン） Tsjokaisan はそれよりも高しと云ひ白山（ハクサン） Hakusan 及び木曾の御嶽山（オムタケ） Omtake も同樣甚高しと云ふ。長年の和蘭親愛者たる人人余等一行を迎ふるためこゝに來れり

原驛植松氏の庭園

その中には和蘭人の一大愛護者たる中津老侯 Prinz von Nakatsu ○奥平昌高のこと なり。本文にはプリンスナカツとあり。王子とすれば中津の當主昌暢は此時僅に十八歳にして又子息もなし。弟も亦極めて幼なし。四月十一日の條を見ばプリンスが昌高なること明らかなり、故に老侯と譯したり の近侍 ○神谷源内のことなり。四月十一日の條を見よ もあり。余は原（ハラ） Hara に有名なる植物園ありと聞きて、[illegible]ル君とともに一行に先だち行き、數時間にてそこに着きたり ○其庭園は約五百坪の廣さにて、一部は京の高尾を寫し、一部は金閣寺の庭園に似せたり。持主は土地の富豪にて、天正以來代々植松與右衛門と云ひし植木屋なり。德川時代には往來の大名も此家に就きて、草木を參觀したる由なり。此時は七代目與右衛門季英（安永三年—天保二年）にして、字を伯綽、號を蘭溪と云ひ、圓山應擧に畫を學びて、雅號を應令と云ひ、代々の中最も有名なる人、當主なりしなり（現今の當主は十一代にて幹といふ。十代までは與右衛門と云へり）植ゆる樹草數多くして、櫻草の變種のみにて六百種もあり、他は推して知るべし。日々植木の手入のため人夫八人宛掛り切り。溫室には土藏二棟を宛て置く由なり。明治に入りても其十七年松原任三博士參觀の時迄。珍草は價を惜まず買入たりと云ふ。（溝口正君・白井博士報）。園は日本趣味に作られ、今迄日本にて見たるものゝ中にて、最も美しく又觀賞植物に最も豐かなるものなり。入口には木の階段ありて。そこに岩を粧（アシ）らひ、鉢に植えたる松の樹は人工に枝振を作りたり。人の觀賞する桃・櫻・梨・ズミ・細辛・蘭の屬は整然たる序列をなして栽培せられ。こゝには杜鵑花・草躑躅あり。かしこには椿・山茶花あり。小さく石に穿ちし池は梔子・羊齒に圍

まれて、かはり鯉に生氣を添へたり。人々の最好む庭樹・飾樹として別の植木床に培はれたるは、牡丹・百合・櫻草・菊・仙翁花などなり。楓の數はいと多く本種・別種の美しきを集めて、今正に葉を啓き、濃き淡き・重なり合ひ・雜り添ひて、心地よき新綠の葉蔭をなせり。園の中央には瀟洒なる小亭あり。斑布(サラサ)槭樹(ドウダン)・南天竹(ナンテンナク)・椰(ナギ)等の花樹を繞らし植えたり。温室もしつらへて、硃砂根(マンリヤウ)・細辛・琉球産の草樹を容れて、冬の凍り・春の寒さを防ぎたり。他の一方には槲・櫟・檜・羅漢柏・櫻・桃・の逍遙林ありて、その中には人の好む灌木・喬木に圍まれて立派なる四阿屋(アヅマヤ)ありて、四季の棲息に適するらし。晩に我等は沼津(スマツ) Numatsu に到着してこゝに一泊す。

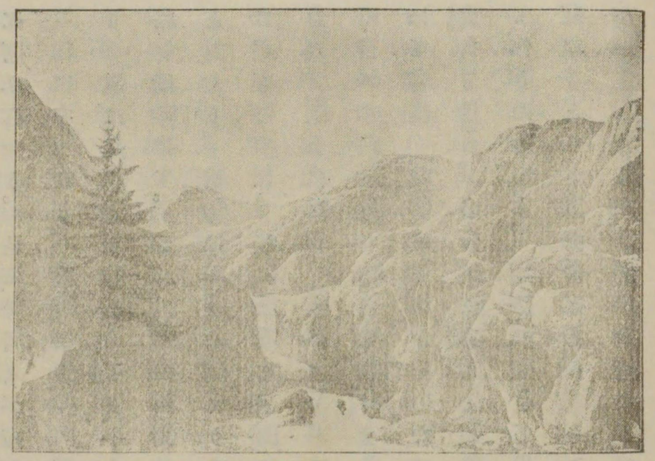
四月七日(○我三月一日)朝四時前に發足の仕度にかゝり、味爽我宿を立ちしが暫くして差上(サシノボ)る太陽に快晴を覺えたり。三島(ミシマ) Misima にて余はビュルゲル君と共に駕(カゴ)を捨てゝ、研索の時を得るために、一行に先だちたり。我等は此に大明神(ダイミヤウジン) Daimijosin (○三島大明神)の祠を見、我等の旅行を小き農村と小

箱根の富士

き密林を通して續け。森の内にて日本の鶯が歐羅巴の吟手に比べては麤(アラ)けれど、甚(イト)豐かなる聲にて我等を迎へたり。一筋の深く窪みたる路は山中へ導きけるが、草卉の路傍にあるものにつきて云へば、松・杉・檜・黐・烏樟(クロモジ)等なり。小き山路は時として街道より分れ、之と並行して籔を貫きて迂廻し、歩行者・駄馬によりよき道を與ふ。余は植物學的目的に彷徨し、ビュルゲル君は地質學的研究のために身を委ぬ。日本に於ける旅行はどこにても飲食店のあるがために、甚容易なり。食物が又極めて低廉なるが故に猶更なり。山高くなるに從ひて、土地に樹林漸く少なくなり、所々長き痩せたる草に被はれて、山を登るにも、今迄は左程の困難なくして、箱根山脈の後に聳ゆる圓錐形の富士山の佳景を恣にするを得るなり。たゞ石敷の如くなる山路の巖石は、人馬の通常穿(ハ)く草鞋によりて甚く研かれたるが故に、駄馬の歩みは頗る難澁なり。午前十一時に近く、土地はカナリ高くなれり。余は數學的機械の遲れた

るを待ちしが。ビュルゲル君は先に進みて、此山の高さを測るために氣壓計を充(ミ)て、人に前(サキ)だてり、こゝには西に富士山を仰ぎ、東北には大なる甘水湖に俯す。湖は我等の位置より凡そ五百尺も低し。惜哉道は之(コレ)に至らず、箱根驛に向ひて下り、十二時少し前に此(コヽ)に達し、緯度測定のために正午の南中を見たり。天候極めて好く、旅人の多くが、雲に覆はれて見上ぐることなしと云ふ此山も、今日は蒼穹(ソラ)全く霽れて一纖の雲だになく。余は此山脈の地文學的位置につきて面白き訂正をなし得たるが。其間に晴雨計は充(ミ)たされたり。度々觀測せるに、五十度の溫度にていつも二十六秒なりき。ビュルゲル君は沸湯にて試みたるに沸騰點はそれより低きこと三度なりしが、フンボルトの計算によれば一度は三四〇メートルなれば、三〇〇〇尺の高さとなるなり。余は色色の植物を採集せしが、友人ドクトル(〇湊長安)〇Sjoan とあれど誤記ならんは前にも述べし通り、余より八日前に京都を發したるなれば、既に幾多の植物を蒐

箱根の關所



第廿四圖　箱根山中の街道

シーボルト江戸參府紀行

集したり。植物は西南の側よりも茂密にして、箱根村の直(スグ)傍に有名なる關所あり、此山道を扼して(〇江戸)城の鎖鑰なり。何人にても南の地方より首府に行くものは、悉く此隘路を經ざるべからず。食後に我等は式列をつくりて番所に向ひたり。使節の一行三人の他は乘物を捨てゝ、徒歩してそこを過(ヨ)ぎらざるべからず。厚き塀に防(セ)かれたる角堡(マスガタ)に入りたるが我乘物の左の戸は我傭人の手

に開かれたり。是れ警固人が婦人と武器とを密送せぬことを確認する爲にするなり。我等は諸侯同様の取扱にて、乘物の中に留まりしなり。道は是れより險しく下り、平らかに滑り易き石は我等の草鞋の行路を困難にす。こゝ山脈の西側は色濃き森に被はれて、其間には楢など見たり。植物は西南の側よりも茂密にして、いまだ見ざる草樹の花さ〴〵もの多し。左には險しき山々聳え。冷き源泉は巖塊の間より噴き出で、深きに落ちて、さわ〳〵と鳴る谷川となる（第廿四圖を見よ）。骨の折れる路を辿り辿りて、畑村（ハタムラ） Hatamura に達す。精巧なる木細工ある貴き（タカ）を見る。多分は家具又は遊興用品にて、日本國民の眞趣味に通じて作りたるなり。坂路の盡きて景色の一段よき所に、江戸の富豪の別莊なりとて、小き田舍家あり。そこの主人八十歳の老人が、一人息子及び前記したる中津侯の近侍なるピーテル・ファン・デル・ストルプ Peter van der Stolp ○神谷源内 とともに我一行をこゝに迎へたるには驚喜せり。余は長安の手にて天產物と溪間に捕へし鯢魚とを得たり。小憩の後に出發し湯本（ユモト）村 Jumoto にて前述べし品物を同樣美しく飾れる店を見。十時近くに、炬火の下に小田原（ヲダワラ） Odawara に到着したり。山路の徒歩旅行に余は疲勞して、せねばならぬ研索をも此夜は廢めねばならざりき。

箱根の山越

箱根細工

ピーテル・ファン・デル・ストルプ

小田原

四月八日（我三月二日）小田原を出づ。カナヲ大なる市街にて、兩端に門と番所とあり。商店少なく、青樓多く、そこより美人の輕き朝粧にて窺ふは我等の目を峙だてり。我等は海濱にそひ、東北東に間隙を置きては海に面して進み、酒勾河（サカワガワ） Sakawagawa に至る。それは此（コ）にて二ッに岐（ワカ）れて海に入る。橋は石塊の上に置きたる荒材にて作り、それを藁と松枝とにて覆ひたり。かゝる橋は歐羅巴にても戰時には餘り廣からぬ河上には用ふべきならん。蔭多き松並木の間を大磯（オーイソ） Oiso まで至りて、午餐す地方はこゝに海濱の方に甚平夷なり。諸村は魚多き海に惠まれ、又街

酒勾

大磯

道に往來繁き爲・多少富有なるが如し。山田村（ヤマダ） Jamada に八幡神社（ハチマン） Hatsiman の祭禮（マツリ） Matsuri あり（社祭）。谷尾浦（タニヲウラ） Taniwoura にて我等は幅廣くして淺き谷尾浦川を渡る。海の方の其河岸には海鷗被（オホ）ふ如くに群をなせり。我等の乘りし小舟は上萊茵の舟に似、その形は高きものあり、平らなるもあり、日本の河流の性質に相當す。土地の耕作は此に別段發達せず。少しの稻田は他の穀類や花さく菜種の畝・又は小き森林と相交はり。街道は往來多く、我等は外々よりも乞食の多きを目擊せり。六歳乃至十二歳の女兒・男兒は旅行者を喜ばすため、品よくもあらぬ鯱矛立をなす。二人の貧しき擔夫はたゞ一枚の繻絆を着（ツ）け、他にも夜被（ヨギ）（○夜袍ドテラか）を纏ひたるあり、殆んど丸裸なるあり。此處（ココ）に領主の一兵士が馬に跨るを見、彼處（カシコ）に一人の急飛脚が棒の先に書狀を結びて走るを見る。約（ツヅ）めて云へば人は此等によりて土地の大都市の近くにあるを認むるなり。我等は時なほ早く藤澤（フヂサワ） Fusisawa に到着せるに。最大最貴の

旅館は皆塞がりたれば、不運にも青樓に入りて宿したり。こゝにて我等は明後日川崎（カワサキ） Kawasaki にて江戸より多數の友人の來訪を受くべく其中には薩摩の公子（○島津齊彬（文化六年生、安政五年死）を云ふなり。此時なほ部屋住なり）・中津侯（○奥平大膳太夫昌暢（文化六年生、天保三年死）を云ふなり。奥平昌高の嗣子にして、蘭名をモーリツと云ふ。去年九月家督したり）などありと聞きたり。

四月九日（○我三月二日）烈き驟雨の後、朝藤澤を立ち、神奈川（カナガワ） Kanagawa にて午食し尋で海に沿ひて進み、江戸灣 Bai von Jedo を兩方より挾む、兩長岬の眺望を縱にし。よく狎（ナ）らしたる一頭の熊を見る。それは眞黑にして、頭は小く尖り。巓頂に深き溝あり。嘴は短く尖り、その兩側は褐色なり。此動物は長さ四尺、不恰好に肥え、十八歳にして、十七年間檻中にあり。人に甚狎れて色々樣々の藝當をなす。

六時頃川崎（カワサキ） Kawasaki に到着す。江戸の旅舍主人（○日本橋本石町三丁目長崎屋源右衛門と云ふ。和蘭商館長府の餘程前の頃より代々同名にて幕末に至るまで和蘭人定宿なり。明暦三年正月に江戸大火にて長崎屋源右衛門方類燒のこと長崎實錄大成に載す。寶暦中の江戸行一件書留に云ふ、長崎屋源右衛門以前は藤澤迄罷越候處、一年人參座御用に付、菅沼に野守樣え相伺候處、差而急成用向も無之候はゞ、着前夜泊に罷越候樣被仰出候に付、川崎迄罷越とあり）及び數名の醫師は我等を歡

シーボルト江戸參府紀行

迎す。

六合川

四月十日（我三月四日）禮服着用にて我等は六時頃首都に向ふ。六合川（ロクゴーガワ） Roku-gogawa を越え、東北に進み、兩側に稻作したる平野を穿ち行きしが、こゝに數羽の黑き鶴を見たり。天候は我儀式的入都に幸（サカ）なく。雨烈しくして我等を乘物に退（ソコ）け、東の方地平に靜かに波立つ海灣の光景を蔽隱（オホヒカク）したり。赤楊の疎林は其處（ソコ）此處（コヽ）に八幡塚（ハチマツカ） Hatsimatsuka・大森（オーモリ） Omori・蒲田（カマタ）村（ムラ） Kamatamura に傍ひたる水溢れたる野に蔭を投げたり。此處にては魚・食品・其他旅人の小さき日用品は住民の一生業をなすなり。又も大森と同名の村あり。江戸より薩摩中津の兩侯はこゝに我等を待受けて來り、今迄彼の地位其他の事情の爲めに出來ざりし我等と相知る機會を捉え得たり（○薩摩侯とは島津齊彬の曾祖父たる島津重豪のことにて、寶暦十年家督相續、天明七年致仕。隱居後も藩政に關與し、延享二年生、天保四年死。將軍德川家齊並びに老中松平越中守の岳父として、朝野に威望あり。年若くより蘭學に興味を有し、藩内に新しき學問技術を興せりチツチン・シーフ・ブロムホツフ等和蘭商館長とも交際厚かりしと云。高輪及び大崎に別莊を有したり。中津侯といふは蓋し奥平昌高のことなり）。此の方々は和蘭人の高貴なる惠護者にして、和蘭使節が

薩摩中津の兩侯

いつも休憩する旅亭に入りて控え待てり。我等は暫く一室にありける内に招かれ謁するの光榮を得たり。兩侯並びに薩摩の世子（○島津齊彬は甚だ懇ろに我等を迎へたり。我等は初め日本流に跪き居りしに。やがて室内に運ばれたる椅子に憑るべく命ぜられしが。八十四歳の老侯は耳目なほ健に、體格剛强にして、よく話し、六十五歳より上とは如何にしても見受られず。談話の中に時々和蘭言葉を交へ、色々の珍らしき物具の蘭名を問へり。我使節との對話の終りしとき、彼は余の名を呼びて向直（ムキナホ）り『自分は甚だ動物並びに天産物を好むものなるが、獸鳥などを剝製し蟲類を貯藏する方法を學びたし』と云へりしかば。余は喜んで之に應じたり。尋ぎて老侯は右の手を差伸べて、余に診（み）させ、近頃紅走病にかゝれりと云ふ。一ヶ所なほ口を開きて、そこにミイニイ膏（○華岡流にて赤龍丹と云ひ酸化鉛を含む）を貼したり。余は現職なる侍醫の面目を損ぜぬ程度にて、其用法の當を得ぬことを說明し。必要な藥方を記して、且つその

鳥獸を剝製する方法

藥をなるべく早く第一便に送呈すべく約せり。その時余は老侯の前に日本流に着座せしに。中津侯は余の手を執りつゝ、和蘭語にて、明らかに〝Kom by my, Doktor Siebold, ik dank U. von de ontvangene brieven en geschenken〟(○シーボルト君近寄りたまへ。余は君より受けし書面と贈物とを謝す)と云ひたり。

彼は尋いで通詞の媒介にて、長き交話を續け、余の持てる懷中クロノメートルの事を問ひ。又余のエボーレット(○肩章)を見て、その譯柄を尋ねしかば、余は權略的に、官等の徽章なりと答へ。又余は自分に佩劍の資格あることを知らせんとて、劍帶を着けしに。彼(カレ)は是(コレ)にも目をつけて譯柄を問ひしかば。余は『こは劍帶にて、いつも和蘭皇帝の軍職にあるを忘れぬために劍を佩ぶるなり』と答へたり。とかうする間に此等貴族の前に茶菓を供せられなどし。なほ互に談じ合ひし間に、我々は侯等より我々の江戸滯在中に私(ワダクシ)に訪問すべしと尊き言葉を拜したり。

余等は間もなく辭し去りたり。我等は海濱にそひて擔(ニナ)はれ行けり。海濱は淺く、貝を捕るために棘(トゲ)のある篠垣を立てたり。

我等は大井村(オームラ) Omura・□□島(オハガシマ) Ohagasima・品川(シナガワ) Sinagawa を過ぎ來り。品川にて小憩す。和蘭人の親友たるもの數名江戸より此處まで出迎へ、有名なる帝室(○幕府)の侍醫桂川ボタニクス Katsuragawa vulgo Botanicus (○桂川甫賢のこと)

桂川甫賢

なり。名は國寧・桂嶼又泉藍と號し。寛政九年生、弘化元年死。桂川國瑞(月池)の孫にて代々和蘭流醫家として德川家の侍醫なり。大槻磐水・宇田川榛齋・坪井誠軒を師友として、和蘭學に通じ殊に本草に達したり。蝦夷植物本草・本草寫眞・人參寫眞・日本草木・琉球本草之圖等の著者なり。皆シーボルトの西歸の行李の中にあり。又日本各地の石鏃百二種をシーボルトに贈れり。蘭名ウイルヘルムス・ボタニクスと云ふは前の蘭館長スチルリンゲ・ヅーフの命名なり。

宇田川榕庵

宇田川榕庵 Wudagawa Joan (○作州津山藩の醫師。寛政十年生、弘化三年死。祖父宇田川槐園・父宇田川榛齋と共に我洋學の先輩として有名なり。若きより物產學を好み、蘭學を馬場轂里に受く。文政五年に西說著多尼訶經を著はしてリンネの植物綱目を我邦に紹介し、天保四年に植學啓原を、同十年に舍密開宗を著はせり。前記大路の條に既に其名を出だす)

其他の友人はその門人をして余に謁せしむ。品川村にそひ街道の兩側に青樓あり。店前の少く高くせる所に美人坐を占め、通りに向ひ祭儀でもあるかの如くに化粧す。嫖客は恥らふこともなく丸開(マルア)きの室に入り我が擇びたる美人の前に坐り、我履物を其妓の前なる妓の名

を書きたる小札に結び付けて、それを己が選擇したる記號（シルシ）とす。余は

品川の妓樓

恰度かゝる遊冶郎の出で來るを見たり。此樓舍を日本に於ては料理店の如く、生活上に必須なるものと認めて、青樓より出で來るは白晝にても、珈琲店よりする位の外觀をなすのみ。江戸灣の眺望及び碇を下す幾多の船舶は天空（ソラ）の雲に包まれて見るを得ず。街道は忽ち北・忽ち

高輪

東北に向ひ高輪（タカナワ） Takanawa よりは西北を指し。次第に弘くなり行き、凡そ百七十八歩乃至百八十歩の間隔にて木の門あり、傍に柵雛（ヤライ）と番舍とありて之を區劃す。各家屋の前には水桶あり、時として甚見事なる鑄鐵の容器あり。家屋は多分は新しく、又手入れよく。二階建にして黑ずみたる瓦にて覆はる。往來はすべて繁く活動し、家屋は富家の門を構へたる宮殿の他はすべて第一階を全く打開け、住民が今午食の準備に忙はしきを窺ふべく。歐羅巴の家屋が大抵閉鎖して中を見ることは叶はぬとは逕庭あり。我等は此の如くして今迄の地方が次第に本來

の都市に推し移りたるに氣付き。身が既に江戸に入りて、大都市に到着したることは町通りの廣く、往來（ユキカ）ふ人の繁く、兩側が富有なる商店に飾られたるところに深く入込みて初めて知らるゝなり。中にも目に立つは磁器・陶器の店、或は鑄鐵・鍛鐵の店なり。製造品を商なふの大店にては毎日五百兩、屢〻千兩の品物を取引して、大いなるは七百人も就業すると云ふ。（○物賣る店には）木履・文房具・圖畫用具・日傘・雨傘・衣服・竹細工・籠・婦人化粧品・書籍・地圖・木板・紙・米・茶・乾物・刀劍・人形・漆細工・鏡・烟草用具・龜甲の髮飾品・薄き硝子板・酒・小紋紙・玩具・乾魚・佛像・石塔・寺社用具・燈具・茶器・毛皮物・雨具・鹽漬にし又乾燥せる果實・油・野菜・藥種・白き瓶に入れたる金魚・銀魚・看板・疊筵・蓙席・蓙繩・馬具・海綿・飲食品・花・束・植物・生魚・貴金屬の粧飾品等あり。又車に板を積みて人の輓くを認めたり。是れすべて余が急ぎて過ぎ行きしとき見たるものを擧げたるなり。二時頃に我等は我旅舍に到着す。

江戸の商店

○前記の如く（ヒ）町三丁目長崎屋源右衞門方なることシーボルト一件宣告書及び和蘭人參觀ノ書類によりて明かなり。

の直後、江戸在勤の長崎奉行（○此時高橋越前守重賢は江戸に在勤せり）より使者として御番所衆二人來り、氣高振（ケダカブ）りつゝ我使節に一文書を渡したり、其内容は我江戸到着を慶び、從來のあり來りし式例を承知し、之によりて行動すべきことを要求するにあり。同一の文書をば下役番所衆、通詞、逆旅の主人にも與へて後、暫く談話して立去れり。次になほ他の使節一人來り、其の去りたる後、長崎の普請方役 Bauinspector 來り、我等に歡迎の意を述べたり。

八　江戸の逗留

概目。上役御番所衆の我使節訪問。中津侯の訪問、彼の歐羅巴の舞踏の批評。日本貴人の家族生活。日本の醫師。最上德内。薩哈連海岸に犬の利用。航海家に取りての衞生記錄。

アイノの習慣。宮中侍醫の訪問。中津侯の訪問。眼の解剖の講演地震。宮中鍼醫の訪問。種痘輸入の計畫。將軍に謁見。其儀式。城の記載。江戸在勤の長崎奉行の名の下に歡迎の意を齎らす（○長崎記によれば和蘭人江戸に到着すれば其日へ到着の趣届出づるなり。又享和二年紅毛人江戸參禮記事檢使は、江戸在勤の長崎奉行並びに切支丹奉行代り御檢使カピタンえ御對面等の節は小通詞相勤、翌日小通詞は長崎御奉行御二ヶ所・御勘定奉行長崎掛之御方に罷出で、玄關に上り、使者之間に通り、口上云々」。江戸の驕奢及び貧窮。

四月十一日（○我三月五日）我到着の直後、旅中我に同伴せし御番所衆は他の二人の御番所衆及び一人の勘定方といへもに我使節を訪問して、江戸在勤の長崎奉行の名の下に歡迎の意を齎らす（○長崎記によれば和蘭人江戸に到着すれば其日へ到着の趣届出づるなり。又享和二年紅毛人江戸參禮記事檢使は、江戸在勤の長崎奉行並びに切支丹奉行代り御檢使カピタンえ御對面等の節は小通詞相勤、翌日小通詞は長崎御奉行御二ヶ所・御勘定奉行長崎掛之御方に罷出で、玄關に上り、使者之間に通り、口上云々」）。彼等は手厚く迎へられ、リキュールと菓子とを饗せらる。是れ所謂式例の一なり。將軍の侍醫及び我等を品川まで出迎へたる和蘭人の崇拜者は來りて名を通ぜしが、御番所衆はそれを延き入れるを容さず。名刺を差出せしのみ。それは諺名（アザナ）を Wilhelmus Bo-

tanicus と云はるゝ桂川甫賢・ピーテル・ファン・デル・ストルプ Pieter van der

神谷源内

Stolp といへる中津侯の侍(サムラヒ)・奥平大膳ノ太夫の侍醫神谷源内 Kamia Gennai

○van der Stolp と神谷源内とは同人なり。京都帝國大學圖書館の所藏にて新村博士より貸與へられたる Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkskunde van N. I. Vierde Volgreeds, Zesde Deel, s' Gravenhage, M. N. 1822 に de Stuller の手書 Naamlijst von Japanders にヅーフが一八〇六年に Camija Ginnai に Pieter van der Stolp と命名せること書付たり。神谷家に現に藏する奥平昌暢侯の書狀によりても神谷源内が v. d. Stolp なること疑なし。Nieuw verzameld japans en hollandsch Woordenboek door den Vorst van Minamoto Masataka, gedrukt bij Kamiya Filoyosi. 1810 と云へる書物あり。それを彰考館書目には蘭和字書の著者として上谷廣好と記せり。ヒロヨシは神谷源内の名乘なるべし。然るに神谷氏の系圖によれば神谷源内の名乘は弘孝なり。弘孝をヒロヨシと訓むか

フアンギユルペン

ギュルペン Frederik van Gulpen と云へる商人 ○長崎市なる中山知雄君方に存する先祖作三郎の交通せる知人の宛名及書面によれば、フアン・ギュルペンは伊勢屋七左衛門なること明らかなり。ギュルペンは江戸にありて蘭學を好み、長崎通詞等と交際ありしなるべし。前記神谷源内の註に引きたるストウルレル手書の日本人の蘭名集にはフアン・ギュルペンを江戸の商人 Lea Fio Sioeke とあり。是はSの草字をgと讀みたるにて、伊勢屋兵助とも讀むべきか。七左衛門が或は前にかゝる名にてありしか。シーボルト先生の此日記次の條には Der Kaiserliche Zuckerbäcker とある故江戸時代德川家出入菓子商大久保主水の後裔なる大久保忠五郎氏に問合せたれど、右出入菓子商は大奥の出入大久保主水の他・御表の出入にて長谷川(虎屋織江)金澤(金澤丹後)の二軒ありたるのみと聞けり。安永六年の繁榮堂梓「江戸名物富貴地座位」中卷の藥品之部にいせや七右衛門(室町)とあり。七左衛門は或は此人の緣故者か。ギュルペンは多年蘭學に熱心なりしと見え。カピタンヅーフの Herinneringen uit Japan によれば、ギュルペンは甲比丹ロンベルグよりアドリヤンパウ Adrian Pauw てう名を貰ひしが、數年使ひ厭きたればとてヅーフより一八〇六年に此名を受けたるなりといふ。中山作三郎がシーボルト在留時代ギュルペンに與へたる手紙の控あり、「猶ほ春寒強御座候處。御老體は自愛專一存候、甚輕物の至御座候得共進呈仕候。聊年甫之祝詞申上驗迄に御座候。御笑納被レ下レ候はゞ忝仕合御座候。當年は蘭人參府不二相

大槻玄澤

替一御樂と奉二遠察一候。シーボルトは格別なる人物に御座候間御懇意に可レ被レ成候。相應御用など御座候はゞ無二御遠慮一可レ被二仰下一候」とあり

大槻玄澤 Otsuki Gentoku ○名は茂質字は子煥、號は磐水。仙臺の藩醫。寶暦七年生、文政十年死。建部清庵・杉田玄白に就きて蘭醫學を受け、朽木侯の補助にて長崎に遊び、江戸に歸りて後更に前野良澤を師とし、天明四年仙臺藩に聘せられ、文化八年に幕府の天文臺に出仕す。蘭學階梯・環海異聞等の著書あり、又重訂解體新書を出版し、前野杉田の次に出でたる蘭學の創始時代の大宗なり

といへる醫師等これなり。多くは和蘭語を話し又解する人々なり。又江戸に在勤の通詞

吉雄忠次郎

吉雄忠次郎 Saisiro ○名は永宜、字は永民、吳洲と號す。天明七年生、天保四年死。有名なる和蘭通詞吉雄耕牛の弟作次郎の孫なり。猪股・末次・耕牛の子權之助等と蘭學にて名を齊くせり。文政五年有名なる蘭學馬者場佐十郎が死亡にて缺員となりし江戸天文臺の天文方となり、高橋作左衛門を助けて亞歐語鼎・諳厄利亞人性情志などを著す。シーボルト在府の時高橋とシーボルトの間に斡旋し。其翌年長崎に歸りし後は、シーボルト方にて日本書物の飜譯を助けたり。シーボルト事件に坐し、高橋シーボルトの贈答に斡旋し、又シーボルトより高橋への贈物を取次し爲、永牢を申渡され、終身米澤の上杉佐渡守方へ禁錮せらる

は妻を伴ひ來訪したり ○此等醫師學者等が和蘭人に面會するにつきては一應の手續あり。享和二年紅毛人江戸參禮記事に云。御醫老衆並天文方に對談の節は前以懸合有レ之。當日源右衛門屋敷に被二相揃一候上、カピタンに申聞、用意宜敷候はゞ、御檢使御下役衆にも、致二案内一。阿蘭陀人部屋向に相揃候上、源右衛門手代を以て對談衆より御案内申候。通辯之儀は、大小通詞打交ぜ相勤使。座並之儀は毛氈之上、對談衆・夫より御檢使・。御下役・町使一並而坐、カピタン外阿蘭陀兩人・大小通詞相並候

我使節は江戸町奉行 Gouverneur ○江戸町奉行は定員二人にて、此時に職にありしは文政二年より天保七年まで在職の榊原主計頭忠之及び文政四年より天保十二年迄在職の筒井伊賀守政憲(安永七年—安政六年)なり

及び外國人應接掛 Fremdenkommissäre ○享和二年紅毛人江戸參禮記事に云。拜禮の節在府御奉行樣より被差出候御檢使源右衛門宅え御出、座敷に御控被レ成候節、罷出御挨拶申上、警固御檢使も御對面有レ之。阿蘭陀支度宜敷節、御案内申上。被二召連一御登城被レ成候。百人御番所に相控候内、御番頭樣カピタン並銘々え御目被レ渡御挨拶有レ之候。且又於二同所一宗門奉行

樣御兩人在府長崎御奉行樣御出被レ遊。阿蘭陀人並銘々に御逢、道付宜敷時分、御登城可レ仕旨被二仰渡一。御三人樣御同道にて御登城被レ遊候。右相控候内同心衆心得にて畑草盆被二差出一候。阿蘭陀人も御檢使之そと申上、烟管烟草等取寄又は酒杯も被二取寄一候。」とあり。一體・外人應接掛たる宗門奉行は柳營日次記によれば多くは大目付一人御作事奉行一人之を命ぜらるゝが如し。此時分に大目付たりしは文化十四年より天保三年まで在職の石谷備後守清豊・文政三年より十二年まで在職の岩瀨伊豫守氏記・文政五年より天保二年まで在職の織田信濃守信節・文政六年より同十三年迄在職の松浦伊勢守忠・文政八年より天保八年まで在職の村上大和守義雄にして、御作事奉行は文政五年より同十一年まで在職の佐野肥後守庸貞なり。此内より各職一人なるべし

告を得てこれを祝ふ」との通告に接したり。中津老侯 Prinz von Nakatsu より「使節到着の報より「晩に來訪すべし」と云ひ來りたる故、一行は彼を歐羅巴式に迎へんため準備す。彼は三十年來の友人たる和蘭人に一度は親しく接見せんとの希望ありて、當主としては我等外人に近き關係に立つこと叶はざる故、その官職を退きたるなり。これにより一行は此侯と遠慮なく此一晩を樂しみ過ごせり ○前の中津侯奥平從四位侍從昌高のことなり。天明元年生、安政二年死。實父は薩摩の藩侯島津重豪にして、姉婿奥平昌男の後を襲きたり。

フアンデルストルプ

Peter van der Stolp ○前出・帝室 ○德川家のことを云ふ の菓子職にて御氣に入りのファン・ギュルペン van Gulpan ○前出・御傍役 Kammerdiener カイト Keit ○何人なりや詳ならず。奥平家の舊臣水本元・梅田又八諸氏の話に「奥平昌高侯の近侍に小柳□□といへる人あり。殿樣の嬖臣にて、常に傍にあり又島津重豪侯にも取入りて周旋する所あり。後に重豪侯のため幕府に取爲すところありしが、その爲却つて失錐せることありて奥平家にて閉門となり、其内病死せりといふ。大通人にて猶斜の巷に出入し。吉原の大門を打ちて遊興せしこと屢〻なり。常に黒絹衣を着けて登櫂せるに、その着衣は、常新なるものなりしが、かゝる衣裳は長持に數棹ありたりといひ。或織方を案出して其織物を女郎に授けしより、小柳織と稱へたりしが、今も花柳界に殘れる由。奥平昌高侯の保護によりてかゝる大通もし出なり得しならん。其後裔は姓を甲斐と云ひて今も殘れりといふ、此時の遊興の樣子、又甲斐とカイトの音の似通ひたるより考るに、カイトといふは或は此小柳氏のことならん」といへり。

第廿五圖　奥平昌高の畫像（補）

シーボルト江戸參府紀行

後の參考の用にもとて記す

何れもよく其持役を勉めたり。余は遂に怺え切れず佛蘭西語にて使節に耳語きて、こは一生見しことなき非凡の喜劇なりといへり。讀む人考えても見よ。此人々は和蘭人に身なら心から傾け寄せて、片言の蘭語にて互に又我等と語り合ひつゝ、肥えたる近侍の高笑ひと、丸く髪剃り、歯疎にて、形容の枯れ切りたるファンギュルペンの勢込めたる對話と、侯の好奇心より懇切に傾き而も謹嚴なる様とは、持寄りていと面白き一團をなし。不意氣な百年前の流行に遅れたる衣服に包まれて我等が傍に寄り添ひあるに。彼近侍はまた事慣れしものにて、巧に和蘭語を操りつゝ殿の黒幕として此舞臺を取爲すこと、いとも面白くして、また可笑き極みにてはあらずや。それより侯は我等が部屋に來られしが。こゝには我等は器械・書籍などを陳列して、歐西科學の博物館にも似たらん如くして、此我等の愛護者を迎へたり。中にも余のピヤノは中津老侯の氣に入りしが、クロノメーテル・顯微鏡其他の

器械もこれに劣らざりしなり。然るに老侯は大抵盡くこれを知りたる上、種々の時計を示して、我等を驚かしたまひ。中にも一個の時計の數字板が十位系統に書き做され、金屬の調節機を具へ、それのみならず寒暖計迄もそれに容れたるは、分けて余等を悦ばしたり。老侯は前に陳ねしを甘し氣に食ひ飲みて、夜遅く辭し去りたり。

四月十二日（我三月六日）ねもす贈物の荷解にかゝれり。我等が諸方への贈物として携へたる中、殘れる品々の價値につきて、御番所衆と彼此談合へり。そは途中紛失し又は役立たずなるもある故、贈るべきよりは餘計に品物を携帯して、それを賣拂ふことと前々よりの例なり。されどかゝる品は何か事由ありて江戸に在勤の長崎奉行（二人交代にて一人在府。時は高橋駿河守なり）に賣渡すことをのみ許されたり。なほ使節一行の人々はかゝる殘剩の賣物の他に場所を取らぬ小柄なる貿易品を數多齎らし來り、通詞等日本の隨行人も同様なり（和蘭使節一行が年毎に携帯品の多くなり、幕府より制限を受けしにつきては明和元年閏十二月附通詞より町年寄に差出せし左の如き書付にて

之を知るべし。「紅毛人江戸參上に付、先年は長持駄荷數之例大通詞五棹六駄・小通詞三棹四駄に御極被ニ仰付一置候所。此度猶又荷ヶ年以前未年（寶暦元年）長持駄荷數之例大通詞五棹六駄・小通詞三棹四駄に御極被ニ仰付一置候所。此度猶又荷物數減方之儀被ニ仰出一奉ニ承知一候。隨而近頃恐多存候得共、年々仕來より、土產物等も有レ之。尤年々參府仕候得者、荷物減方被ニ仰付一候而者、難儀至極奉レ存候得共、今度被ニ仰出一趣に付ては、右持越之品等も、可ニ相成一丈減少仕、兩人の内にて長持一棹并駄荷二駄相減。猶又歸鄉之節二駄之外にも相減候樣隨分無ニ油斷一吟味可レ仕候。依レ之以ニ書付一御請奉ニ申上一候。以上。今村源右衞門・名村勝右衞門・吉雄幸左衞門・西善三郎・楢林重右衞門等七人より久松善兵衞・高島八郎兵衞宛。なほ享和二年參禮記事に竇上井に御買上として金高百七十七匁三歩とあり。內四十六匁一歩二朱は御老中七ヶ所分、二十二匁三分は若年寄七ヶ所分、十六匁二歩宗門奉行二ヶ所分、十六匁二歩六朱江戸在勤長崎奉行一ヶ所分、二十四匁三歩長崎屋分、二十四匁三歩村上爲川宮崎の三ヶ所分、二十六匁長崎掛勘定方一ヶ所分、右の內老中一ヶ所分はへるとりん（？）一反百八十八匁二分五厘・猩々緋一反八十三匁二分五厘・丁子一斤十二匁・皿紗一反十九匁五分・化色大羅紗一間六十目七分五厘。合せて六匁二歩二朱なり。他れも商買値段の五割增の規定なり。

此等の物品を賣り拂ふには每常紛擾あり。千八百十八年（我文政元年。此年の和蘭商館長はヅーフ、役人ホラケツト、外科ヘールケなり）の如きその爲に長崎奉行は和蘭の使節に江戸入に際して指令を與へて、使節一行に賣拂たき品々の目錄を差出さしむることゝしたり。我等は今朝薩摩侯より大いなる贈物を受けたり織物・生きたる禽・植木など日本趣味にて立派に飾り立てしものなり（加賀豐三郎君所藏の鍋島內匠頭直孝の夜談錄に「一日朝往きたりしなり、今日は薩州の老公・奧平の曉山老公御一緒にシーボルトに逢ひに入らせらるゝよしにて、常は土間なる所に厚板を渡しなど出來て、その側に鉢植の櫻二三十鉢・つり臺に入りたるままあり。之は賜はり物と云ひ。この外いかなる物をか賜りけん、詳には聞えず。この日老公シーボルトに逢ひしたれば、あるまじき事を通事の吉雄忠次郎等のはからひとてとがめありて、速かに長崎に歸されたり。老公よりは內々あはれませ。百金を賜はる」といへり。是日のことなるべし

來り、夜半まで留まりたり。

我等は盡すだけを盡して款待せり。音樂・歌謠・舞踊などに心から樂み合へり。侯の歐西舞踊に關する批評は特殊なり。次の言葉にて日本のと比較せり。和蘭人は脚にてよく踊り、日本人は手にてよく舞ふと云はれしとぞ。

四月十三日（○我三月七日）日本人なる友人及び醫師多數來訪したり。余は多數の乾腊植物を得たるが、學識勝れたる桂川甫賢 Katsragawa・宇田川榕庵 Wudagawa Joan より得たるは中にも優れたり。友人たる幕府の侍醫諸氏は醫師の位階・技術の專門科につき一般の關係につきて興味ある談話をなしたり。醫師には幕府の醫師・外藩の醫師・町に實地開業する醫師の區別あり。幕府の侍醫の首席は法印（ホウイン）Hoin の稱（トナヘ）あり。內科の醫師のみ之に當るべし（○當時中川常冒院・栗本瑞仙院・杉本宗泰院・野間廣泰院の四人あり）。第二階は法眼（ホウゲン）Hogen とて

外科の醫師も之に當るを得。第三階は法橋 Hokkjo といふ。又侍醫は二級に分れ、將軍の居間 Oku に出仕するものと、次の間 Omote に出仕するものとあり。甲を奥醫師 Okuisja と云ひ、乙を表エガ又表醫師 Omote ega oder Omote isja といひ。最も挺んでたるは御匙役 Onschiotsi Jaku といふ。外藩の醫師は御侍役に準じ、又法眼法橋の位を得、表醫師奥醫師等の稱は外藩の廷にも之あり。外藩の醫師又町醫にても挺んでたるは將軍に謁見を許され、御目見醫者 On minije isja と云ふ。即ち朝廷○幕府に迎へらるるを得、又謁見を許されたる醫師と云ふ義なり。その外實地醫家は公けには何の位階もなくとも、特に功勞あるは法橋の位を授けらるも、但々それを都下(江戸)にて稱ふるを得ず。『地科目』として區別するは(一)內科醫は本道 Hondo 又は內科 Naikwa と云ひ、(二)外科醫は外科 Genkwa と云ひ、(三)藥物學者は本草科 Henzokwa と云ひ、(四)婦人醫は婦人科 Fuzinkwa と云ひ、助產科卽ち產科 Sankwa も之に屬す、(五)小兒科醫は

小兒科 Shonikwa と云ひ、小兒痘瘡醫は痘瘡科 Hosoka と云ひ、(六)眼科醫は眼科 Gankwa 又は眼醫者 Gankwa od Meisja といひ、(七)口內醫は口中科 Kotsjukwa と云ひ、(八)骨折醫は整骨科 Seikotsuka 又は骨接醫者 Seikotsuka Od. Hone tsugi isja といひ、(九)針刺家は鍼師 Sinsi 又は鍼醫者 Hari isja と云ひ、(十)點灸者は灸師 Kiusi 又は手さし Tesasi 云ひ、(十一)筋肉揉按家は按摩取 Ammatori 又は導引 Doin と云ひ、按摩に筋肉を手にて扱ふものと脚にて扱ふものとを區別す

○江戸幕府の醫官には奥と表と寄合との區別があり。奥に御醫師・外科・鍼科・口科・眼科・番醫師・番外科あり。別に典藥頭ありたり。中川常晉院・栗本瑞仙院・杉本宗泰院・多紀安元・甲・山脇等諸家など法印にして、吉田長禎・中川隆玄・山崎宗運・河野良庵・村山自伯・坂岡玄・石坂宗哲・平田道祐・養安院・武田・山田・岡本などは法眼たり。此中にてシーボルトに面會したるは奥醫師栗本瑞見・奥外科・桂川甫賢・奥鍼科の石坂宗哲・奥眼科の土生玄碩・岡玄昌等あり。又此頃日本醫界にて有名ある人々には杉本樓洲・遊江長伯・多紀柳洲・福井楓亭・小島寶素・望月鹿門・湯川安道・奈須柳村・喜多村栲齋・池田瑞仙等ありたり。

高級の醫師はすべての高貴なる日本人と同樣の衣服を纏ふ。將軍及び藩侯の侍醫は役服に主君の家の紋所を着け、士官幷びに貴族のする通り雙劍を佩ぶ。內科醫女科醫は頭を削り。外科及びその同僚は頭を剃らず毛髮を四圍より頂旋に向けて梳けづりて取結び、國民的髮飾

と似て、上に向ひたる撮角（マゲサキ）にて終る。我友人は『圓顱は高貴なる君公及び夫人に接する醫師として清潔を要する爲なり、それは治療家と共に隣の大陸より渉り來し佛僧の圓顱と同じく、又外科醫の髮飾は陳朝時代（紀元後五百五十五年乃至五百八十四年）に藝術學問が佛教に伴はれて日本に入りし頃の支那人朝鮮人の頭飾なり』といひたり。

余は我人々が餘りに御番所衆に對し遠慮し過ぎ、我使節など彼等に對し己（オノレ）が勢威を十分に保つことを解せぬものと思ふ。今日都下に火災起りしが、此機會に於て人は余に語れり『燒失せたるは三町内ばかりなれば、此年は幸なりと云ふべし』と（平方町は三ヘクタールなり）。

四月十四日（○我三月八日）クロノメーテルにて經度の觀測をなしたるが。太陽の餘り高きため、人工地平機及び六分儀にて正午の南中を定むる能はず。それ故緯度を推算するため正午觀測をなせり。午後に日本人の來訪者數多し。島津侯の使者あり。二三貴紳の病人來る。將軍將軍

の世嗣及び執政への献上品を發送す。

四月十五日（○我三月九日）晩に中津侯、島津侯の正式訪問あり。立派なる贈物を得たり。此二侯は今晩大抵の時間を奏樂・唱歌・書籍・器械を視聽（ミキ）して過（スゴ）さる。島津老侯は余に萬有學・醫學に就きて弟子とならんこと、又日本の最も難病につき短き治療書を編輯し授けんことを求めらる。なほ

第廿六圖　島津重豪の畫像（補）

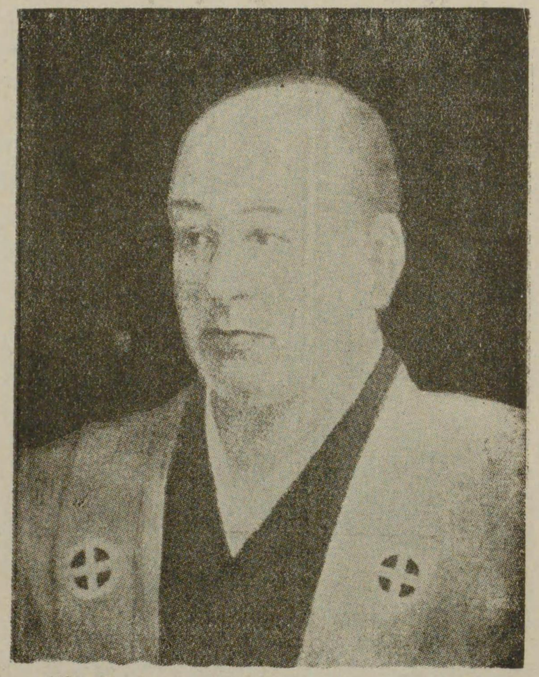
シーボルト江戸參府紀行

鳥津老侯の受學希望

鳥の剝製

老侯は鳥一羽を齎らして、余にそれを剝製する様命ぜられしかば、余は直に之を製してそこに据えたるに、大いに打興じ給ひたり（○鳥津重豪には鳥名便覽の著あり。美濃紙一枚を縦にして、一枚に一鳥を畫き、二鳥毎に説明を加へたるが、其書の終りに曾。槃校とあり、侯の鳥譜は今も黒田（長成）家・松平（昭乘）家などに分ち藏せらるゝと聞く）。余は兩侯に盛なる贈物を呈したるに、これを受けて謝し給ひ。その返禮として皇帝（○將軍か）より拜領せしといふ扇子を手づから賜ひたり。兩侯は曩に病によりて余を招ぜしことありしが、今はやゝ回復したり。老侯の嬖姫等―其内に徳川將軍御臺所（○茂子、後に是子（安永二年―天保十三年）として、島津重豪の弟の女にて、徳川將軍の夫人なり）の生母（○島津家編輯所有馬純彦君の言に茂姫の生母は市田氏名はとぜ、市田貞行の女にして、寛[illegible]年生、享和元年死、重豪に仕へて小房となり、一男一女を生む。一女は茂姫にして、一男は奥平昌高なり）もあり―と共に來りたり。我等はその人々を款待するため、持合せの裝飾品を贈りたるが。余は其一人に胸部の硬化せるために、之を診察するの光榮を荷ひたるに、侍人は夫人の胸部を裸にして診ることを躊躇（タメラ）ひたれど、余は醫者として病を診察する以上歐羅巴の方法にてするの許容すべきを主張せざるを得ざりき。

診察に胸部を露はすを嫌ふ



第廿七圖　島津齊彬の肖像（補）

シーボルト江戸參府紀行

日本貴族の懇親なる家庭は（我前にあり。日本國民の此階級を最も幸よく代表したり。淑（シト）やかにして禮儀あり威嚴あり、又慈（イツク）しみあり、親（シタ）しみあり、正直にして、少しの慢心もなく、理性的の教化あるは、年老ひて強壯なる侯にも子供方にも、婦人方

にも、同様に之を見るべし。約言すれば是れ敎化ある歐羅巴人の尊敬を博すべき性情(コヽロイキ)なり。

御番所衆は來り見ゆ。彼は我使節謁見の當日に案内すべき勤務を有す。猶ほ一人の御番所衆よりは將軍幷びに將軍世嗣に宛(アテ)たる献上物は届濟なることを報告し。此勢に對して彼に一分金五個の支拂を濟ませたり。なほ今日は長崎奉行と、今年我等に輸出を許されたる銅の性質につきて、商議し、又これにつきて執政諸氏に演述するところありたり。

最上徳内

四月十六日(我三月十日)本日は如何に思料(オモヒ)見るも、特に注意すべき日なりけり

最上徳内 Mogami Tokunai といへる日本人は既に二日間に亙り余を尋ね來りしが、余は彼が敎育及び之と近き關係ある學問につき、知識の深き人なるを知れり ○名は常矩、愚山又白虹齋と號す。出羽の楯岡の人、寶暦四年生、天保七年死。貧しき農家に生れたれど、學問を好み大志あり。本田利明の門人として、暦算・經濟の學に得る所あり。天明五年幕吏に從ひて北海道に渡り、翌年千島に渡り。日本人として初めて擇捉島に至りし。それより北海道に留まり、天明八年にも幕吏に從ひて蝦夷の事情を探らんとて嫌疑を蒙りて入牢の身となりしが、尋いて幕府に採用されて普請役となり。寛政三年蝦夷人救濟交易の事に任じ、翌年樺太に出張し。其の後も寛政の十年十一年。文化元年乃至六年に亙り北海道又は樺太に出張せしことありて、北海道の測量・製圖・物産開拓に盡力せしこと多年なり。著書には蝦夷草紙及び其續篇あり 蝦夷樺太に關する地圖はシーボルトの手に載せられ、蝦夷島言葉など云ふ言語學的著述もあり。彼は日本

第廿七圖　シーボルトの著書に出せる最上徳内の像

余が默祕するといふ約束の下に、蝦夷樺太島の海洋との關係を包容し

シーボルト江戸參府紀行

支那並びに歐羅巴の色々な數學問題に關して解説したる後、嚴に人知れずいつしか

たる地圖を暫くの間使用すべく余等に貸し與へたり。是れ實に我等に取りて無上の重寶なり（此日の記事中、以上は特に拉丁語にて記しゝり）。余は此（コ）になほ二三最上德內の余等に告げたることを記さん。『彼の計算によれば、一緯度は凡そ日本の二十九里（露西亞の百五ウェルステー）に相當す』。『樺太島の海岸にては犬に舟車を牽かすを習ひとし、最上が彼地を旅行したるときには、七頭の犬もて彼の舟を牽かしたり。旅人は時々舟より餌を授けてこれを勵まし、進ますなり。されど暴風雨の時には人は犬を引き兼ぬるといふ。』

『韃靼と樺太と兩岸の間の海峽は日本の十二月と二月とには氷結す。アイノは橇靴を用ふ。』

『解氷の後、海上にて屢〻船舶に危險なる氷山あり。それは時として、二十平方町の大さにて、海中に深さ一町、海上に高さ一二間（ケン）の厚さにて、暴風のときには猶も高く海上に挺き出づといふ。』

『彼地の冬の寒さは、日本人には極めて害あり。我老友が千八百九年（〇文化四年 das vierte Jahr von Bunkwa の二月）サガレンに滯在せし時、百五人中五十三人は寒冷の影響にて死亡したり。其症狀は一種特別にして病人を煖めるため火に近づくれば、體は膨れて死亡す。海上にも氣候は甚不健康にて、舟人は屢〻熱發と下痢とに罹りたるが、我數學家 Unser Mathematicus は頗る健康なりき。彼の同輩は煮米と酒とを取りしが、彼は甚多く昆布を食ひ、彼の健康はその冷やす影響に繫りたり』など語れり。『海峽の最も狹き所は三里乃至五里の日本里幅にて、甚淺く、海は靜なり。韃靼人は此地にては山丹人と云ひ、屢〻日本人の樺太と稱ふるサガレン（ケガハモノ）に來り、毛革物を貿易す。サガレンの海濱は此海峽の所に於て極めて泥濘なり。此島にてはテタロトイ Tetarotoi と云ふ土を食ふ。一種の陶土なり。アイノは神の坐（マ）ます天を有し、それをコタン・カラ・カモイ Kotan kara kamoi と云ひ、造物の神の住む所の義なり。地獄の神を

ニツネカモイ Nitsune Kamoi と呼ぶ。死亡者あるとき家族間に闘爭（ダ、カヒ）あるは、人の知ることなるが、そは親しき友垣に一人の暴力的死去ある時のみにありて。其時には互に頭上に些少なる傷をつけあふなり。一友人が自然の死に取去らるゝときは、相互に悲み泣きて其死に同情すアイノの婦人が夫を失ふときは、山中に逃れ去り、深き悲哀に陷ゐり、初の數日を絶食して暮らす。單獨にて喪中の婦人方に來り得る家族の一人は腕力を以て此寡婦を其家に引戻すべく、他の男が之に赴けば、其男は罰を以て報ひらるべし。

大通詞より報告ありたり。それによれば「此年の積出の銅量は九千ピコル（ピコルは東印度に通用の重量にて凡六一基瓦に相當）と確定したり、然しかる許容は決して將來の常規となるべきにあらず、以後年毎に和蘭人側よりして新たに希望を申し出づべし」と云ふことなり。されば和蘭人は如何にも困難にして、輕くなるとは云へざる條件の下に通商的交

際を承容さるゝものなるを推知すべし。晚に我等は將軍の侍醫たち數名を食事に招待したり。

桂川甫賢

四月十七日（我三月十一日）晚に慕府の醫師桂川甫賢 Katsuragawa vulgo Bataikus 及び仙臺侯の侍醫大槻玄澤 Gentaku と會談す。二人とも和蘭人羅巴學問の愛護者なり。

大槻玄澤

四月十八日（我三月十二日）蘭（アザナ）字をグロビウスと云ふ幕府天文方高橋作左衞門 Takahasi Sakusajemon, Hofastronom Globius 來訪。余が豫定より永く

高橋作左衞門

○名は景保、字は子昌、號は觀巢又玉岡、大阪の人。天明五年生、文政十一年死、江戸幕府の天文方兼書物奉行にして、父も作左衞門と云ひ、東岡と號し、有名なる曆算天文家なり。景保は父につきて天文曆算等を學び、蘭語を修めて之に通じ、文化六年より天文方の事務に當り、伊能忠敬・渋川景佑・馬場貞由・大槻茂部下伊能の努力による日本與地全圖の完成にも其關與少なからず。幕命によりて萬國地圖を製作出版せしが、殊に蝦夷樺太方面の地學的研究に心を用ひたり。作左衞門は此回のシーボルト幕府にはシーボルト携帶の那破翁戰記、和蘭屬國の地圖等を得て國の爲めにせんとし、之を切望せる餘り、シーボルトの請によりて日本地圖を與へたるが、後に其事が覺して、所謂シーボルト事件となり。第一に罪を得て牢獄に入りしが、その禁錮中に死亡したり

來訪を得たり。是も同く歐羅巴學問の愛護者なり。

四月十九日（我三月十三日）桂川甫賢 Dokter Botanikus 來訪。

江戸に滯在せんとの希望に對し、一般の形勢都合よきことを告ぐ。晩に中津侯 Fürst v. Nakatsu 來る。

眼の解剖及び眼科手術

四月二十日（○我三月十四日）今日は眼の解剖及び眼科にて多く施行する手術につきて講義するをその課程とせり。幕府の醫官どもこれを傍聽して喝采す。侍醫諸氏の贈り呉れたる豚につきて、その手術をなし示す。

豚肉を食料とす

豚肉は江戸にては稀有なる食料なり。晩に地震あり。夜三時と夜の明（アケ）とに反復せり。かなり長く、三十秒許續きたる土地の突擊なり。江戸の地震はカナリ多くありて、一年に十回・十二回なれど、家屋の倒壞する程・左程劇きものはなし。

石坂宗哲

四月二十一日（○我三月十五日）今日迄毎朝老友最上徳内と蝦夷語の編次に過ごしたり。將軍拜謁は將軍の若君某（○續德川實記によれば、十一代將軍德川家齊の第十三男にて、松平因幡守へ養子となりたる同民部大輔齊衆前日に死去したり。文化九年四月四日生、文政九年三月十四日死亡。時に十五歲なり）の死亡により日延となる。幕府の針侍醫（ハリイ）

石坂宗哲 Isisaka Sotets（○名は永敎、字は廷玉又文和・竿齋とす。甲府の人。天保末年頃七十餘歲にて死亡す。鍼灸專門家を以て物產學に通し。寬政中德川幕府に徵されて奧醫師となり、後に法眼となる。文化の初より蘭醫學に基きて人身解剖を研究し、之を法醫學に參酌し、骨經・內景備覽・鍼灸說等の書あり。文政五年トウルリンクの江戸に來りし時、シーボルトの此參府の時に、いづれも宗哲に面會求めて鍼灸のことを問へり。）

其他醫師・知人來訪す。

四月二十二日（○我三月十六日）御番所衆（○附添檢使）より數多珍らしき植物を得たり。

檢使役の好意

彼（カレ）の我が研究に對する好意は非常なり。之によりて余は色々の自由を享け、カナリ公けに仕事するを得、從來嚴禁され居りし學問上の事項を取調ぶることも出來、又最上の如き老友と蝦夷語・地理學等の研究を繼續するも出來たり。余は御番所衆と次席（○下役檢使單に下役とも云ふ）とに玻璃器・陶器等少なからず贈與したり。

痘瘡及び種痘の說明

四月二十三日（○我三月十七日）幕府の侍醫ども終日余の傍にあり。彼等は今は初め內々にて、余が暫し長く江戸に滯在することを希望すと告げ、又それにつきて如何にせば將軍の許可を得べきか、その計畫を說けり。今日は子供の痘瘡及び種痘のことを說明せよと依賴されたれば、余は此機會を利用して、此の仁慈なる大行事を日本に輸入することに就きて

江戸の逗留

演述せり。余は將軍の命令あらば痘漿をバタヴィアより取寄せて種痘の方法を輸入すべしと告げたり。○シーボルトが種痘輸入に熱心なりしは彼の門人どもが後年に至りて時勢の然らしむる所もあらんが、皆々其爲に盡力せしにて明らかなり。伊東玄朴・本間玄調は天保初年に人痘を採種し、日野鼎哉は緒方洪庵と協力して弘化中に京都にて痘苗を製し、伊藤玄朴・大石良英・檜林宗建・同榮建などが、嘉永中我邦に牛痘を初めて輸入して江戸又は長崎等にて之を實施したるは人のよく知る所なり。なほシーボルトは長崎に牛痘種を持渡りて長崎にて兒三人に種えたること日高涼民の種痘新書に見ゆ。此頃爪哇に於ては和蘭領東印度總督の命令にて一般に種痘を取締り強制し居たるものなり。

開瞳手術

四月二十四日○我三月十八日晩に天文方諸氏友人知人等數多の訪問あり。

四月二十五日○我三月十九日將軍家侍醫諸氏の訪問を受く、其中に眼科醫あり余は眼科書及びその器械を示し、莨菪にて瞳孔を開く試驗二三をなせしに。皆々その效驗に大なる喝采をなせり○眼科醫とは土生玄碩のことなるべし。土生玄昌もこれに加はりしか。玄碩名は

ハブ土生玄碩及び玄昌

義壽、號は桑翁。安藝の吉田の人。明和五年生、安政元年死。京都和田東郭の門に入りて、歸鄉。先祖代々の眼科醫を業とせしが、更に發憤して四方を遊歷し、大阪に留まりて、高充國・三井元孺・芝支臾と往來し、白内障手術を發明し、文化五年江戸に出でてより、名聲頓に揚り治多功き故に神醫の稱を得。文化七年召されて幕府の侍醫となり、上下の信用を博せること十年。其間法眼に叙せられ、又蘭學振興のために盡力せしことあり。

命々シーボルトの參府に遇ひたるより。シーボルトが講演中眼手術に開瞳藥を用ふることを聽きて、其藥方を得んとして切望するも得ず、遂に葵紋服を與へてその傳授を得たるが、シーボルト事件の時此のために罪を獲て、免黜せられて入牢し、減宥されて後永蟄居を命ぜられ。子玄昌（寛政九年生、慶應元年死）も當時幕府の侍醫なりしが、玄碩が事に關係ありし爲もあらん、其職を免せられしが、天保八年再たび幕府に徵され、後法

栗本瑞見

第廿八圖　德川家奧醫師中科土生玄碩の肖像（補）

シーボルト江戸參府紀行

眼に叙せられたり。侍醫にして本草家なる栗本瑞見（ズイゲン）Zuigen は數箇の植物の圖卷並びに日本・支那の魚類やら・美事なる蟹類やらの圖表の蒐集を示せり○名は昌綱、後に昌臧、號は丹洲。寶曆六年生、天保五年死。有名なる本草家田村藍水の子にして、同西湖の弟なり。自身も亦醫學と本草學とにて一家をなせり。幕府の醫師として法眼に叙せられ、幕府製藥所の主宰となる。又醫學館にて本草を講義す。著書、本草存眞圖・介譜・貝譜・蟲譜千品・皇和魚譜・紅鯊圖纂等あり シーボルトが此の旅行に右等の中より諸種を。與へて大に裨益を與へたり

薩摩侯の嬖姫方に往診す。

兎脣手術
種痘

四月二十六日（我三月二十日）一人の初生兒の**兎唇を手術**し、なほ三人の子供に**種痘**を施して示せしに、立會ひたる侍醫たちみな大いに賞讃したり。最も種痘は用ひし材料の古かりしかば、唯種痘の術式を示したる迄なり。彼等の感想は皆余の江戸滯留期に關して好都合なるがごとし。

四月二十七日（我三月二十一日）再たび二人の子供に種痘せり。晩に中津侯來駕せらる。

四月二十八日（我三月二十二日）臘虎の皮一枚を齎せる人あり。オーケン Oken の所謂別種にて。Pusa orientalis（オーケンの著書九八六頁）なるべし。擇捉 Etrop の傍なる臘虎島 Rakosima にて產せるなり。價は小判七十枚なりと云ふ。この獸は六尺の長さに迄達すべし。この皮の長さは四・五尺なりき。

四月二十九日（我三月二十三日）天文方諸氏再たび來訪す。

四月三十日（我三月二十四日）余は御番所衆（檢使）に對して、幕府の侍醫たちが、余の江戸に滯在するにつき、その延期を幕府に申請するやう決議したることを告げたり。

將軍に謁見の當日

五月一日（我三月二十五日）朝六時、謁見のため立出づ。使節の三人は乘物にて日本の隨員は徒歩にて。和蘭のホテルより城迄は距離纔か二町のみ。廣き橋の上より大きな堅牢な門を通り、守備堅固の城の第一區に入る。行列は諸大名の邸第にそひて第二の橋に至り。此にて乘物を捨てて徒歩にて進まねばならぬなり。橋の彼方（アナタ）にて、大いなる門に至る。其內に百人衆 Hundertgarde（百人番所上之間）と稱へらるゝ衞士あり。此處にて我等を休憩せしめ。甚疎末なる茶を進め。又我等をして支那の紅き毛氈にて覆ひたる木の長椅に掛けしめたる、その設備は我等に餘り壯嚴の感を與へず。こゝに長崎奉行一人（高橋越前守）外國人應接掛 Fremdenkommissare（是は宗門奉行にして、俗に長崎掛とも稱へ、前々よりの慣例にて、大目付一人御作事奉行一人之に任ずるなり。此時の宗門奉行は何人なりや未だ取調つかず）・二人・警固方命

令官（○百人御番頭。此時戸田主殿光逸なり文政八年七月より同十二年五月迄在任）來り我等を迎ふ。こゝより我等は廣き石の階段の道を上りて、城門に至り、そこより登營す。門には豐富なる彫刻ありて、其建築式は佛寺にさも似たり。宮殿に入るとき我等は御番所衆と一廷臣とに迎へられしが、此廷臣は（○御坊主衆）悉く頭を剃り（○我僧服に似たる黒き服を纏へり。かくて我等は應接室たる一室（○殿上の間）に延かれ。そこにては隨意に立ち、坐（スハ）り又行くを得たり。身分高き貴族の族人たち辭儀のため來れるが、是れ公式にてはあらず、たゞその好奇心を滿足させんためなり。

此人々の中に將軍の親族なる越前侯 Fürst von Jetsisen（○松平越前守齊承（文化八年―天保六年）文政九年正月家督せり）・近江侯なる井伊掃部頭 Ji Kamonno Kamit（○名は直亮、（齊政、六年―嘉永三年）文化八年家督・前に長崎奉行たりし唐津侯 Fürst von Karatsu（○唐津侯は小笠原佐渡守忠眞（後長恭と改）にて、文政六年家督、天保五年致仕、文久元年死亡せる人なり、唐津侯は長崎奉行たりしことなし疑はし）・平戸侯 Fürst von Hirado（○松浦肥前守熙（寛政三年―慶應三年、文化三年家督、天保十二年致仕せる人なり）などあり。其他の好事家としては將軍の世子（○後の將軍德川家慶（天保八年―嘉永六年）なり・親族もあり。

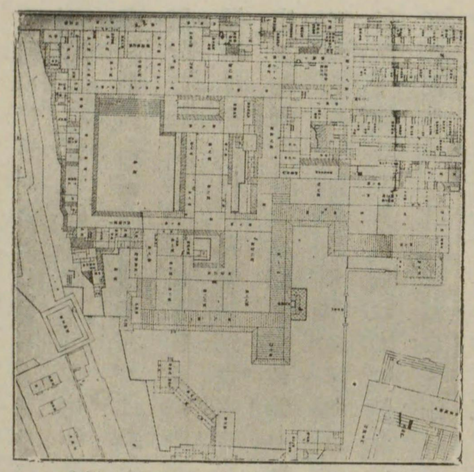
一ッ橋侯（○一ツ橋兵部卿齊禮、（文化十一年―天保元年））・田安侯（○田安中納言齊莊（文化七年―弘化二年））などもありと聞きたり。なほ樣々の官位あるもの・侍從の人々も我等を見たるが、其中の二三は我等に和蘭の言葉文句を扇に又紙に書きて呉れと頼み我等も其望を叶へやりたり。

此に長崎奉行及び外人應接掛は我等を尋ね來りぬ。謁見の儀式は左の如き順序なりき。先づ使節は敬禮を稽古すべく謁見室に入ることを求められ、一廷臣に導かれて其方に進み。我等は沈默しつゝ少し離れて從ふことを容さる。我等は右の方へ、木を組みたる長き廊下を歩み、次に疊を敷きたる室を過ぎて、四方木の廊下に圍まれたる一ッの大室に達し。其第二の角にて御番所衆及び使節一行の二人は立留まり、使節のみは猶少し進みしが。右へ一角（○角柱を云ふか）程にて、此もそこに立ち留まる。彼（使節）は今一千疊四方なりと云ふはるゝ謁見室の前に立ちたり。こゝにて長崎奉行及び二人の外人應接掛現はれて堅く身を前方

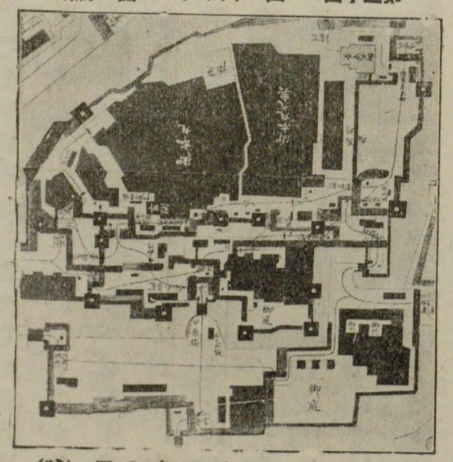
に屈げながら、使節をなほ二十歩許(バカリ)伴ひて廊下につきて進み。長崎奉行は面(オモテ)を室内に向けて坐(スワ)り、使節は廊下の板敷の上に日本流に坐らねばならず。暫くして後、奉行に従ひてなほ十歩を進め、疊敷なる三階段を經て、小き一室の一支柱に至る。用材はすべて美術的に彫刻せられ鍍金せられたり。目撃するはたゞ立籠(タテコ)たる廣間のみにて。左には献上物は机の上卽ち白き檜にて作りたる擔架に似たる献上臺の上に趣よく列ねたり。使節はこゝにて二度(フタタビ)・三度(ミタビ)拝禮を、なしたるが、それは日本の風習(ナラハシ)通り、膝の上に踞(スワ)り、深く頭を屈(マ)げるにて、各拝禮の間には一々立上るなり。第三拝の後に顔色の著しく白き二人の美しき若者來りて第三の疊敷の階段まで降りたり。將軍の二子なりといふ。○將軍の二子とは徳川齊明(文化六年―文政十年)と同齊荘(文化七年―弘化二年)なるべし。此時齊明は十八歳、齊荘は十七歳なり。齊明の兄に徳川齊順あれども、此時既に二十六歳なれば、本文の記事と合はず。今使節は暫時其儘立ち居りて、身を四方よりの觀覧に供へねばならぬなり。

謁見の主なる下稽古は是にて濟みたり ○享和二年蘭人參禮之節長崎奉行肥出豊後守手控を見るに左の如し。信用番御老中御出駕相成、

自分は宗門奉行と同道それへ罷出。かぴたん罷出候旨口上にて申上。それより宗門奉行同道にて殿上の間に罷越。紅毛人に逢稽古致候様申達。直に落縁通り〈召連、稽古兩度爲レ致候節、披露之御奏者番も儘出候。稽古相濟又殿上間に爲二引取一申候。それより宗門奉行衆と同道献上物改め申候。是に於て奉行は彼を數歩引戻し、式後人は彼



第三十圖　江戸城中の圖（補）



第三十一圖　江戸城中の圖（補）

將軍に謁見

を待合室に導けり。暫くの間(アヒ)歇を置きて、使節拝謁の合圖ありたれば、奉行及び侍醫兩三人は使節を導きて立ち、兩御番所衆及び通詞之に從

シーボルト江戸參府紀行

ひ、我等も窃に其後につき忍び行けり、—使節及び其二随員に取りて甚榮譽なり—室の第二角にて兩人の御番所衆は立留まり、通詞は第三角迄随ひ行きたるが、使節は一寸そこに留まりて、諸大名及び他の高官は少馬（シバラノノ）は之を見守りたり。之に尋ぎて静なるチッシュ（○譯聞えたるは是れ最も高貴なる方の近づき賜へる信號なり。各人急ぎて我所屬の場所に就き。奉行は使節を導きて、小き謁見室の第一柱まで進み。大通詞はそこにて廊下に跪き、尋ぎて奉行も二人の外人應接掛とともに廊下の板敷の上に坐りて、使節の方へ送りたり。かくて使節は疊敷たる三階段の前なる廊下まで進み、こゝにて身を膝の上に落（オト）して深く屈（カゞ）めたり。彼はたゞ鍍金せる木の彫刻を前に見るのみにて、將軍に就きては其片影だに見上げ得ず。忽ち奏者の呼聲あり『オランダ、カピタン』と云ふ。—奉行は深き恐懼に陷ゐるもの（○カピタンを云ふ）の衣端（コロモノハシ）を牽きし内に—謁見は畢りぬ。

（○文恭院殿御實記には、たゞ簡單に阿蘭陀かぴたんまた御覧あり と記すのみ。享和二年紅毛人參禮記錄によれば「自分（長崎奉行）

は御錠口明き承り、直に殿上之間一相越、紅毛人寄候様申達。落縁通り召連。御車寄之邊に差置。自分は大廣間三之間邊へ控罷在。宗門奉行衆御下段之方より被二相廻一候を見、落縁通り罷越。かぴたん引上（上より三本目の柱之通りに控させ申候。大通詞も是迄者附添出候。自分は三本目御柱際御掛縁に控罷在候」。御先立大目付衆見掛、落縁二本目御柱際に引上げ。自分も同所御落縁に最前之通控罷在候」。宗門奉行衆會釋にて、直に御落縁え罷出。かぴたん引上げ相進み。一本目御柱より二枚目之板に平伏。かぴたんは自分の左の方に平伏致す。此節御奏者衆披露有レ之候に付承レ之、直に自分後を引せ申候。有跡を押へに自分も引。直に御城縁同役衆並居候席え着座致候。かぴたん一夫より落縁通、天井之間え引申候。大通詞は此間落縁之末え引控居。かぴたんと一同引申候」と入御後、宗門奉行衆一同中の間え罷越。紅毛人御用も無レ之候ゝ直に西丸に罷出可二申付一旨御目附頭を以、御用番御老中え相伺。御用無レ之旨、被二御聞一、御用御取次衆に奥肝煎を以相伺。御用無レ之旨に付、宗門奉行衆同道にて殿上之間え罷越。勝手次第退散。直に西丸え罷出候様申達。

使節は御用を終りたるを以、直に御前を退き、數多の多方面の辭儀を受ながら第一室に引返し。こゝにて奉行及び外人應接掛より彼に賜はりし最高の謁見を慶賀せられけるが。多數の大名其他の貴人も集來り、其内には將軍世嗣の最年下（トシシタ）の弟もありたり（○德川齊民・後の松平越後守にて、文化十一年生れなれば、日本流に數へて此時十三歳なり）。年方に十歳か十一歳の行儀よき男兒にして、二三和蘭語を紙に書付くることを頼みたるが、我書記役は直に其意に添ひたり。是にて儀式は終りたるが。我等は猶我使節は隨行者と共に退去し。是にて儀式は終りたるが。我等は猶我慶福につきて云ふことあり。そはエンゲルベルト・ケンプェルが記せ

し如き透明なる竹簾（スタレ）の後に藏（カク）れたる柳營前の觀劇が其後に廢止されたることなり○將軍が蘭人を上覽して往々色々の御尋あり、又音曲を聽聞さるゝことは、天和二年アンドリースクライエル Andries Cleijer 參府の時より初まり。貞享二年に至りては舞曲をも上覽ありたり。其後に常例となり。ケンプエルが元祿四年參禮の節にも彼は種々の質問を受け、歌ひ舞ひたること、其江戸參府紀行に見ゆ。其後も阿蘭陀人參禮の度に如ㇾ此。享保十一年まではかゝることありたり。其後は如何ならん。同年の柳營日次記によれば、西丸に於て阿蘭陀人音曲被ニ仰付一とあり。

西丸へ伺候

將軍及び夫人の肖像は吾人は日本の原畫より第十九圖二十圖（○本書第三十二圖なり）に寫し出し得たり。

十二時に近く我等は將軍の宮殿を去り、世嗣の（○宮殿）方へ赴けり○西丸。將軍の宮殿よりは半時間離れたれど、なほ城の最内部にあり。其方に行くには廣き道あり。左には高きチクロープ狀の石壁峙ち。右は廣き水濠に臨みたり。廣き橋の上を越え、盛なる戍衞の前を過ぎ、又甚高く架けたる橋を通りしが、そこよりは、市中郊外、江戸灣を見て、美しき眺望なり。世嗣の宮殿にては頭を剃りたる廷吏によりて一室に通されそこにて長崎奉行と度々記したる外人應接掛と我等を迎へたり。一ッはそこにありし宮中の人々より熟（ヨ）く見らるゝ爲に、こゝにて暫く休

第三十二圖　將軍及び將軍夫人の肖像

シーボルト江戸參府紀行

みし後、使節は本城にて謁見のときと同樣、謁見の禮をする席上を豫（アラカジ）め目擊する樣求められたるが。彼が歸り來るや直に謁見に呼ばれて廷吏と通詞とに案内されて出行けり。此（コ）處にても公けには「皇帝○將軍の宮廷への和蘭大使」Das niederländische Opperhooft, Gezandte an den Hof

des Kaisers と云はるる我使節は廊下の板敷の上に折り敷き、丁寧なる拜禮を世嗣の代理として少し距りて堅苦るしき態度にて疊に坐する二人の老中 Staatsrathe ○世嗣附御老中は文化七年より文政九年まで在職の松平能登守乘保・文政元年より同十一年まで在職の酒井若狹守忠進の二人なり。天保九年まで在職の森川內膳正俊知・文化五年より文政十一年まで在職の水野壹岐守忠韶の二人なりの前になさねばならず。外人應接掛は其右側に疊の上に着座したり。我等が控部屋の方へ數歩退きし後、使節は歸り來れり ○享和二年紅毛人江戶參禮記錄に云。「本丸より（長崎奉行は）宗門奉行同道致し、臺所部屋下・埋御門通り西丸え罷越申候。芙蓉之間に罷在。かぴたん登城之儀承り。時計之間入口に宗門奉行衆同道にて罷越。御老若方え御同朋頭、御用御取次衆え口奧肝煎を以、かぴたん罷越候段、御届申上。夫より同道にて殿上之間え罷越。稽古致候樣、宗門奉行衆より被二申渡一。自分召連、稽古爲レ致。夫より又殿上之間え引せ置。自分宗門奉行衆一同、獻上物改め申候。無レ程御奏者番衆、調可レ被レ申旨、坊主衆を以被二申聞一候に付、虎御杉戶外え呼上置。「奏一番衆着座見請。三之間御拭板之角え出て平伏爲レ致候。自分は此節四之間、宗門奉行衆脇に並居（但かぴたん平伏致し、直に立せ申候）。右調相濟。又時計之間入口に同道にて罷越。御用無レ之候はゝ退散可レ爲レ致段申上。（中略）蠣川相模守殿自分に御逢被レ成。表向は御用無レ之候得共、退散之節極內々山里より御覽有レ之候間、少退散見合候樣被二仰聞一候間、無レ程最早宜旨、被二仰聞一候間、夫より宗門奉行衆同道にて、殿上間え罷越、退散之儀申渡。無レ滯御禮相濟、歡申述相返す 此處にて長崎奉行と外人應接掛とは又も名譽ある謁見の慶賀を述べたり。我等はなほ暫し宮中の役人其他貴き人々の好奇心に供はりたるが、其中には將軍の家族たる方々もありしと云ふ。

そこを退き、前の通り滑かに髮剃りしたる僧の如き役人の案內にて門に至りたり。此役人どもは余には甚好ましからぬ印象を與へ、彼等の蒼白き顏色には、橫柄な破廉耻と這はんばかりの鄭寧と併せ合ひて、一種特別なる坊主頭をなし、加之髮なくて獨り立てるため目に立ちて大なる兩耳と、落付なき目遣ひと、發笑筋の痙攣する樣な收縮とは愈〻之を嫌らしくしたり。此數日間余は日本の高級社會の數百年間の文明に化育されたる圈內にありし間に、余は和蘭人が通詞・番所衆・藩侯の奴僕旅宿の主人・殊には此度の似非坊主の如き低き身分の人々に對して餘り遠慮して、之と偕りに家族的の關係にまで立ちたりと云ふに着目し、感慨いと深く、これを抑ふる能はざりき。と この失體は我等と接遇せる高等の官吏貴人とは（その態度の餘りに謹嚴なる爲めに、親み近づき難かりしより說明すべし。此の相距る著しき兩社交團は我等旅中及び首府に於て屢〻交際したる所なるが、此の

兩間にありて頗る快く、相樂しむべき・稗益ある第三の團體あり。是卽ち醫師及び幕府の學者 Hofgelehrten なり。右兩度の謁見の他に、なほ十三度の謁見ありて、そはたゞ一日の問題としては、外交場裏に於て出來べきこととは思はれぬなり。最初に我等は內城より第二廓に出でたるが、そこには五人の第一の國政參議官（此時の老中は享和四年より天保六年まで在職の青山下野守忠裕・文政元年より天保五年まで在職の水野出羽守忠成・文政元年より天保八年まで在職の大久保加賀守忠眞・文政五年より天保十年まで在職の松平和泉守乘寬・文政八年より同十一年まで在職の植村駿河守家長の五人なり）の邸あり。五人の老中を訪問

ここは城內のカナリ廣き所にて、非常に多數の好奇者は集りたり。それは城內深き處に入るを禁ぜらるる一般市民にはあらず。多分は今日將軍及び世嗣に謁見する諸藩侯又は他の大官の從者にて、城門の外に殘り居りたるものなり。第二の國政參議官（此時の若年寄は寬政二年より天保三年まで在職の堀田攝津守正敦・文化九年より文政十一年まで在職の京極周防守高備・文政五年より天保十三年まで在職の增山河內守正寧・文政八年より天保十二年まで在職の本多豐前守正意・文政八年より同十二年まで在職の林肥後守忠英なり）の邸は我旅宿に最近ければ、我等は穿き居たる金縫したる上沓（ウハグツ）にて徒步し行きたり。是れ疊敷ける室に入るには、我足具を速に日本風に脫ぎ棄て五人の若年寄を訪問

て、淸淨なる天鵞絨の足袋にて進むべき故なり。此等（〇諸侯の）住家には通例・先・三個又數個の階段ありて、次に廣間とも云ふべき室あり（玄關）。此室の前方には細かに磨き・時に漆塗せる床（ユカ）あり（〇臺）、後方は疊を敷きて、こゝに用人及び下役人坐り居り。すべて禮服を着用したり。同室の奥には鎗・弓・矢・匣（ヤバコ）を戰捷記念の如くに立て並べ、長刀は一種の架臺に載せられ、いづれも分類してありて、奥の部屋々々に通じ。我等は數名の家人に案內されて大きなる疊を敷詰めたる部屋に入りたるが。そこには前にも記したる通りの（〇我等が）進物の飾臺を置きたり。我等は此處（コヽ）にて疊に折敷く間に、三人の用人は各〻烟草盆を兩手に捧げつゝ、間（アヒ）を計るが如き緩かな步み（アユミ）にて室內に來り、それを恭しく我等の前に据えて引退き。暫くして又同樣恭き態度にて客一人毎に一種特別なる客盆の上に白き茶碗に細き粉の茶を熱水に溶したるを齎らし。次に（〇當該國政參議官の書記〇右筆）二

名は我等の前に坐り、彼等の主人が猶ほ宮廷にありとて謝辭(コトバリ)を述べ、且つ將軍謁見の濟みたるを慶賀したり。我使節は彼等に丁寧に、慇懃くは過度に丁寧に、拜禮し、參議官閣下の左右(サウ)を伺ひ、我君我長(卽ち東印度の此時もはや存在せざりし會社)の名に於て、此に捧げたる進物を受納あらんことを望みたり。かゝる內に我等各人の前に漆塗の小き盤の上に燒菓子を載せて据え、書記は我等にそれを試むる樣勸めたり。我等は挽茶にて作りし禮式ある飮物を受けて、其澁味をば花の形又他の形せる紅き色の菓子類にて甘(アマ)くしたり。相互の禮儀挨拶に通詞は時々その數語を反譯し。事畢りて我等が彼の君侯の高き惠に暇乞せし後、位望高き國政參議官の兩代理人は退き入り、我等はなほ坐し居たり。是(コヽ)に古き東印度商社の時代から其儘の光景は今も殘れり。我等の前には長き壁あり、そは押遣戶 Schiebthüre より成り、戶の格間(サンノアヒ)は我邦にては硝子なる代りに薄き紙にて張り、その紙に小き孔幾多を切り開け、

そこよりして邸中の物好(モノズキ)なる婦人が窺ひ居りて、彼等の(〇身裝(ミヨツホヒ)の)部局(ハシ)は此方より目擊し得べし。余は交々(カハル〳〵)眼の此方を覗くを見時として小き口·頭飾の一部·又は衣袂の鮮なる色彩を知り分けたり。かくして我等はさもなくば傷(イタ)ましき態度を恢(コヲ)え、所望さるゝ丈(ダケ)長き間、脛(スネ)を交叉して、靜に疊の上に坐り居たり。都(スベ)て我等の化粧具にて、身より離すべきは杖·帽·時計·指輪·襟留·殊には我使節の劍·金の大握(ツヽミ)の附いた遊步の杖などをば何(ナニ)吳(クレ)となく、丁寧に手渡す樣に促がして、それを悉く皆彼蔽障(シヤウジ)の蔭にて委細に檢分せんとするなり。余は余の重寶類を「些細の物·嫉むに足らず、余(ワレ)なくに」"Parve, nec invideo, sine me etc" と、オウィディウス Ovidius 〇羅馬の詩人の名 のせし歎聲を發しつゝ出し與へたり。かくして我等は暫くはこゝに耐え忍びて目に入り來る金塗りしたる唇·白粉に扮ひたる頰·黑く漆したる齒·可愛(カイ)らしき手などより此面白き婦人界の態景を想像に描かんと試みたり。暫しして我珍品稀物は謝辭とともに色々の

シーボルト江戸參府紀行

批判を加へつゝ返却されたるが。『此帽子は古き和蘭人のとは異なり、却りて露西亞の使節の畫像より知りし露西亞人の方によく似たり』と云ひ、又余等の髪飾をも『いかにも異様なり』などと云ひたり。我等の異國人三名の頭が夫人達に異様なりしは驚くに及ばず。我等は體型に於ても互に全く相異なりて。使節は印度に在りて乾き切つたる年古りたる瑞西人にして、甚(イト)短く切りたる白髪を戴き。書記官ビュルゲル君は黒き縮れ髪の頭したる純眞の小亞細亞人種たり。又此日記の筆者は古きウュルッブルグの大學生なれば。（〇三人三様美婦人達に異様の印象を與へたるなるべし。日本の文房具に墨と筆を贅して、我等に扇子又は用紙に二三和蘭の明文句を書くことを頼む人ありたれば、使節は之れを書記官に委ね、余も特に望まれて二三自署し與へたり。日本の風習にてはかゝる場合に、訪問者はこれに据えられたる菓子を家に携へ歸るなり。訪客は此甘味を其(ソレ)を載せて差出たる柔き紙に裹

シーボルト江戸參府紀行

第三十三圖　幕廷に於ける貴族の服裝

みて廣き衣嚢(カクシ)様なる袂に滑らすを常例とし、それは頗る捷巧(スバヤ)なるを要するなり。但我等の儀式的訪問に際しては、此菓子は、我案内者たる旅舍主人の子息が此國の習俗に應じて、大いなる二折の紙に包み。各人に一包み宛(ヅヽ)儀式紐と稱へたる色の紐金の紐に結びて持ち去るなり。之に尋ぎて前に述べたる役人たち再たび現れ來て、烟草盆と茶器とを持出でし時と同様の禮式にて持ち去る。さて兩人の書記は猶ほ一度出で

來り、我等と互に丁寧なる辭儀をなし。使節は彼の高貴なる主人に對する訣別と歡待の謝辭とを殘して、こゝに我等一同は立ち上り。暫しの骨折によりて、長く跪きしため痲れたる兩脚をヤット動かし得たり。此の如くして我等は一ッの邸を去りて、次に次にと他の邸に赴き、至る所にて同樣の應接を受けたり。將軍の廷中にて佩ぶる一種特有の衣裳は第二十一圖に寫し出せり。

此儀式もてすべき凡そ一打の訪問の經過は、大體同一の機轉を反復すことなれば、一々委しく述べず。何處にても主人は家にあらず、すべて書記が丁寧なる挨拶をなし。いづくにても拷問の責臺にある心地して跪き、物數奇の人目に曝され、いつもいつも烟草をふかし、茶を飲み、菓子を食ひ、記念の文句を書き、我珍寶を供覽せなければならず。（〇かくて此日）十五時の間、慣れざる衣服にて引廻はされ、脚を下に折り交へ、常に踵の上に身を屈めて坐せねばならずして、晩の九時頃に至りて烈し

き頭痛と惱める胃とを以て我寓舍に歸りたり。我鄙しき使節の住館は實に斯く稱ふる他あらざりしなり。我等は死にし如く疲れたれど猶ほ外國人應接掛の用人數名が主君の名にて我謁見の成功を祝ひ、我使節に小き贈物卽ち雞卵入れたる大箱と二尾の大海魚とを齎らせるを迎接せねばならざりし。

五月二日 〇我三月二十六日 昨日と同樣、我等は九時頃城に向ひ、江戶町奉行の一人〇當時町奉行は柳原主計頭忠之・筒井伊賀守政憲なり と和蘭人から寺社の君 Templherren と呼ばれたる高官（實際は宗教事件部の長なり）〇當時の寺社奉行は文政五年より同十一年まで在職ノ太田攝津守資始・文政八年より天保二年まで在職の松平伊豆守信順・文政八年より同十二年まで在職の土井大炊頭利位なり とを訪問のためなり。此等諸家にては主人不在なりと云ひたるが、江戶町奉行は、其家族と次の間に隱れありしのみならず、彼の家人と一所に我等を近寄見んとて出て來り、しかも我等と語を交せしかば、隱蔽れたる彼等は我等より嚴しく觀察されたり。我小き寶物は昨日と同じく蔽障の後にて廻覽され、國政參議官の邸第に於け

るよりも明らかに竹の籠の後に婦人の形姿(スガタ)を觀たり。事を變(カ)ふるために二三燹き皿を供へ、茶の代りに酒とソキュールとを饗せらる。寺社奉行方(カタ)にては一室に迎へられ、そこより法廷を見たるが、これには砂利を敷きたる前場あり。被告は此(コ)處にて、膝を突く姿勢にて訊問せらる。此邸にても書記が主人に代りて進物を受け取り、我拜禮に對して前例の如き應對をしたり。此の如き役宅 Amtswohnungen の多數は普通人民の入り得る城池の外部にあり。こゝには時として非常な群集あり。我案内役並びに之に附添ふ武士は時として我乘物の道を開くために、暴威を用ゐねばならぬなり。余は正座すること叶はぬ程の烈き頭痛ありて、次ぐ〳〵の大部分は蓐(ネドコ)にあらねばならざりし。晩に余は將軍の爲に反譯すべき植物書を受領せり。それはワイマン Weimann の嘩馬版なり ○此原書顯名は Taalryk Register der Plaatsche Feguur-Beschryvingen der Bloemdragenbegewassen door den Heer Joh. Wilh. Weimann, erste Apotheker en Medelid. Lidt du Stadsgerichte de Regensburg etc. Amsterdam ty Zaccharias Romberg, 1736-1748. 7 vols と云ふなり。シーボルトの „Nippon, Archiv zur Beschreibung von Japan u. s. w.“ の第二の註に曰く、「この事業

を托せしは故あるなり。シーボルトを長く江戸に留むる口實として、友人・官醫等は彼に植物學的一大作業と此書物の飜譯を求めたるなり。和蘭使節へも此事は公けに依賴せられて、その旨シーボルトに傳へたり。然るに此計畫はそれより數日經たる中に使節と日本政府との間に商業政策上の事態に付き行違を生ぜしために頓挫するに至りしは遺憾ない。シーボルトは大きに失望して使節とともに長崎に歸ることゝなりたり

五月三日 ○我三月二十七日 幕府の侍醫・地方藩士の訪問あり。彼等の妻・娘も故障なく我等の室に通され、いづれも余等に小形なる贈物・可愛らしき手技(テワザ)・品(モノ)などを携えたり。旅亭主人 ○旅亭の主人長崎屋源右衞門 も家族共をつれては毎日の樣に來り、余等の參府を賀(イハ)ひ、又余を招きてその家族に交りて一夜を過ごさしめ、彼の家族は日毎(ヒゴト)・日毎(ヒゴト)にその人數を增したり。余は今日、前に此主人の如き下級日本人との交際につきて、餘り嚴酷に批評したることを自ら悔ひ責めたり。寂莫に於て身をなるたけ快くし、靜聞(サビシ)き夜々(ヨナ〳〵)を慰めんとて、盡すべきだけを盡したること、之をあり難しと認めざるべからず。人は何事にもよく慣るゝこと一種奇妙なるものたり。今や我等若き者には、此親切なる家族との交際はなくてはならぬものとなり。我等は暮六ッの鐘の響く頃には、日毎に此老たる牧者たる(○旅

舍の主人)の歸家とこれに附纏ふ色彩(イロドリ)競(キソ)ふ一群羊○婦人どもを云ふとを待ち詫ることゝなりたり。此次日より我使節は次第に懊惱となり。此晩に彼は出島にて我等を取卷く日本人に對し、またかしこに行はるゝ惡弊に對し、フィリッピカ Philippica (惡罵の文)○アテンの辯論家がマセドニヤのフィーリップ王に對せるが如き痛罵の言辭を云ふを書きたり。彼はそれを窃(ヒソカ)に江戸に在勤の長崎奉行に屆けんとの目途あるが如し。○シーボルトの著書「日本」の第二版の註に曰く、此事を實行してシーボルトの江戸滯留の計圖は破棄されたり。これにつきて思合はさるゝは左件なり。此時の商館長ドウ・ストウルレルは一八二六年(或は其前年)十二月蘭領東印度總督に書を贈りて、數項に亘りたるシーボルトに對する不利の件を述べ。シーボルトが館長に反抗すること、館長に對する不信任狀を作りしこと、館長に反抗したることなしとの覺書を取りたること、或は館長に決闘を申込みたること、他の館員を引連れて館長に强要したること、殊に又江戸參府の時其前又其頃に於て館長に反抗的侮蔑的の態度を取りたることなどを訴へたり。

將軍及び世嗣に拜辭の式

五月四日○我三月二十八日將軍及び世嗣に暇乞の謁見を遂ぐべき日なり。九時近く初回の謁見に似たる行裝にて城に向ふ。但し黑の服なり。前の通り百人衞士の警固所○百人番所にて憩ひたるに、長崎奉行及び兩外國人應接掛は挨拶に來る。十一時頃初回の謁見と同じく附添檢使二人の案內にて、將軍の宮殿に參し、前の部屋にて暫くの間人々の觀覽に供(ソナ)はり

たるが。其人々は數人の大名・各種の大官・宮中の役人にして、將軍の親類數名も來觀したり。再たび長崎奉行及び度々述べし外國人應接係より舊例の如く挨拶を受け○享和二年紅毛人江戸參禮記錄に云、「宗門奉行同道にて登城致し。御揃にて御用番御老中に宗門奉行衆一同罷越。カピタン罷出候段申上。御揃後、宗門奉行衆同道にて帝鑑之間に罷越。カピタン稽古可レ致旨宗門奉行被二申渡一。夫より大廣間に召連。稽古可レ致候。尤大通詞差添出る。稽古通詞・御同朋頭を以、カピタン稽古相濟旨御用番に申上候。御廻り前に大廣間に罷越坊主衆を以、カピタン呼上げ。犀御杉戸外に寄置。自分・宗門奉行衆は山雀御襖を後に並罷在候。御老中方御着座にて四ノ間に並居申候を見、宗門奉行御用番の前に被二罷出一候御令條目御渡被レ成候と、直に宗門奉行衆引被レ申候。此節カピタンに會釋致し候と、カピタン大通詞一同二本目三本目之御柱之間に平伏致。三上因幡守御條目讀聞せ被レ申相濟。カピタン其儘平伏致し居。宗門奉行には御用番の前え罷出。御條目之御請、被二申上一候。直に御暇。拜領物之儀被二仰渡一候に付、又最前之所え着座有レ之。其段カピタンえへ被二申渡一候。此節會釋致し、カピタン引せ申候」。拜領の御臺が三臺・四ノ間御敷居際に南北え長く並候節。自分(長崎奉行)はカピタン通詞共・紅牡丹の邊にて平伏致し。引右。御臺引候と、又候最初二本目三本目御柱の間にカピタン通詞共罷出、平伏致候。此時宗門奉行衆・自分一同罷出、御列座之前え出。拜領物之御禮申上。復座。カピタン通詞共立と申候。夫より御老中方、御引懸。宗門奉行へ通詞被レ下物之御書付御渡。直に御引被レ成候跡にて、四ノ間北御椽に宗門奉行一同着座。大通詞罷出候節、拜領物之儀、宗門奉行衆被二申渡一。引銀臺御納戸同心持出候節、又候罷出、持引に致し。又候罷出御禮申候。最差引は賴二坊主衆一致し」。右相濟直に中之間へ罷越、カピタン御用も無レ之候はば、退出可レ爲レ致哉之旨、御老中方へ御同朋衆頭取次衆へ口奥肝煎を以相伺。御用無レ之旨被二仰聞一候節、又候宗門奉行衆一同殿上之間に罷越、其段加飛丹え申渡。退出爲レ致候。宗門奉行衆御條目讀聞せ之節者御廻り前麻上下に着替有レ之。西御丸え被二相越一候節は平服に着替有レ之候

又使節は彼等より規定通り拜禮の豫習を彼所(カシコ)に試むるため同行すべしと云はれ、之に從ひ行きしが直に事濟みたり。其間・我等は獨り殘さ

れあるを殘念に思ひて、我使節の謁見に伴ひ行かんと求め。長崎奉行及び大官に問合せたる後に許され、使節が將軍の前に敬禮するとき、室の入口に立留まるべしと云ふことなりし。是また十分恥づべきことなり。暫して使節は拜謁に出づべしと告げられ。謁見は我等待合室より程遠からぬ部屋にて行はれて。使節は其處の廊下板間にて、疊に坐れる國政參議官の前に、將軍の前と同樣跪づきて低き辭儀をなし。次に長崎奉行外人應接掛は國政參議官の手より命令書を受取り持ちて使節に近づき、其各條條を讀み聞かせて、大通詞に譯させたり。その內容は左の如し。○此の如く法令讀聞かすは萬治二年より始まり、寛文元年同六年延寶元年等に追加ありて、同年より永く同文なり通航一覽に引ける御日記によれば寶曆十三年三月六日阿蘭陀人御暇被下有レ之。老中列座カピタン板緣迄召出。被二仰出一之趣覺書、大目付稻垣出羽守、御作事奉行山名伊豆守、長崎奉行正木志摩守ヘ、右京大夫（老中松平輝高）渡レ之。覺書傳作事奉行山名伊豆守讀聞之。一ヶ條毎にカピタンへ通詞之者申二含之一。（筆て拜出御禮申二上之一）文政五年の式につきては御徒方萬年記に詳載あり略々之に似たり。

『和蘭人は昔より毎年一度長崎に來り、こゝにて商法を遂ぐる自由を得たれば、既に前年命令したる通り葡萄牙人と物事を共同することなかるべし。我等若し他の外國人より汝等が彼等と關係することを聞かば、汝等が日本に渡航することを禁ずべし。汝等は其船に葡萄牙人を載すべからず。』○我方にての公文。阿蘭陀人着岸二候一、從レ此以前如レ被二仰出一。奧山蠻と吉利支丹宗門之通用彌不レ可レ仕。若入魂之由、何れの國より相聞候といふ共、日本渡海可レ爲二停止一候間。彼宗門より日本への通事一切不レ可レ仕。勿論宗門之者、船にのせ來る間敷事、

『汝等後來とも日本に商法をなさんとせば、汝等は汝等の船にて、すべて葡萄牙人が日本に對する故意又は計畫につき聞込たることを申出づべし。我等は又汝等より葡萄牙人が何處かに土地・邦國を占取し、又は耶蘇宗に歸依せしめたるか如何を聞知りたし。何なりと箇樣の事柄につきて聞込みたらば、すべて之を長崎奉行に報知すべし。汝等若し支那人が葡萄牙人と申合せて事をなし、又は之を舟にて連渡りたることを知らば、汝等はそれにつき長崎奉行に知らすべし。』○我方にての公文。不二相替一日本爲二商賣一渡海仕度存におゐては、吉利支丹宗門の儀に付て、被二聞召一可レ然儀於レ有レ之者。可レ申二上之一。南蠻ノ宗門之儀に付て新規に手に入候所々有レ之哉。渡海之道筋の儀も可レ存候間、見及聞及候段長崎奉行人迄可二申上一事。

『汝等は支那のジャンクの日本に來るを奪ひ去るべからず。汝等が

船にて行く國々に葡萄牙人あらば、それと共同に事をなすべからず、又此國人（○葡萄牙人）に行逢ひたる國々あらば、汝等は書面を以て其國又土地の名を毎年日本に來る甲比丹によりて長崎奉行に進達すべし。』（○我方にての公文。日本渡海之唐船不レ可レ奪二取之一。阿蘭陀往來之國々之内、奥南蠻ハヽ出合候ハヽ可レ有レ之候間、彌南蠻人と通用不レ可レ仕一、若出合候國於レ有レ之者、其所之名、具に書二注之一。毎年着岸之カピタン長崎奉行人へ可二差上一事。）

『琉球人は日本の臣民なれば、汝等は其船小舟を奪ひ去るべからず。』以上。（○我方にての公文。附、琉球國者、日本に相從ふ國に候間、何方にて見合候共、奪取べからざる事（右數條は通航一覽に引きたる御書付寫和解書にて、延寶五年に係るものなり）。）

我使節は低く床迄（ユカ）下げし頭を、少しく國政參議官の方に向けて昂げつつ左の如く答へたり。『命令をば理解仕候。バタヴィアの上長官に傳へ申すべし』。此答詞は外人應接掛より國政參議官に告げられたる時我使節は再たび國政參議官に深き拜禮をなし。外人應接掛は歸り來りて『使節は席を立去ることを得』と告げたり。

此行事の後に我使節は外の廊下（○板緣）に來り、茲にて三ヶの大なる檜机の上なる贈物卽ち所謂「皇帝の御服」Keizerlijke Cafayen（○御時服二十枚）とて絹綿を

入れたる寢服 Geputterte Schlafröcke を授けらる。使節は之を受領したる後、謁見の際に着きし坐に戻り、丁寧なる拜禮をなし。次に又廊下（○同じ板緣）に至り、同じ時服二十領を載せたる二個の檜臺を將軍世嗣の名にて受領し、前と同樣に丁寧なる拜禮を以て之を謝したり。（○文政五年の例に「カピタン御暇に付時服三十（右大將樣より も時服二十）被レ下旨、於二大廣間四之間一、御老中列座、阿部備中守殿被レ仰二渡之一。」とあり（シ考書同前）。）

次に外人應接掛出で來り、國政參議官よりの江戸出發の許可を傳へければ、使節は又も丁寧なる辭儀を以て之を受け。圓顱なる廷吏の監督（○御坊主頭）の案內にて、反覆（クリカヘシ）・慶賀（ヨロコビ）の詞を受けつゝ、應接の室に入る。長崎奉行及び外人應接掛兩名は猶一度こゝに現はれて、謁見の濟みたる慶賀を述べたり。我等は猶ほ數分間は、出で來りし高位の方々の好意を滿足さするために留まり。それより役人の案內にて將軍世嗣の宮殿に赴けり。道は第一謁見の時に同じ。我等は別室にて短時間待ち居り、例の如く長崎奉行・外人應接掛に迎へられ、又そこにありし多數の貴顯の人々の

觀物となれり。使節はこゝにても將軍の宮殿に於ける通り、國政參議官の前に低き前屈の禮を執らねばならざりしに、今は常例の禮式に十分熟れたれば、儀例を容易にするために、さもなくば爲(ス)べき豫習を略したり。我等卽ちビュルゲル君と余とは、每時(イツ)も貴き日本人の中に混りて、窃かに使節の後を追ひしが、我等は低く辭儀するに及ばぬ故謁見の經過をよく觀察し得たり。此度は殿中に於ける我等の謁見は暫くにして濟み我等は午後一時頃既に我住所に歸り來りたり。

食後に、我長官卽ち東印度商社の名にて進物を贈呈したる政府の高官十七人の代人は返禮を進達するため名刺を通じたり。此委員は一家大抵二人より成りたるが、そを一人一人迎へ入れたり。何れも贈物に目錄を添へ、目錄に贈る人の姓名を記してあり。我等はこれら名々(イ〳〵)に菓子とリキュールとを饗し。辭し去るとき一壺の菓子二個の土燒のケルン製烟管一包の煙草を進物として與へたり（○享和二年紅毛人江戸參禮記事に云。「（十七候より）の使者阿蘭陀二階はし二御上りの節案内致。着座之上、御檢使え挨拶有レ之。其後大小通詞の内、御使者側え擢寄候節、御使者口上。一拜禮無レ滯(トゞコホ)濟珍重被レ存候。殊に拙宅へも御出に預り、目錄之通被二差遣一過分に思召候。隨而從レ是も目錄通り進に任候一云云。目錄口上書被二相渡一候節、請取、カピタンえ申聞。御禮申上候に付致二通辯一相濟。銘酒・蜜漬等差出饗應致候。退出之節蜜漬一嚢・阿蘭陀きせる二本・同たばこ一包宛差遣候。阿蘭陀大小通詞は階子際迄送出申候。」

此迎接は十七回一樣に次に〳〵と反復したるが、我使節は全く日本式に、疊の上に膝つき、首を垂れて對禮せざるべからず。齋されたる贈物は書上げたる數だけの絹の寢服にて、古き仕來(シキタリ)によりて使節が我物とすべきにて。使節の役德の中に數へられ、その二三は兎に角通詞其他の隨員出島に居殘る商社の忠僕等の手にも入り、又出島なる和蘭人の家許の配慮を委(マカ)されたる婦人輩の代表者にも贈物として持歸るべき常例(ナラハシ)なるが。今度は我使節は人も知る如く、かゝる常例を廢棄する敵役(カタキヤク)なれば、之につき甚寬大ならず。

謁見の機會に我等は市街の小部分外城及び內城將軍及び世嗣の宮殿を見得たり。左なくとも余はよき圖面の助けと口づからの陳述とによりて少しく確かなることを述ぶるを得るなり。圖面は城の外部だ

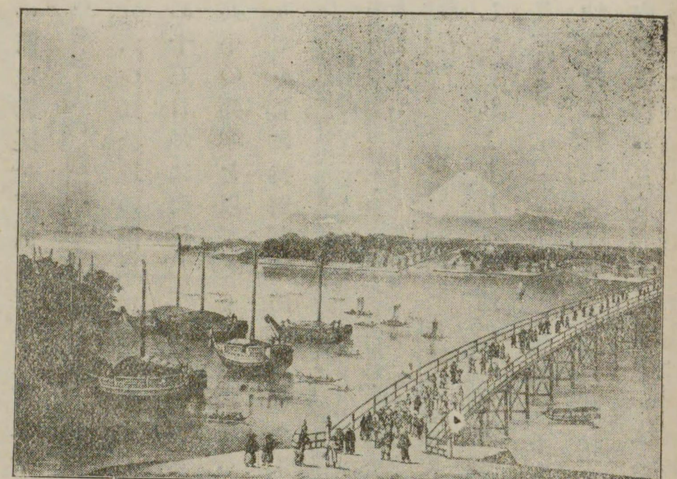
けに限り、内部の構造は最高貴の日本人にだに秘密にされたり。内城及び將軍の宮殿の詳細なる圖面は有之に相違なきも、それは副將軍たり城の司令官たる水戸侯の手にあるべし。余は幸に城番 Schlossvogt の一使用人に賄賂して、將軍の宮殿のよき下圖を得たれども。内城の築構の圖面を得ることは叶はず、是れ永く然かあるべきことなり。城の形象を述ぶるには先づ江戸市の造築方一般を知るを要す。

江戸の造築方一般

江戸は日本の總首府・政治府たるゆゑ、

(一)市本部 Die eigentlihe Stadt・(二)市前驛 Die Vorstadt・(三)城に分つべし。

本市は前驛とは濠のある防壁にて區劃され、大なる門 Mon と橋 Hasi とにてそれと連なる。門の外なる市部即ち前驛は外 Soto と稱へ、門より中は内 Utsi と稱へ、それにはいつも門の名を加へて、例へば淺草門外筋違御門内(アサクサモンソトスヂカイゴモンウチ)などと云ふ。前驛は本市よりは頗る場所廣く、大名の邸第・寺社・倉庫などあり。それよりは次第に田舍となりて、其大部分稻田・菜圃な



第三十四圖　永代橋より江戸灣江戸市を望む

り。

前驛の周圍は前驛が本市を取卷く關係上、江戸の周圍の最大部をなし九里ありと云はる。

市内は城と共に一城壘と認むべき故、防壁・池濠・城門はよく手を入れてあり。各城門には(○市内に)火災あるとき、それ〳〵受持の大名あり、その兵隊にてこれを護り。城門の金屬製の屋翼高樓が曠怠のために火災に破損することもあらば、そこの司令官たる大名の恥辱として暫く

の間は修築せず(例へば千八百二十六年〇我が文政九年の小石川御門 Koisjgawa gomon・虎の御門 Torano gomon)。本市の門・城の門(三十六門あれど、內城の分六つは公けの圖には揭げてなし)一ッ毎に二方(フタカタ)の大名の守る所と定め、十五日毎に交代して火災・一揆など非常の事態あるときは、兩家とも其手の兵卒を以てこゝに出張するなり。此警固の他に數ヶの營所ありて、そこに特別な消防具を備へて。これを十人火消(ジウニンヒケシ) Ziu-nin hikesi と云ふ。〇風俗畫報太田杏村氏の記述によれば、防火隊は萬治元年に刱めて置かれ、其頃は十五組なりしが。元祿八年より十組となり。寬政元年八月より更に八組となれり。されどなほ十人火消と稱へ。その營所は半藏門・溜池靈南坂上・御茶ノ水・八代洲河岸・市ヶ谷左內坂上・九段坂上・赤坂門外・駿河臺等において(小日向と駿河臺土手にありしものは中絕す)。それを役宅と云ひて、それに頭一名・與力六騎・同心三十人・役中間(ガエン)七十人之に屬したり 本市の起點は日本橋 Nihonbasi 卽ち日本國の橋と云はるゝ橋にして、それよりして各地の江戸からの距離を算出す。此橋は隅田川 Sumidagawa と云ふ大河と連絡する運河に架(カケ)たり。

江戸城

城自身は御城(オンシロ) Onsiro と云ひ、外城(丸の內 Maruno utsi) と內城とに分け內城は御本丸 Go hon maru といふ將軍の住居する宮殿と西丸 Nisi Maru

といふ世子の居る部分とに分つ。高く斜に聳ゆる石壁と塹壕を備へたる堤防は外城を市中より區劃し、又內城と外城とを區劃す。其出入口は巨大な方石にて築きたる城門に堅固なる鐵張の扉を取付けて鎖ざし。丸の內 Maruno utsi には諸大名殊に譜代大名がよく手入したる・廣くて而も外觀の餘り立派ならぬ邸宅に住居す。內城に近くは將軍の近親及び麾下諸武士の邸宅あり。內城とて將軍及び世嗣の宮殿のあるは高き石壁と大門とを備へて、高臺にあり。その周廻は一里と云はれ、外城の周圍は二里と云はれ、本市の周圍は四里と云はる。

江戸の牙城

城の內部には將軍の住居あり。今日本を支配する家系の始祖家康が千六百六年〇我慶長十一年に築きたる所なるが、恐らくは其頃將軍の宮廷にありたる英人アダムス Adams 〇アダムスは卽ち三浦安針にして彼が我邦の造船業・航海業・採鑛業に關係あることは人の知ることなれども、江戸の築城に關係あることは日本の文書には載せざるが如し の保助をかりたるならん。アダムスは千六百年〇我慶長五年に和蘭

船リーフデ de Liefde の按針として、日本の東南岸（上總國夷隅郡岩和田村なり）に難船して着岸したる人なり。江戸城の土手（ドテ）の樹上には屢〻白鷺（シラサギ）止まり。壕の中には鸕鷀（シマツ）來りて、魚の多き水に餌をあさり。數百の野鴨や水鷄をも見る。城壕の西北には淺き水に蓮の花滿ち〳〵て。其根は人の好む食品となり。和蘭の使節某は嘗て此余が Ardea alba minor と知りたる白鷺を白鴉と思ひ誤りたり。

將軍の宮殿は壯大なる石段を入口とせり。殿堂自身は歐羅巴の建築術の趣味には副はず。相ひ重なる樓臺はなくて、たゞ一階の廣き家屋にして、佛寺の建方に似たる廣大なる門内に、四方塞がりたる庭場にあり。玄關は巾廣くして、それより内に廣き廊下ありて、簡素にして家具もなき諸室に通ずるなり。

和蘭人が謁見の際に進み入る部屋々々につきては、別に委しく記すべし。こゝにはたゞ此かなり打廣がりたる宮殿は長さ百二十四間（一間

は凡そ一・八〇メートル）巾八十二間にして、將軍の住居のみならず、他の殿中に執務する大官の集會所もあり。但し此大官はその臣下とも別に指定されたる住居を有す。

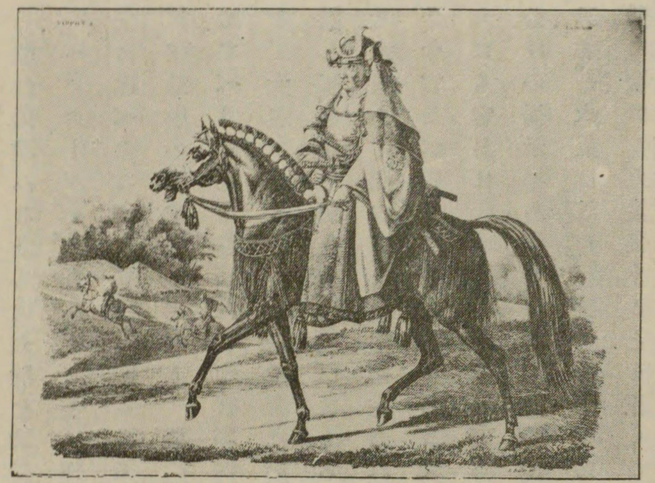
我等は今將軍の宮殿より退きて、一瞥を江戸市自身に加ふべし。

權威ある將軍の專制政治の命令により、全國の大官はすべて其家族のため常住の殿邸をこゝに置き、又暫くは多衆の從臣とともにこゝに住居すべき規定なれば、江戸は將軍の治所として非常なる廣地と住民とを擁し、市民的住人は宮中を除き、將軍と大名との軍人を除きて、百三十一萬人と注せらる。されば總人口は少なくとも百五十萬人なるべし。市中には八百七十三の町・十五の橋・十三の渡場・二十の運河・百六十三の坂・十三の廣場・八の岬・四の遊園あり。最も大なる河は隅田川 Sumidagawa にして。其他に中川（ナカガワ） Nakagawa あり。江戸川（エドガワ） Jedogawa とて江戸の北運河に入り、それより隅田河（スミダガワ）に注き、また市の東南端を流るゝ

古川 Furugawa と云ふに合する小川あり。大官の邸第は甚多數あり。各大名は其々三邸を有し、七邸を有するものあり。邸第の中數個は甚しく廣く。殊に加賀 Kaga・尾張 Owari・紀伊 Kii・水戸 Mito の諸侯の邸第然り。米・材木の土藏も廣き土地を占め。寺も數多く又甚大きく。就中東叡山 Tojeisan・增上寺 Sodjozi・護國寺 Gogokuzi・名も高き淺草觀音 Asakusa-Kwannon の寺等なり。隅田川は戸田川 Todagawa と稱へて、東方より來り、市を北より南に貫流し。その河口には將軍の大宮殿にて、濱御殿 Hamagoten と稱へらるゝがあり。城中に火災ありたる場合など、將軍は家族とともに此に避くるなり。數多き大きな公けの建物の中にて注目すべきは、消防夫〔前文に出づ〕消防具のある十箇の營所古き造幣局新き造幣局〔日本橋駿河町にありたる今も名に殘る銀座、同樣の芝新錢座。鳥井戸天神前・淺草橋場にも錢座ありたり〕・兩大戲場・多數の小き劇場〔堺町葺屋町に中村座・市村座あり。木挽町五丁目に森田座あり。此等を大劇場とす。兩大劇場とは此兩所の大劇場の意味なるべし。此他宮芝居と稱へたる(芝神明の境内、市ヶ谷八幡の境内・湯島天神の境内などにありたり)・競馬場〔木挽町采女原に馬場あり。馬喰町の北裏近くにも馬場ありたり、高田馬場あり、芝の青松寺より上寺裏にかけて馬場ありたること江戸砂子に載せたり〕等なり。挺でたる娛樂場は淺草觀音寺内にて、甚だ賑はふ見世物場あり。そこには各種の娛樂が携はるなり。兩國橋 Rio-goku〔武藏 Musasi 下總 Simosa を連ぬるとて此名あり〕には日毎に、市場・舞踊・手品使・道化芝居などあり。夏は麗はしくして時々僧甚貴き花火を打上ぐ。隅田川には北の端より南の端まで(殊に暑き夏の日に)無數の遊山船は往通ひて、事樣々の娛樂の舞臺を橋上に雜閙する人民の爲に展開するなり。猶ほ又忘れ難きは彼の盛り艷きのため國中に名高き靑樓の衢・新芳原 Sinjosiwara 其他伏見町 Fusimimats・京町 Kiomats・揚屋町 Akejumats など云ふ町々にして、公票にて名を廣めたる五千の娼妓・八十近き茶屋・多數の奇術師〔藝者〕・三絃師〔藝者〕・三絃婦〔女藝者〕等あり。此等の娛樂は隅田河上の遊山船の外は年中引切無しに之あり。他に一定の季節に定例なる公衆的祭事あり。そは山王祭 Sanwo と神田明神 Kanda-Miaujin

Kandamjiozin の祭とにて、一年交代に、甲は六月に、乙は九月に行はれ。その際に公開の行列と舞踊とあり。行列は城中にも入りて、時々大官の耳目をそれに集注す。首府の市民的構成は概して他の都市に同じく此を町又區に分けて、その小區は各市民の共同責任の下に獨立の行政をなす。此(コレ)によりて此(カク)の如く測られぬ程大いなる都會の秩序は維持せらるゝなり。

町司中の年長者たちは**町年寄**(チヤウドシヨリ) Tsjo-tosijori と稱へ（○文政九年頃本町一丁目の奈良屋市右衛門・同三丁目の喜田村彦右衛門・同二丁目の樽吉カ郎の三人が町年寄たり。最も世襲なり）特別の役所ありて、かゝるもの、寄り集りて、二人の**知事** Stadthalter 卽ち**町奉行** Matsibugjo（○此頃の江戸町奉行は神保主計頭忠之（文政二年―天保七年）、筒井伊賀守政憲（文政四年―天保十二年）の二人なり）の下に隷屬す。市の理材的の事務はすべて御代官 Odaikuan 及び御勘定奉行 Gokansjobugjo（ゴカンヂヤウブギヤウ）（○此頃の江戸の代官は村垣淡路守定行（文政元年―天保三年）にして江戸の御勘定奉行は曾我豊後守助弼（文政八年―天保七年）なり）に於て司配す。兩町奉行御代官勘定奉行の他に(宗教事件の管理者として)五人の寺社奉行(ジシヤブギヤウ) Zisjabugjo を長官としたる特別の裁判所あり。す



シーボルト江戸參府紀行

第三十五圖　消防服の高級士官

べて民事幷びに宗教事件をさばき、支配下の刑事訴訟をも取扱ふ故、邸内には數千の訊問廷ありて、罪人・其他罪科につき召喚されたる人々を訊問す。寺社奉行は貴族より任じ、高位にして、それより國政參議官に擢でらるゝを常例とす。此大都會に於て特に注意し置かるゝは**火災の設備**なり。火災はかなり屢〻之あり。失火よりは放火多く。家屋は概して木製なり、通路は狹し、人集(ツド)いて混雜

し、難澁困滯みなともに火難を助長すること無限にして、一平方町(凡そ一ヘクタール)を焚き落すことは毎々なり。それ故、手廣き消防署及び上に述べたる如き營所を設けたるなり。一種異樣なるは大大名の江戸在勤中の避難の規定なり。避難は衆人雜閙の中ならば必ず騎馬にてすべき規定なれば、大官の官邸内には常にその目的のために準備あり。大名の夫人のため附添者は屢〻抜劍して密集せる群集の中を通過して、市民を無慈悲に追ひまくるなり。各市民時としては將軍だにも火災ある際には、自己に指定されたる場所に到りて居るべく。消防命令官及び貴人は目に付き易き大紋章のある衣服を着用したれば、何人にも容易に認知すべし(第二十三圖は消防服着用の高級士官)公けの掲示場ありて、毎年消防の規定を新に告知し、主要なる紋章を掲示す。火災は江戸に於て他の都市よりも著しく多し。人は自然に災難に慣れて、火災發するとも遠くの町ならば、我邦にて云はば、強き風の

襲來位に思ひて心を置かず。各家の棟の上に造りたる張出に昇り、何處が燃ゆるか、どちらへ風が傾くかを見廻し。指圖されたる人々はその持場に馳せ行くのみ。その家族は火が近く迫りて懸命に準備せずばならぬまでは、夜を通じて安らけく眠るなり。一市民の家屋の燒失する位は、我邦にて暴風が實をつくる樹木を根こぎにした位にしか氣に掛けぬなり。

かほど住民の多き都市にては、最高の驕奢と困苦なる貧困との兩極端を見るは勿論なり。大名の食卓に上すには、一升の米より、最大のと最小のとを幾粒か選り出し、度々洗ひたる後、復よく檢め。一壺の煮たる飯よりは眞中の所を採出すのみなれば、二十分一以上は空費せられ。魚、野菜其他の食品幷びにいづれの飲料も諸邸第にて同樣に濫費せらるゝに、乞食者の最貧級なるは、人の住むと云ふ處にさえ住まへず。冬の寒さに苦しき惱みの生存を悚へ忍ばざるべからず。江戸に比べて

は(〇何地(イヅチ)に於ても)これより甚き貧困もなく、又これより甚き贅澤もあらず。食品は其價額甚貴くして、日本の他都府に於けるよりは五倍も貴し。

生活品の需要

生活品の大需要は非常に衆多なる民口とそこに邸を構ふる大名の大消費とに比例したり。大名は各〻其鄉里より主要なる生活品を取寄するとはいへ、それは主として海上及び隅田川より輸來する米幷びに魚獵に由るが故に、海上より江戸港への輸送にして杜絶すれば、數週ならずしてそは大官の邸第に著甚の壓迫を及ぼし、其結果下層貧民級に飢餓のため困苦して命を殞すべし。是れ政治上の見地より太だ緊要なる事なりと主張する人あり。人口と生活品の騰貴とは、工業及び之に追從する生業と歩調を一にするものなるが故に、江戸は又美術商業の主場たり。されど歐羅巴の學問はこゝに永續の巢窟を得たりとは云へ、江戸は學問にはや、適當せず。江戸の官立學校も國中にて最もよきものと認められれど、將軍政府は專制にして永く勇武を以て建ち、又大都市には遺散と遊佚とありて、眞面目の修學と學問的勵精とを斥け進する所以にあらず。

江戸に於けるカピタンの公式謁澤

五月五日(〇我三月二十九日)薩摩侯の來訪を受く。天文方の人々・將軍の醫師等も公式に使館に來り、二三學問的問題を提出せり。今迄はそれは官府的に委託されたるにあらざりしなり。禿顱なる殿中用人の長とも云ふべきが、多勢に打交りて來り見ゆ。我使節の公式江戸訪問の儀式に關して余が此に擧げんとするは、使節の後(ウシロ)に日本の位階ある人に例用さるゝ標號を眞似て、一ッの巨大なる日傘・彼(カレ)の劍・杖・二ッの四角な大行李所謂挾箱(ハサミバコ)などを擔ひ行くことにして、使節に從ふは上下二人の從者・通詞たち・旅舍の主人又は其息子・上役下役の御番所衆等なり。一行は卽ちカナリ大きく又長く續けども、此國の大名の行列が百人の家來を引連れ、立派な武器・儀仗の馬などをも從ふに比してはカナリ目立(ノダタ)ぬなり。

五月六日 ○我三月三十日 幕府及び諸藩の侍醫たちの訪問あり。余は江戸の逗留延引に關する余の意見につき幸(サチ)よき報告を得たり。

五月七日 ○我四月一日 晩に中津侯の訪問あり。鷹狩の道具を贈らる。天文方高橋作左衛門と日本地圖第一

グロビウス(高橋作左衛門)の訪問あり。**江戸の地圖及び薩哈連の立派なる地圖**を齎らして示せり。サンガル海峽 Sangarstrasse は津輕海峽と云ひ、薩哈連と黒龍江口との間の海峽は間宮の瀨戸 Manijanoseto と稱ふ。高橋は余に此諸島の地理學的業績幷びに日本人間宮林藏 Mamija Rinzo の山丹の旅行記事 ○東韃・樺太紀行 の記事 ○北蝦夷圖說。高橋作左衛門申渡書には北蝦夷紀行とあり。間宮名は倫宗。常陸の筑波郡の人。安永四年生、弘化元年死。農家の子、生れつき算數のオあり、十八歳にして幕府の普請方役となる。寛政十二年蝦夷地御用雇となり、蝦夷千島を巡廻測量し、文化五年六年松田傳十郎と共に樺太を探究すること二回、第一回は二度も西海岸のナツコに到り、第二回には二度ノテトに到り。遂に北蝦夷圖說・東韃記行を公けにしたるが。高橋作左衛門景保はこれに一部甚きて洲沿岸を南に踏査して、後に北蝦夷圖說・東韃記行を公けにしたるか。高橋作左衛門景保はこれに一部甚きて北夷考證・赤夷動靜を著はして樺太の島なることを論述せしが。是れ當時世界地理學者間の問題の一ツなりしより、シーボルト此等關係の圖書を高橋より得て、之を世界に紹介し。殊に東韃紀行は其大部分を飜譯して、之を其著書日本に載せ、また間宮の功績を稱へ、彼の渡りたる海峽に間宮の名を冠したり

役人 ○下河邊林右衛門・川口源次郎・吉川克藏・門谷清次郎・永井甚左衛門・浦野五助・今泉又兵衛・岡田東輔等を云ふ。此等諸氏いづれも高橋作左衛門の部下にして、後にシーボルト事件に連坐して獄に下り、處分を受け、岡田は事件發覺後間もなく自殺せり は公式に來訪したり。

五月八日 ○我四月二日 幕府の侍醫多勢來訪せり。漢方醫輩 ○此時多紀安元・杉本仲温・小島喜庵・望月三英・福井立助・澁江長泊・湯川安道・奈須玄逸・喜多村安正・池田瑞仙等幕府の侍醫の巨擘として內外に勢力ありたりが余の江戸に長く滯留することに對して抗議すと聞きたり。

五月九日 ○我四月三日 より十四日 我四月八日 まで友人知人の來訪せしもの極めて多勢なり。

五月十五日 ○我四月九日 余は幕府の侍醫諸氏に敬意を表するため別宴を催せり。グロビウス(高橋作左衛門)來り。**日本のいと美事なる地圖**を示し、余のために之を周旋すべしと約せしが、後に之を果せり。 ○文政十年六月十五日高橋よりシーボルトに宛てたる書狀によれば、此書中にて日本地圖を長崎へ送りたる由なり。其文中に「去年御約束之地圖、此節出來候まゝ差進申候。是ば極密に某より遣候事。御他言御無用に候。此圖銅版に成候はば、四五十部被遣候樣致度願候」とあり。「高橋シーボルト間に和蘭國にて印刻出版の申合あり」しなり。シーボルトの著書なる「日本圖」「日本圖」も其一つは此圖なるべし。

五月十六日 ○我四月十日 侍醫諸氏より書狀を受く。之によりて余は將軍が彼輩の余の江戸滯在延期に關する願書を斥(シリゾケ)けたることを知りたり。

五月十七日（我四月十一日）江戸出發の日取は明日と定まれり。

九　江戸より京都への歸旅

概目。江戸の發足。伊勢侯の行列。最上徳内と三枚橋にて訣別。富士山の眺望。牛の牽く荷車。府中近邊の草木。日坂峠の行旅。扁豆より布を作る。桑名の町。城。鈴鹿山の草木。伊勢の町に近き小市。竹。屋瓦の製作。京都。

五月十八日（我四月十二日）出發の朝、長崎奉行所の上役番所衆二人來りて書面を渡し。奉行の江戸に於ける使命の經過良好なりしにつき特別滿足なる旨を使節に申達したり。使節は自己に致されたる厚意を謝し、來

る年年の銅目（許可を得て輸出すべき銅の分量）が確かに決定されざりしを遺憾とせるも、後に確定して通告さるることを期待し居たり。江戸出發は九時になりたり。街路には人民充滿せり。余は江戸住民の膚色と顔形とを視察せるが。それは隨分區々たるものにて。膚色白くして頬の薔薇の如く奇麗に紅きあり。麥稈の様に黄を帶び又は黑みがかりしものもあり。

我等は名に高き日本橋 Nipponbasi-Brücke を通り、京橋 Kiobasi-Brücke を渡り芝口 Sibakutsi・金杉 Kanasuki・海に直近き市部なる高輪 Takanawa・品川 Sinagawa を過ぐ。大森 Omori にて薩摩老侯 Fürst von Satzuma は我等を迎へたるが。八十二歳の老年ながら強健にして、活潑に、善く談話し、其子は養子にて、某執政の子なりと云ふ（○島津家の家譜によれば侯の一女孝姫（文化六年―文久二年）桑名の松平越中守定和の室となれり。定和は德川幕府の名宰相松平定信の孫なり。或は此事を誤れるならん）老侯は少しく和蘭語をも話し、前々の蘭館長チフチン Titsingh をよく知れりと語れり。尋ぎで鈴ケ森 Susuganori の崎

を過ぐ、公けの刑場あり。數日前に一人の放火者火焙（ヒアブリ）に處せられたり。大森にて中津公 Prinz von Nagatsu（○老侯）と袂を分つ。侯はなほ訣別の會釋せんとて騎馬にて前を打たせたるなり。途中・余は美事な藁細工（多くは玩具なり）を賣る店を見る。轆轤細工・彫刻品もあり、棕櫚の葉莖の組織にて編みたる細工物もあり。何れもニュルンベルグの玩具（○今は到る處に玩具を産すれども、昔はニュルンベルグが獨逸の玩具の本場にて、佛國の巴里と共に有名なりしなり）のクリスマス店にさも似たり。貝殼其他の海産物をも買へとて呈供せらる。藁を編み又疊みにする細工は日本に於て大に行はれ。第一に人や動物の靴を藁にて作る。街道にては時々旅人が取失ひ又打棄てたる藁靴の堆（ウヅダカ）きを、肥料とするため人の集むるを見る。東海道 Tokaido の大街道は我等の辿り行く、日本中の人通りの最多きものなり。此道は少しの山路を除いては町・村・茶屋の絶間なき排列をなし。村は通例・二筋の家並（ヤナミ）より成り。そのため一村は他村に接する迄に長く延びたり。

大森麥藁細工

草鞋

江戸の富士

我等は我江戸滯在中・屢〻遙かに富士を仰ぎて立派な眺望を得たり。殊に朝來（アサキ）の涼味（スヾシサ）に眼界の霽れ渡らんとするとき、此空高（ソラタカ）きピラミッドは我に近づき來らんとする如くにて、そが千古の火山型たるを見知るべく。今なほ雪を戴ける嶺の上には噴孔の跡窪みてあり。側面爆發の痕跡も塊の如く球の如くして、輪廓判然（ハツキリ）と清きエーテルの内に際立（キハダ）ちて見ゆ。惜いかな、かゝる好景はたゞ暫時にして、間（ヒマ）もあらせず增し來る晝の暖みは、白きが故に、翁ならん、その頭に影の薄き面紗をかつがせつ。雪の冠（カムリ）は霧の海に次第に隱れ沒（ウ）せて、火山の力にて畫（エガ）きなせる此大作は包まれ、藏（カク）され了るなり。我等は六合（ロクゴー） Rokugo の渡しを過ぎて、川崎（カワサキ） Kawasaki の地に達し、此に一宿す。

五月十九日（○我四月十三日）麗らかなる天氣に、六時過ぎに川崎を立ち、海灣の上と若綠に色はふる地方とに美しき景色に見取れたり。鶴見（ツルミ） Tsurumi・生麥（ナマムギ） Namamugi の村々には前年の梨多數に・いかにもよく保たれたるを

川崎鶴見邊の梨棚

賣らんため我等に捧げらる。梨の木は此地方に於て特別の方法にて栽培せられ、杭の形に擴がりたる棚に作らるるなり。我等は正午に神奈川 Kanagawa に憩ひ、五時にフジミ Fusimi（藤澤の誤か）に到着す。米は少しく前に蒔かれ、今は稻田の植付に準備中なり。

五月二十日（我四月十四日）平塚 Hiratsuka・大磯 Oiso を過ぎて、小田原 Odawara へ赴かんと、海岸に副ふて我旅を續け、花さく小麥・大麥の傍を通じて行きしが。大磯にて伊勢侯 Landesherr von Ise の行列に行合へり。彼には三十五人の隨行人あり。午食の後伊勢侯は我旅亭の前を行過ぎたり。騎馬及び多數の飭道具なる鎗・弓・鐵砲等を備へたり。行列は左程に秩序正しきことなかりき。大名の旅行は多勢の下僕・役人を從ふために巨費を要するなり。晩に六時近く集は少なかりき。

五月二十一日（我四月十五日）我等の住居は海に近く、その浪音を明かに聞く。

風雨烈く箱根山 Hakonegebirge を無事に旅し行くこと望み少なし。夜明に至りて天候變り少しく蒸す如くなりたる朝に小田原を發す。我人格崇き老友最上徳内は江戸よりこゝ迄伴ひ來りたるが、此勇ましく功多き老人は山崎の三枚橋 Sammaibasi von Jamasaki にて我等に別れたり我等は是より石徑に美事な景色の隱見する間に山を攀ぢ登り、幾多の小き料理店は路傍にあり。余はチユンベリーの記したる種族の花さくを殆んと皆見得たり。サラマンデル（山椒魚 Sansjono uwo）はこゝにて藥として鬻ぐなり。美しき杉の列樹につきて、箱根村 Hakone の傍なる山の湖迄行き。箱根山の關所 Gebirgssperre は左程堅められたりとも見ずに過ぎたり。箱根にて視察せしに、氣壓計は二十六秒一厘寒暖計は七十一度・濕度計は四十九度なりき。三時頃窪み地にある箱根の驛を出で。それより尙高く登り、伊豆 Idsu・相摸 Sagami の境杭にて又氣壓計にて觀測したるに、二十五秒五迄下り居たり。夜に入らんとし甚疲れ

て三島（ミシマ） Mizima に到着す。是日は空に雲ありしため、クロノメートルに
て經度を取ること叶はざりき。

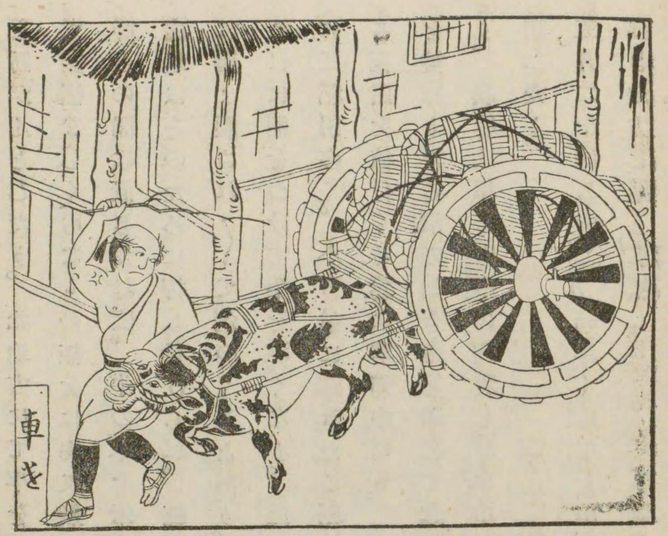
五月二十二日（○我四月十六日） 我等は三島より沼津（ヌマヅ） Numasu に來る。こゝにて暫
く前に我通詞の一人切腹して死亡したり。（○文政八九年頃三島にて自殺せる通詞につき古賀十二郎君につき尋ねたるも馬が亂心して料理人を殺して切腹したることあり或は此事を誤りしか。いぶかしゝものなし。三島につきては享保四年に長崎奉行石河土佐守内檢使役井上平立派なる町通りは

原の庭園

富有に見ゆる農家に占められる。こゝを過ぐれば原（ハラ） Hara なり。前に述
べたる園（第四三九頁ヲ照） を復も一覽す。櫻草・牡丹・菖蒲・撫子・躑躅等正に花期に

蒲原（カンバラ）の富士

あり。晩に疲れて蒲原 Kanbara に着く。是日は天曇りて富士（フジ） Fusi を仰
ぎ見得ず。たゞ正午近く天候少しく變りたれば、我等は此邊より、今なほ雪を戴ける富士山の空高く挺ける巓（イタヾキ）に驚くばかりの眺望を縱にしたり此山には下に向ひて馳する深き襞（ヒダ）ありて、其處（ソコ）のみ雪に覆はれて、長く白き條（スヂ）として巓より背の半ばまで（○垂れ日に照らされて輝きたり。山の麓なる地方も眺望極めて美しくして、我等の心目を樂ませた



第三十六圖　人倫訓蒙圖彙に出たせる其頃の牛車（補）

り。

五月二十三日（○我四月十七日） 我旅を府中（フチユー） Futsju へつゞく。道にて牛に牽かせたる荷車の來るに遇ふ。車は頗ぶる無骨（ブコツ）にて、粗末の造（ツクリ）なり。車輛には多數の輻と太き環とあり。輻と輻とに亘木（ワタリギ）ありて、環に取付けたるなど、歐羅巴の車とは異なれり。輪圈（ソトワ）の代りに環の上なる長釘を竹にて編み包み。それにて環を緊しく締め合はせ、且その摩滅

を防がんとしたり。此地方にて牛を車につける常の方法は牛に取りて甚惱ましく、弓なりの軛をは肉叉狀の轅（ナガエ）に固定し、それを牛の項と肩胛との間に置きたれば。牛の車を牽くときに肩胛なるカナリ大なる肉堤はそのために押し付けられ。軛の自在に彼方此方に動くがために、屢〻壓され〳〵て創つくことあり。人は勒を用ひず、鼻に輪を貫きこれに綱をつけて牛を導くなり。此地方・一般に牛を用ふ。府中近邊には稻田多く。小き畝に蒔きたる稻は今や數寸高く育ちて、人は大なる稻田を植付くる爲に準備中なり。それは甚困難なる作業にして、水を被むりたる沼の如き地を鋤にて起して、溝を作らなければならぬなり。我等は早く府中に到着し、日本中に名高き二三の籠細工・木細工を購ひたり。

五月二十四日（○我四月十八日）朝早く府中を出發し。安倍川（アベガワ） Abegawa を越え、山多き地方を通り、藤枝（フヂヤド） Fusijado にて晝食したり。余は此山々の密林に

府中藤枝間の草卉

てまだ知らぬ植物を甚多く見たり。其中にて楓樹・ミヤマハンシヨウは觀賞植物として美事なり。余は又時にサッサフラスと云ふを發見せしが、その本種の Laurus sassafas にはあらず。されど此樹の出現は、又も吾人をして北米の花卉と日本の花卉との一致に想到せしむるなり此樹の効能ある藥材なることは余は江戸にて侍醫諸氏に物語れり。

日本はその草卉中歐洲にて最も慣用する植物性藥物許多を有す。纈草・機那根・ヒポラスタン皮 Cortex Hyporastan・薄荷・香茴・菖蒲・數多の傘形科植物・是なり。此山地の花卉は南日本の花卉と異なり。樟科・楠科・丁香科などを見ること少なくして、紫陽花（アヂサヰ）・楊櫨（ウツギ）・烏樟（グロモジ）・接骨木（ニハトコ）・水蠟樹（イボタ）・椚（クヌキ）・欅（ケヤキ）・部楢（ブナ）・楓など多く、森林をなす。夜遲くまで植物の整頓・腊葉にかゝりたり。

同じ午後我等は山坂（ヤマサカ）の地方を島田（シマダ） Simada を過ぎて人々の恐をなす大井川（オーイガワ） Oigawa の岸まで行き。そこを來し時と同じく擔がれて過ぎたり水は彼時に比べて一尺も墜ち、殆んど乳の如き色をなしたり。それよ

り**日坂峠**(ニチサカトーゲ) Nitisaka toge なる傳說の山を行き、そこにある茶店にて茶と飴 Ame(甘味)に氣を引立てゝ、邸陵多き地方の佳景を眺めつゝ、山中の品よき小娘と樂き談話を交換し、此人々に指輪髮飾などを與へ、晩凉に乘じて我從者二三人と山路を穿ちて夜宿に向ひしが、他の人々は既に一時間程前に到着してありたり。夜遲くまで余は植物學的貴重材料の整頓と乾腊とに時を過ごしたり。

五月二十五日 ○我四月十九日 我門人**高良齋**の兄弟一人 ○高良齋には一人の定國と云ふ弟ありされど定國は文政十二年に生、明治二十三年に死にたれば、此文政九年にはまだ生れざりしなり。定國は良齋の繼母笹岡氏の連れ子なるが、父錦國が笹岡氏を繼がしめたる彦國なる人も後に高氏を稱したり。此人は明治六年に死亡し、其生年月日は不詳なれど、こゝに冥齋の兄弟とあるは或は此人ならんか 昨日余の許に來り、余は彼を**掛川** Kakegawa に訪ふべしと約束したる故。余は是日早く一行に先だち二三時間彼の許に過ごしたり。彼は余に鑛物類其他の天產物を贈りたり。**掛川**及び近傍の村々は葛(クズ)もて作りたる織物にて名高し。余は今土地の人が此植物の若き芽生(メバエ)を刈るを見たり。之を大束につがね、少し煮、皮を髓(シン)より殺(ソ)

ぎ放し、流るゝ水にて洗ひ出し、色氣(イロケ)を去り、日に乾かし、晒(サラ)し、それを絲の樣に細く長く裂き、そして布(キレ)に織るなり。但(○衣帶の)芯(シン)封として用ふるのみ ○東海道名所圖會に云、葛布を色々に染めて、異服の市場に出す、多くは鞠袴に用ふ。これ掛川の名產なり

毛氈苔(モウセンゴケ) Drosera を見たり。可愛らしき沼の草なり。晩遲く頗る烈き雨の中を**濱松**(ハママツ) Hamamatsu に到着したり。江戸出立より、殊に午前中は天(ソラ)は雲に覆はれて、クロノメートルを以て經度を觀測するの機會を得ざりしは、余の大に遺憾とする所なり。

五月二十六日 ○我四月二十日 極早く**濱松**を發す。白き、又薔薇の如く紅きタンタルス 鑛物の名 を多數に此處廣き平野に展開せる稻田にて見たり。邊(アタリ)の邸は所々に高くなり、其上には大麥・蠶豆(ソラマメ)・菘菜(シロナ)を植えたり。立派な路を通りて**舞坂**(マイサカ) Maisake に入りしが、長き貧き漁村なり。こゝにて少しく憩ひて、更に前述べたる濱侯 ○三河國吉田城主松平伊豆守信順 の船に乘り**荒居** Arai 町の方に越え。それより**白須賀**(シラスカ) Sirasuka に向ひしが。こゝにて道は極めて草木多

き森林に入り、余は希に見る植物を數多く採集し。暫時の後余は竪川
Tatekawa ○此邊に竪川又立川など云ふ村なし、二川村の誤記ならん にて一行に先立ち、如何にも心地よき傍路
に入りて、高き巖の上に建ちたる窟觀音 Jwaja Kwanwon の古き像に詣で
○二川村(東大岩)の山間にあり。行基作の千手觀音にてその寺龜見山岩屋寺は天平二年の建立と云ふ。昔は堂後の岩窟内にありし故この稱あり。岩窟の上に明和二年建立の觀音銅像あり。今も汽車窓より見るべし。
こゝにても多く希有の植物を發見したり。某湖のそばにて睡蓮 Nym-
phea blanda を採集せんとして、人の甚恐るゝ毒の平口蛇 (Trigonocephalus
Blomhoffi, japan. Hirakutsi) を見、これを捕へたり。此湖邊には睡蓮の別種
も屢〻生育するなり。余は先に進みて一行に追付かんと急がざるを
得ず。一ッの沼地らしき原にて、頗る多く茅膏菜類 Drosera muscipula 及び
希有の馬兜鈴類 Orchideen 等の生長するを見たり。疲れ疲れて晩に近
く吉田 Josida に達し、一茶店に憩ひ。氣を新にして、乘物に上りて赤坂
Akasaka まで行く。此間名高き吉田の橋 Josidabasi ○豊橋 を過ぐ、イセ川 Ise-
gawa ○豊川のことなり。原語にはいせ川とあり。昔し此邊詰より伊勢の白子へ渡船ありしと云ふ、そのことを云ふにや未攷 に架る橋にて五百八十二

巴里尺の長さなり。それより天候悪く、雨をさそひたり。夜遅くまで
今日採集したる植物の檢査と乾腊とに從事したり。
五月二十七日 ○我四月二十一日 早朝豪雨の中に赤坂を發し、正午に近く岡崎 Oka-
saki に至る。こゝにて晝食し。矢矧の大橋 Jahakibasi の長さは凡そ二
十四尺も街道に差出でたる傾斜を加へずに九百十二巴里尺なり。こ
れを越え、疎なる松林を穿ち行き、大濱 Onohama ○原文オノハマとあれども、岡崎と知立の間に大濱あり。恐らくはその誤ならん の傍なる湖水にて許多の睡蓮・萍蓬草に注目せり。此邊多分に大
麥を耕作す。松の林々には我邦に屢〻雉子を認めたり。晩に近く鳴海
Narumi に達す。宮 Mia に到着せしは遅くなりてなり。こゝにて余の
友たる植物學者 ○水谷大河内伊藤等なり 出迎へ、此地の草卉の乾かせるもの及び色々
の植物の繪を齎したり。夜三時まで天産物の檢分鑑定にて過せり。
我等はこの時より余の日本出發まで相互に忠實に通信を交換したり。
五月二十八日 ○我四月二十二日 七時過ぎて帆を揚げ桑名 Kuwana に向へり ○此邊海にて常に

の如く一の船には閙人は檢使・大通詞町使一人と。同乘し、下役・町使小通詞等は他の船に入るなり

wafusi を經て西へ向はんとて。鷄首なき輕舸にて渡りしが、向ひ潮强くして、二三時の後に向ふの岸に達し。鍋田川 Nabeta とて木曾 Kiso より出でて、此に終る川〇木曾川の支流なりの河口に入りて、初西南西、後西北西に漕ぎたり。川は凡そ四百尺の幅にて、一體に十尺よりは深からず。西より東へ纔かの彎曲をなして流る。それを渡る舟は帆・棹櫂を具へたる小舟にて肋骨の弘き鳥首なく、たゞ平らに斷ち切られたるにて、他の舟とは構り方異なれり。舟の中央に我等のありし凡そ四疊敷の小屋あり。我等が出會ひたる他の舟よりは大形のものなりき。我等は好天氣に惠まれて縱に絶佳なる景勝を眺望し。前には日本〇本土の高地たる多度山 Tatojama・北より南に延きて見ゆ。十二時近く我等は桑名の城に近づき、其傍を通り過ぎしが。近く其築造の外面を見るの機會を得たり。稜堡は一段一段に高く差出で、一ッの廓は他の廓を蔽ひ、最後の

分だけは勿論露出したれど。是も城堡自身より、又陸地よりも射程內にあるなり。(揖斐)川は桑名の町を貫きて流れたり。人々の(〇物好に)群り來る中を我等は我旅亭に入り、そこにて正午餐を取り。午後に我旅行をつゞけたり。此市は余に大きくして、又盛なりとの印象をなせり。本來の市街の外に二ッの前驛ありて、そは常例の如く、次の村々に向けて同じ樣な町筋となれり。我等は大麥・菜種に肥えたる平夷なる畑地を過ぎしが、堤防多き川々に貫ぬかれ、そこ又こゝに小き松の林あり。我等は徒歩にて八時に近く四日市 Jokaitsi に到り。こゝにて一夜を明かしたり。

五月二十九日〇我四月二十三日 我旅は四日市より庄野〇原文ソノ Sono とあり・龜山 Kamijama 城を過ぎて關に續きたり。地方は一體平坦なり。稻田・庭園・松の林等あり。彼處此處に小き湖水あり、色々の睡蓮を見たり。

五月三十日〇我四月二十四日 急ぎて坂の下 Sakanosita に至る。こゝにはドクトル

チャウ Dr. Tjo ○湊長安のことか の知人・余に植物など天産物を集めて、昨日其旨を通じ來れり。到りて見れば色々なるものゝ中に甚大なる生きながらの蝶螈・數種の植物・鑛物あり。植物に富むサラカ山 Sarakajama ○鈴鹿山か鈴鹿山は一名三箇山と云ふ。に旅を進むるに、珍らしきもの多し。小女の如く美き駿河(スルガ)？の山々に送られて、眺望殊に立超えたり。强雨にて、なほ深く山に分け入ること叶はず。此山の草卉の多分は槲・楢・楓・杉・檜・杜松(サツサフラス・ウ)・五茄(コギ・ニンドウ・ネズ)・忍冬(ミモナ)・鼠梓(シホゼ・イチヰ・ウツギ)・刺楸(シホゼ)・櫟・楊櫨(イチヰ・ウツギ)・含羞草(オジキ)・鬼箭(サウ・ニシキギ)其他余の未だ知らぬ花なき喬木灌木多し。土山(ツキヤマ) Tutsijama にて正午を憩ひ。夏見村 Natsumi にて數多の湧泉・飛泉を見 ○伊勢宮名所圖會に「茶屋多く、家毎に走水をしかけ、木柵をめぐらして旅人の目を悅ばしむ」とあり 極めて惡き天候に遲くなりて石部に到着したり。

五月三十一日 ○我四月二十五日 朝早く石部(イヂベ) Izibe を發す。余は一行に先だち先に記したる藥商の住む梅の木(ムメノキ) Mumenoki に至り。先きに其地方の珍らしき植物を歸旅までに採集して出島に送る樣主人に托したりしかば、こ

れを尋ね間ひしに。喜ばしくも余はそが既に一ヶ月程前に澤山の荷造して送られたりと聞き、なほその目錄を受取たり。それより余は植物學者として余の知人たる僧某を其隣村に訪ひたるに。美事なる園ありて二三珍らしき植物にて五茄(ウコギ)・楓(モミチユ)・百合(リ)など人の愛むを栽培するを見たり ○栗太郎治田村大字川邊の善性寺の記錄に「文政五年三月阿蘭陀人江戸行にて十五日入京。四月二十五日植木見にとて當寺に來る。通詞岩瀨彌十郎案内し來る。時計鍵・印判・牡丹(釦のことなり)三つ縮四つ呉る外に書五枚・人參一兩共拙寺へ貰ふ」とあり。此時の住僧は堀江惠敎と云ひ、花道を好み京都池坊流の名手にて、華坊と號せり。文政十年二月十六日三十九歲を一期として死せるか。實父堀江惠觀悲みの餘り同年過去帳に八首の歌を記せり。其中に「幾鉢か植て殘せし植木とも形見となるそ哀れかなしき」惠敎が植物を愛して盆栽の數も少なからざりしことを偲ばしむ。今の僧は敎龍といひ、惠敎より四代目の僧なり。其父敎澄(明治の初七十四歲死)も園藝に趣味を有せし人の由、此寺は今廢寺となり、シーボルトの贈りし品物も何くにゆきしや詳ならずと云ふ(中川泉三君報)。昭和二年春余の往き見し頃には、境内もいと狹くなりて、本堂も朽ちかゝり、たゞ門内に種々の植木繁茂し。堂の側・堂の後に楠數株ありて、その年齡も略ぼ惠敎の植えたるに相當す。草津(クサツ) Kusatsu は名高き伊勢の神宮に近きため、人の多く往來する小市なり。正午なればこゝにて小憩す。伊勢 Ise への道が大街道より岐(ワカ)るゝ所には、多數の巨大なる柱を植えて道知るべとす。此地には多くの旅店ありて。其表口には伊勢の最挺でたる神々の名號牌を掛けたり。

竹杖

草津にてはいづくにも竹の杖を賣る。それは孟宗 Bambusa moso といふ竹の根なり。最もよきは冬に掘出したるものにて、多分は屈げて油を塗り、炭火の上にて乾かすなり。日本人はたゞ細きを杖又は鞭に用ふ。太きは斑のなきもの稀にして、又均同の節を備へたるは稀なり。

我等は尋いで瀬田橋 Setabrücke を渡り、こゝにて琵琶湖 Biwako 上の魅せん許の佳景を縱にす。膳所 Zeze に至る。數哩も長く。城あり。余はこゝに居殘り。上役御番所衆を待合せ、共に絶景に名ある茶屋にて小酌し、かく迄に恩を蒙むり庇はれたる人と甚愉悦しく、時を過ごさんとしたり。幸に又特に嘉き穀として新しく捕りし一種の鯉を得たり。

膳所と大津 Otsu とは殆んど見界なく相ひ移る。余は長き町通りを彷徨し、晩黄昏ならんとするに大津に至り。度々述べたる中津侯の甚美しき定宿に入り。屋上の塔より、沈みつゝある太陽に一際麗はしき景を樂みたり。比良山 Hira の背に、夕日に輝きて條の如く見ゆる、殘りの

瓦の製造

雪は此山の高さと北寄の位置とを現はすなり。余は途中瓦燒く所を訪ひしに其持主は余の傍に來りて、その製法を說明したり（○東海道名所圖會に「菊ケ濱に玉造といふ舊家あり。昔大内裏造營の瓦を貢奉りしと云。今は瓦師少々なり」一本文の場所に一致す。中川泉三君云、大津にて松本七左衛門といふは瓦屋として代々の大家（り。余は愛知郡葉枝見村大字新海の報恩寺の古き堂の鬼瓦の廢物となれるに銘刻ありて大津松本の住飯塚出雲守藤原朝臣平清次元祿七年甲戌卯月上旬とあり、又舊膳所城の鯱丸の銘文に文政七年甲申八月江州滋賀郡松本村人清水九太夫爲久とあり。此等はいづれも本文の瓦工に關係あるべし。）

屋根瓦の製造

日本の屋瓦は佳く又美しく製作され。大建築殊に支那人の趣味による鳥尾形の屋根なる佛寺には甚親しく快よき外觀を與ふるなり。彼等は歐羅巴に於ける如く一ヶ片より作らずして、數ヶ片より作り。應用の異なるに相當して構造も相異す。數多の日數をかけて、粘土を足に踏みて、それを四角な大片となし、作らうとする瓦の如何に從ひて形を與へ。次に弓に張りたる銅線を用ひて、一ッ一ッ好みの厚さなる薄板に切り、それを瓦の形したる凸（ナカダカ）の木型（母屋（マヤカタ）型 Majagata と云ふ）の上に廣き板もちて打付け。暫の間順順に乾かすために立て竝べ。次にそ

れを一ッ宛取りて、他の確として動かない支脚の上に於て鏇盤(ロクロ)の如く
に旋動する凹(ナカビク)の板(荒地(イタアラヂ) Arasi.と云ふ(○七十二枚に切ることを二ねにて、)は
通な屋根瓦(七二の並び Sitsinino narabi と云ふ屋根一坪に載する丈の瓦なり)に載せてそれを截る。かくして普
出來上るなり。なほ注文によりて縁の飾頭の飾は特別の板(切板(キリイタ) Kiri-
ita)をもて瓦に加工するなり。型は木にて作り、粘土に打ち、石膏の粉に
て粘(ネバ)り着き合ふを防ぐ。以上述べたる道具の他になほ數ケの簡單な
る道具を必用とす。それは曲りたる小刀、瓦縁の相添ふ面(ツラ)を粗雜にす
るために用ふる齒を附たる板篦、打ち板、瓦の稜角(カドバリ)を滑平(ナメラカ)にするために
用ふる水浸(ミヅビタ)しの革などなり。出來上りたる瓦は乾かし、五ッ宛重ね、陶
土の狀況如何によりて三時間乃至五時間これを燒くなり。燒きたる
瓦は一體に使用せる泥土のために黒く輝りのある色をなし、我邦にて
慣(ヨク)用ゆる煖爐の黒色に似たり。此瓦は極めて愼重に精巧に加工され
たる故、持ちがよく、互にシックリとよく適合すれど、製作に手間のかゝ

る故、職工一人一日に百五十枚以上を造ること叶はず。余はそれにつ
き右瓦匠に、歐羅巴にては鐵架もて形を授けて瓦を製作するその仕方
を說明したり。彼は余が我邦にては一人一日六百乃至千枚の瓦を作
ると云へるを聞きて、少なからず驚きたり。彼等はよく余を理解し、鐵
架を彼の型に應用せんと心構えたり。

晩に我等はなほ友人・知人・醫師等の訪問を受けたり。

六月一日(○我四月二十六日) 朝、禮裝にて惡き路と快からざる天候とを犯して、古く
からの帝都なる京都(キヤウト) Kioto に向ひたり。此地には屢〻牛の引く車を
用ひ。其輪は甚太く、轍弘くして甚しく道路を損ず。車の丈夫にて永
持する樣大きさを厚さの二倍の割合に作るが故、非常に不恰好にして
堅實なり。山科村 Jamasina にて人夫が大樹を除かんと從事するを見
たるが、用ふる車輪の緣(フチ)は一尺五寸より厚く、遠くより見れは一ケの車
と云ふよりはたゞ一ッの木欄(キノバン)なり。其(ソレ)より直(ヂキ)に京都の前驛たる三條(サンデウ)

Santzio に達し、三條大橋 Osansiobasi 三條小橋 Kosansiobasi を越えて、帝都に達したり。その帝都たることは、余は之をこゝに出迎へたる友人の口より知りたるにて、市街の外觀より認めたるにあらず。市街は江戸・大阪の市街に比べてやゝ見劣りするなり。

十 京都滯在。大阪へ歸旅

概目。 京都の統計摘要。婦人の教育。朝廷の服裝・化粧。所司代の城。謁見。商品。發途。多數の神社。日本の鐘。三十三間堂。射的。淀川を大阪へ下航。

六月二日 ○我四月二十七日 京都 Miako に到着するや、友人門人來訪し、何れも余の

前に委托せしことを仕上げて、余に對する留意の周到なるを明かにしたり、喜びて聞きしは門人慶太郎 Ketara ○他の處にては Kefaro とあり。西慶太郎のことなるべし。前文第一百頁を參照せよ、文化十四年生、明治十一年死。といふにつきて疑はしき點あり。此の如く人ならば此時纔かに十歳ならん。なほよく取調ぶべし。が余の(○江戸へ)出發後直に京都近傍のいと稀なる植物を集めて、出島の植物園に送りたることなり。又我老友和蘭人擬のファン・ギュルペン Pseudoholländer van Gülpen ○前文第四五六頁を見よ もこゝにありて、茶の湯に親みあれば久き前に約束したる碾茶の儀式に關する書物を贈りたり。帝室の侍醫 Hikonoske・小森肥後介 前文第三九四頁を見よ・Riodai (○日高凉臺か、○名は精、字は子精、號は六々堂又遯叟。安藝の新庄の人。寛政九年生、明治元年死。幼時より醫に志ざし出雲石ゐ廣島に遊學し、後新宮凉庭を師として蘭醫學を修めて鄉里新庄に開業せしが、シーボルトに就きて研鑽し、美馬・湊・戸塚・高・岡等とともに鳴瀧學舍にあり。而も此人長崎の末次忠助方にあり、十年なれば此時京都におること疑はし、文政十年大阪に出て開業し眼科を以て名高し。天保十三年安藝の竹原に寓し、こゝに終る 新宮凉庭か ○前文第三九四頁參照) Riozun ○何人か不明・Siogen (○將監 ○前文第一○○頁參照) 等來訪す。余は此機を利用して京都及び此地の宮廷に關する文書を蒐集したり。皇帝は通例・禁裏 Kinri と稱へ、支那の語にては天子 Tensi といふ。天の子息の義なり。年代記には

京都滯在。大坂へ歸旅

今上皇帝（ギンヂヨウゴダイ） Kin-sjo-go-dai 即ち現に支配する皇帝と云ふ名稱にて擧げたり。現在の皇帝は二十四歳にましまして（○仁孝天皇にして寛政十二年御誕生弘化三年崩御。此時二十七歳なり、）在位の天皇の父君は仙洞（セントウ） Sento と云ひ。現在の皇帝の父君はなほ生存ましまして、六十歳なり（○光格天皇は明和八年御降誕。天保十一年崩御。文政九年には御年五十七歳なり）。在位の天皇は御子七歳になり玉はゞ位を退きて隱退することを得。九年前にかゝることありたり（○即ち仁孝天皇が文化十四年十八歳にて御即位あらせられたるを云ふなり）内裏の最挺でたる官位を有するは關白 Kanbaku なり。關白は位階に於て將軍の上にあり。將軍（シヤウグン） Shogus は大臣（ダイジン） Daisin の官階なり。功勞によりては猶ほ高き官階に上るを得。現天子及び内裏の高官には將軍より扶持を献上すれど、そは他の高官の收入に比べては些少なり。禁裏の收入は年々十萬石（百二十萬和蘭ギルデン）なりと云ふ。内裡には將軍の官吏六名あり。皆禁裡と將軍との間に於て商議すべき事件を取扱ふなり。此官吏の中最挺でたるは二人の御附奉行（オンツギブギヨウ） Ontsugibugiio なり。一人は禁裏附とし（○文政五年より同十年まで在職の松平伊勢守定朝

及び文政八年より天保二年まで在職の梶野土佐守良村）、一人は仙洞附とす（○文政三年より同十年まで在職の成瀬因幡守正育及び文政九年より天保五年まで在職の永井筑前守直堯）。次に御代官（オダイクワン） ○ Dai Kwan は將軍の租稅官なり（○文政五年五月より小堀主親京都御郡なり）。なほ一人の所司代（ショシダイ） Sjosidai（○文政八年より同九年十一月迄在職の板倉周防守康任）及び二人の二條城 Schloss Sisjo（○原文には四條とあれど二條の誤なるへし）の司令官（○此役は大番頭にて此當時堀近江守及び本庄伊勢守在番なり）もこゝに擧ぐべし。

日本の貴婦人

二人の頗る美しき若き婦人來訪す。一人は商人の娘、一人は余が友人小森肥後介の娘なり。高貴なる未婚の婦人は長き袖を纏ひ、身のこなし纖巧にして、其行儀眞（マコト）にしとやかに、着附品（キツケヒン）よくして、歐羅巴の處女のと同樣、少（スコ）しく品（シナ）を作り、恥かしき風情（フゼイ）あり。習字・音樂・少しの詩歌は彼等の學問的教養なり、中には支那語さえ解するものあり。

六月三日（○我四月二十八日）京都の市内は二人の市長 Stadtlalter（町奉行 Matsibugio）に支配さる（○文政八年より同十二年まで在職の神尾備中守元孝及び文政六年より同十年まで在職の須田大隅守宣昭なり）。江戸將軍の任命する所なり。一人は東の町奉行・一人は西の町奉行と稱ふ。日毎にその支配所を交代し、三年五年の後には江戸より後任來りて差代はる。將軍の

本來の名代は所司代にして、いつも松平を名乘る大名なり（○是れ正しく諜聞なり。所司代にて他姓のもの頗る多し）。すべて京都江戸兩朝廷間の事件を取扱ひ、京都に出向する諸大名及び外國人等を監督す。此官も三年五年の後には交替す。天皇に關する諸事

子（ミカド又は禁裏）の夫人は一人にして、時々禁廷の第一の大官たる關白の息女なり。其他若干の宮妃あり。皇帝と皇后又は皇妃との間の子供は（皇太子の他は）男も女も尊き寺社（例へば日光（ニッコー） Nikko など）の僧となりたり又は尼となる。皇太子の死亡するときは、次の弟は僧となりたりとて代りて之を承ぐことゝなる。皇妃との間の子息も帝位を繼ぐことを得。天皇に男子の繼承者なければ副系の族より一男子を養ひ取るなり。天皇御位を讓受るときには內裏に大賀の儀式あり。京都市中は勿論全國ともに祝ひ。何れの諸大名よりも使節來る。其儀は時として一年も繼續す。公（オホヤケ）の稱（年號（ネンゴー） Nengo）も帝位の授受の際に改まる。皇帝は內裏に於て宮闕に住ひ、其靜けさは皇家の古き宗教たる神道の

社にさも似たり。皇帝死し玉へば京都の泉涌寺（Sen-Ju-zi.）に葬むられ。神として崇めて、永く國民より追欽せらる。內裏の六門は衞士是を守り。內裏の最貴き建物は皇宮・仙洞・皇太子・皇太后及び最近親の宮殿なり。其他に關白以下高貴なる役人の廣々したる住居あり（○Nippon 第二版の註に曰く、歐羅巴の日本研究家にして初めて日本天子の國法的位置を明らかにし、正しく知りて之を著書に記したるはシーボルトを第一とす）。其他の朝廷の臣下の大住宅などもあり。

六月四日（○我四月二十九日）色々の鳥類は余に示さんと齎らされたり。その中に距（ケヅメ）ある一種の野雞あり。黃金十枚を要求す。晚に友人肥後介と會談す。彼は其衣冠を家より取寄せて皇帝及び他の大官の衣裝を說き明さんとせるなり。一種の袴（ジボンサジオキ）（差抜（サシヌキ） Sasinuki）・袖寬（ヒロ）き襖（ウハギ）（狩衣（カリギヌ） Karigiru）狹き引く襖（キヌ）（裾 Kio）・飾帶（石帶 Isinoobi）帽（烏帽子（エボシ）Eboosi）は禁裏並びに內裏の高官の主（モ）要なる衣類なり。石帶は官階を區別する記號（シルシ）となる。禁裏は寶石を取付たるを帶び、關白は龜甲を取付たるを、大臣は水晶を取付たるを

低き役人は牛又他動物の角を取付け又石にて飾りたるを帶ぶ。太刀を帶ぶるは禁裏及び關白・大臣等最高の臣下にして、唯一個のみ。是(コレ)にも官階の記號あり。儀式には各臣下とも內裡に於て盡く木牌(笏(シヤク) Sja-ku)を手に、他(ホカ)より手の餘り見えぬ樣に持ち、內裏にありては誰人も之を以て物を指(ザ)し又事を示(シメ)すこと(○西洋の)將軍杖の習例(ナラハシ)に同じ。禁裡の衣服は白色にして、何ものもたゞ一日穿つのみにて、傍のものに授與す。皇后は皇后樣(コーゴーサマ) Kogosama 又は女帝(ニヨテイ) Nijotei と稱へ、其衣服は他の日本婦人の衣服とは形異り、殊に髮飾は他の日本婦人には大切なるものなれど、皇后のは甚簡素にして、髮をたゞ後方に梳り、間々を置きて結び背を過ぎて足下(モト)又地まで浪(ウ)ねりて垂らすなり。宮妃たちは一種の袴の如き服を着け、其色紅なるため緋の袴卽ち火袴(ヒノハカマ) Feuerhose と稱ふ。

六月五日(○我四月三十日)晩を吾友肥後介及び其親切なる家族と過ごす。若き婦人達は前述べたる如く、頗る敎育ありて、歐羅巴風に交際するをよく

解す。日用品・食品料等は京都に於て江戸よりも價廉(ヤス)けれど、他の都市に比べては猶ほ貴し。酒は甚廉く又よし。

六月六日(○我五月一日)是迄は我使節の都合あしかりし爲め、所司代と兩町奉行とに往きて謁するは今日に延ばされ。午後に麗かなる日光の下に我旅舍より右等高官の城に向ひたり。我旅舍の前には多衆の人民集合したるが(○享和二年紅毛人江戸參禮記事に云「下道中筋宿々に於て、見物人多有レ之。駕籠通り兼候事間々有レ之。簾などを引明け候樣之儀有レ之。泊宿などにては別て群集いたし。甚混雜自然怪我等有レ之候儀も難レ斗。阿蘭陀人共大に難澁仕候間已來は矢上宿に於て佐嘉附廻り役人衆に放逸等無レ之樣申談置。尙又宿々に於ても、宿役人えも急度申付候事」)いづれも皆外觀の賤しきものなりき。かくの如き行列の觀衆は我歐羅巴の大小貴賤打(ウチ)混(マジ)りたる民衆とは比較すべからず。此地にては高貴の人々は人民の混雜を惹起すが如き機會には、いつも身を退けて居るなり。我等は初は北へ、次に西へ、京都の町を貫き行く。市街は江戸のよりは狹く又見劣りす。藥舖の前にて多數の藥草を乾かし居るを見。その中には支那より輸入せる多量の粟 Hirse もありたり。我等は市の西部を行き、十

宇街頭の間隔に於て市を繞る山々をカナリ露はに望み得たり。我等遂に所司代の城（二條城）に至れば城は手入の餘りよくなき水隍と低き土手とを繞らし、土手の上に高さは六尺あるかなしの女堞を亘して防壁となす。大手の城門は乏しけれど、美事な松並樹ありて其直前へまで導く。そこに近く、廣き町通りを開けて、本城の周圍を取り卷き、城の女堞及び諸門を見渡すべし。我隨員及び輿丁は腕力にて諸方より迫り集まる民衆を退けつゝ通路を明けねばならず。我等は我駕籠より塵埃の雲なす中に降り立ちて、城門内の寬庭に進みしが、右に婉麗なる婦人たち、左には侯家の役人・臣下我等を驚きて見守れり。これより平靴Pantoffelになり、帽を脫ぎて、華氏八十度の炎暑に、小石を置きたる廣庭を玄關に進み。平靴を脫ぎ、極めて嚴肅に居住する用人に挨拶し。弓・鐵砲・其他の武器の掛けたる前を過ぎしが、玆にも我等を歡び迎ふべく用人の坐るを見たり。使節は此者等の前にても地に膝つきて辭儀したり。次に我等は官階に從ひて疊に列なり。膝づきて坐り、丁寧に足を衣服にて覆ひ匿す。烟草盆は著坐せる外人を迎ふる第一の記號として眞面目な顏付したる用人に齎され。我等は窮屈なる坐位を執りて頗ぶる緊張す。次に碾きたる綠茶を進めたるが。本來・是れ茶の糊と云ふべし。次に所司代の書記出で來りて、我等歐羅巴人はまたも日本流に辭儀をなさねばならず。言葉は少なくも多くの敬禮を交換したり。長き會話はこゝには無用なり。大通詞は彼の敬禮中に思ひつきしこと、又はモットよく言ふならば、彼が昔時より言ひ慣れしこと丈を、反譯するのみなり。すべて甚だ聲靜に話して、書記の言葉に對し・一々・然諾（ヘー、ヘー、ヘー）を反復して、確と了解したるむねをあらはし。猶ほ會話の終りには天候の如何を言ふことが、大切な要務なるが如くなり。それより我等は謁見室に進み、またこゝに坐し居りたるに、用人が大官臨席の信號としてカナリ強く發したる警叱 Zische とともに、所司

—（557）—

京都滯在。大坂へ歸旅

代は側(ワキ)の口(クチ)より現はれて、高き座に直りたれば、我等は深く頭を地まで屈(マ)げたるに、戸傍に坐りたる一人の侍(サムラヒ)・大聲に『和蘭人拜謁のため罷り出づ』と叫びて、使館の人々・及び我等に隨行の通詞達を順々に呼びたり。我使節は通詞及び第二の紹介者（○戸傍の侍を云ふなり）を以て禮謝の意を述べ。其意の所司代に通ずるや、彼は答の挨拶を我使節に致して侍者と共に室を去りたり。我等はそれより他の室に導かれ、茶と菓子とを饗せられたるが、其際側(ガタハラ)の方より簾 Matte を通して侯家の婦人及び他の家族どもの見物となりたり。其內數人は我等に對して色々の不審(フシン)を問ひ掛け、或は時計を持來りて何國の產なるかと問ひ、或は鳥其他に就きて同樣のことを質し、又或は晝夜平分のことなどにつきて問ふことありたり。其間余は所司代自身も婦人室より我等に目を注ぎ觀察し居るに氣付きたり。此樣にして十五分を過ごせし後、我等は所司代の宮殿を去り、兩町奉行にも同樣の訪問を了り、日本流の禮儀にかなり取疲れて

晚に近く我旅舍に歸れり（○享和二年紅毛人江戸參禮記事を見るに「所司代及兩奉行所へ御禮の節は阿蘭ヶ人三人・大小通詞・次に宿主人相並面謁之節は大通詞直にカピタン口上申上候に付、小通詞は相控居る」とあり。なほ所司代又兩奉行へ羅紗繻子又は辨柄縞など献上品あり。畢りて所司代方にては茶方を下され、兩奉行方にては吸物酒菓子山める。又此等の所より使者を以て金子物品を寄する例なり。所司代兩奉行へ進物につきては、通航一覽に京鑑投書を引きて「所司代へ持參物。一皿砂羅紗二間、一黑繻子一卷、一尺長大島海黃三反、一尺長京あれしや島二反、一珍陀酒五升、一赤へるとわん一反、一尺長べんがら島三反、一尺長類遠島海黃三反、一尺長こんてれき島二反。」兩奉行所へ持參物一尺長辨柄島三反づゝ、一尺長島海黃二反づゝ、一上田小金巾二反づゝ、一尺長大海黃二反づゝ、一尺長きか。ん島一反づゝ、一珍陀酒五升づゝ。右之通、年により進物數少づゝ相違有レ之候得共、大方例年此格を以持參申候」とあり。）

京都の商品

我等が通り行きし町通りは總體に快からざる外觀にして、特別に富みたりとは見えず、中には貧しく乏しきもあり。家屋は大部分・手入あしく、多數の商店は小賣店と互み代りにある也。商店に陳列されたるは陶器・烟草・烟草道具・燈具・乾魚・海藻・神佛具・珠數・古き新き衣類・染料・漆器・藁細工・書物・刀劍・布類・筆・紙・鐵の器・眞鍮の器・銅の器・將棊其他遊戲品・樂器・薄く惡き硝子の器・草鞋等にして、猶ほ蔬菜・果實もあり。果實には枇杷・密柑・杏・及び乾きたる果實あり。此地にては屢〻牛車を用ひ、牛の上に張りたる帆は牛を日の暑熱より遮ぎり護るなり。

シーボルト江戸參府紀行

京都滯在。大坂へ歸旅

智恩院

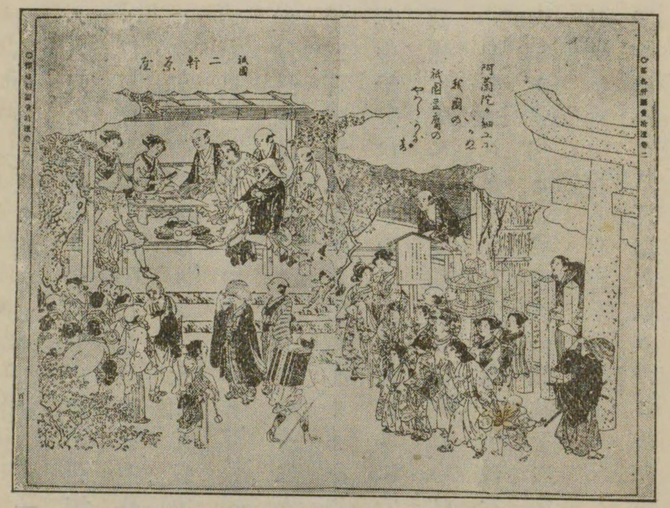
六月七日（我五月二日）今日は我京都出發の日取なり。我等は正午に近く三條橋を越えて、智恩院（チオオンイン）Tsjonin に向ふ。一大建物に三千疊を敷くに足り（○寺の總建坪を云ふならん）今司配する將軍家の創業者の紀念牌あり（○德川家康の位牌あり。此寺は德川家の開基にて德川家代々の位牌あるなり。）

祇園社

こゝより神道の社祇園（キオン）Giwon に行き、料理店にて非常に多數の見物人に取卷かれつゝ少飲して後、（○祇園社の南、華表の內に、東西二軒茶屋（中村屋藤屋）と云ふあり。つれに豆腐を剪りて田樂の形とし、此にて酒飯を賣る。金一分を與ふれば中居女豆腐の曲切をなす。秋里籬島の都名所圖會に「阿蘭陀人洛東通行の時、東刀の茶屋にやすらひけるも流行になりしといふ」とあり。又其繪を添へたり。シーボルトの寵ひたる次頁の圖參照すべし。）

清水寺

天臺宗の清水寺（キヨミヅ）Kiomisu に行く。京都市の西北部を俯して立派な眺望は我前に展開したり。禪宗の高臺寺（コーダイジ）Kodaisi・眞言宗の大德寺（ダイトクジ）Daidokusi・一向宗の醍醐寺（ダイゴジ）Daikosi・淨土宗の大恩寺（ダイオンジ）Daiwonsi（○京都の西北部に同名の寺なし。東北部には此名の寺あり）等が百年の古樹の梢より、幅廣く重々しき屋根を挺き出だすを見別けたり。此處（コヽ）より細徑は手入のよき大墓地に沿ひて綺麗なる大谷寺（オーダイ）Odai に通じ、（○原文オーダイトとあれど大谷なること疑なし）それより名高き大佛（ダイブツ）Daibutsu の寺に至る。其



第三十七圖　祇園の二軒茶屋（補）（都名所圖繪より）

シーボルト江戸參府紀行

は數百年前に燒失したるにて、我等は燼餘の柱梁と鐘を鈎るせし鐵輪・鐵肘極巨大なる淨蓮花の葉・屋根瓦等を見しが。人をしてすべて偉大なる建築物の面影を思ひ出でしむ（○京都大佛の寺は方廣寺なり。大佛は天正十四年豐臣秀吉の建造なるが、慶長の地震にて倒壞し、秀頼更にまた建造して同十七年に落成し、其後その儘にてありしが。寬文二年に其鐘を破壞して錢に鑄したるなり。これは此旅行の時より六十餘年前なり。數百年前に燒亡とは奈良の大佛が治承中に燒失せしを誤りたるか。）我等は有名なる大閤（ダイコー）Taiko の墓所を尋ねしが、そは余の驚異したる程、手入れ疎末にして、殆んど世に忘れられた

るかの如く、且つ極めて簡素なり。一ヶの方形なる石壁の上に高さ凡そ八尺の墓碑ありて、四方に竹の生垣を繞らしたり。その位置は現世とは思はれぬ程に美しき景勝を占めたり。我等は其近傍にある茶亭に於て葡萄酒とセルテル水にて氣力を復し。それより直徑八尺の大鐘を見。次に**三十三間堂** Sanju-san gendo の寺を訪ひたり。三十三間堂は豊太閤（○豊公の建設にあらず、寺は後白河法皇の立願にて、蓮華王院と云ふべし）の建てたる名刹の一なり 三萬三千三百三十三佛體にて名高く。そこには實に多數の彫刻像を置き。其中千體は活きたる人の大きさにて、中には非常に巨大なるものあり。佛像は縦に十體宛前後に排列し、それに並びて横に長く行列し、横列の中央の方には非常に大いなる佛像を置きたり。此寺の後にて國中の大家が常例として弓矢の競技をなすと云ひ、的は六十六間の距離にあり。

我等はかゝる迂路を取りたる後に旅行を**伏見** Fusimi（フシミ）に續けしが、余の

友人肥後介は余をこゝに待受けたり。余は猶ほ彼と二三余の研究することにつきて打合すことあるなり。こゝにて夜食し、**大阪** Osaka 行の舟に乗り、有名なる**淀河**（ヨドカワ） Jodogawa を下る。こゝには西南日本の諸侯の屢〻通旅するために設備の甚よき船あり。それは和蘭の所謂トレクショイテン Trekschouten（○和蘭の運河を曳く船馬にて）を想ひ出させ、その特別室に關しては彼此（カレコレ）何れを勝れりとも云ひ難し。間もなく夜に入りて前々より我等の注意を寄せし此地方の佳景をは暗闇（クラヤミ）に包み隱したり。夜明くれば、我等が既に大阪を距ること遠からぬこと、城上の白き塔がそこの鮮な緑の中より我等を窺（ウカガ）ふが如く見ゆるによりて知るべし。日本の都市及び前驛の周圍には多分は庭園あり。寺社の境内あるがために、總體に遠く打開きたる公園の施設してあるが如し。我等は多數の大橋梁下を漕ぎ行き、河の兩岸は家屋にて塡められたるを見つつ、市の中央に到りて陸に上りたり。

十一　大阪の滞在

概目。大阪の記述。城。穀物の收穫。神社。住吉大明神。最古の佛寺なる天王寺。巨大なる寺塔。庭園、植物の栽植。銅の精製。大阪の劇場。演劇の略記。

大坂の河川堀割

大阪は日本第一の商業都市にして、船入の多き淀の河畔にあり。淀河は市の北部を貫流して後は、安治川（ヤジガワ）Asikawa・木津川（キヅガワ）Kitsugawa の二岐に分れ、木津川又數本に分れ、其中の最大なるを尻無川（シリナシガワ）Sirinasigawa と云ひ皆共に海に注ぐ。市の西南・海に向へる部分は多數の掘割と土手とにて分割されたり。堀割は深く市内に入り込み。其中廣きは市の周圍を繞り、他の市部もカナリ左右均同に狹き掘割にて取卷かれ又區劃せられたり。此大都會の築造方より考ふるに、其大部分はこゝに滙集する多數の水流並びに海濱より利潤を收め得るものと推すべし。河川溝渠を打越えての連絡は手入よき橋と橋よりも多數の渡（ワタシ）とにて容易なり。

橋梁

橋梁は凡そ百五十八もあり。最も注目すべきは天滿橋（テンマバシ）Tenmabasi・天神橋（テンジンバシ）Tenzinbasi・難波橋（ナニワバシ）Naniwabas の三橋にて、ともに淀河に架したり。市は三大區に分れ。北組（キタグミ）Kitakumi（北區）・南組（ミナミグミ）Minamikumi（南區）・天滿組 Tenmankumi（天滿區）と云ふ。

第一の區には二百五十ヶ町あり。第二の區には二百六十一ヶ町あり。第三の區には百九ヶ町あり。市の西北部に有名なる城池あり。太閤の建築なりしが、久からずして家康（イエヤス）Ijejasu・秀賴（ヒデヨリ）Hidejori 間の血を流せる戰爭の終りし後、家康の命令にて、其大部分は取崩され。今はたゞ其時の内城が少しく改築されて殘るのみなれど、なほ頗る堅固にして全國